

アルプスの薫風

— 家族 —

横井 秀治

目次

- 第一章 ドイツからの知らせ
- 第二章 父と子の対話
- 第三章 よみがえる記憶
- 第四章 未来へ向けて
- 第五章 スイスアルプスへ
- 第六章 まさか：
- 第七章 知らねばならない
- 第八章 エゴイストよ
- 第九章 弁護士からの手紙
- 第十章 真相を明かす
- 第十一章 山湖に映る二人
- 第十二章 背中のお話
- 第十三章 ハナの沈黙
- 終章 『共に』の中で

第一章 ドイツからの知らせ

シャワーを浴びた拓郎は、冷房の効いたリビングルームに行き、黒い革張りのソファに深く腰を下ろした。彼の前には、娘の薫が父のために仕度したビール瓶とコップ、それに今日配達された十通近くの封書が、厚いガラスで作られた低いテーブルの上に並んでいた。手紙の中には、縁が赤と青色に塗られた外国からの便もあった。彼は早速それを手にして、封を切った。

「一年ぶりに、父さんに便りを出すことになりました。机に向かって便箋を前にすると、ペンがなかなか進まなくなってしまうのです。でも、今日は最後まで書き続けます」

拓郎は水滴のついたビール瓶を取って栓を抜き、それをコップに少し注いでから一気に飲んだ。冷えたビールが乾いた喉から胃に伝わると、彼の顔が一瞬、綻んだ。再び、手紙の文字に目を移した。

「長く考え抜いてきたことを、ここに知らせます。今それを伝えないと、あとで取り返しのつかないことになって、父さんを悩ますことになると思っただけです」

息子がドイツに留学して四年が過ぎたので、そろそろ大学を卒業するとの知らせだと想像した彼は、そこまで読んで一体何なのだろうと首を傾げた。

「二年半前から付き合っている女性がいいます。彼女の名前はハナと言い、スイス人で、僕と同じ二十九歳です。その彼女と結婚することに決めました」

結婚という文字を見るや、拓郎の目が丸くなった。と、その時、薫が自分で作ったキムチの盛ってある小皿を手にして、キッチンから出てきて、

「今日届いた封書のなかに、お兄さんからの手紙もあったでしょ。あつ、今読んでいる最中ね。何て書いてあった？」

と云ってから、父の前にあったソファに腰かけた。そこは、五年前までは彼女の母がよく座っていたところだった。

父は娘の問いかけには答えず、手紙文に目を注いでいた。

「何て書いてあったの？」

薫が再び訊いた。

「うるさい。今、読んでいるところだ」

父はいつもよりも一オクターブ高い声を出した。ちょうどその時、大正時代に製造された、一分の狂いも生じない柱時計が夜の十時を告げた。その時計は、十五年前に古い木造住宅から新しい鉄筋住宅に変わった家には不似合いだったが、拓郎の妻芳子が大事に手入れをしていたものだった。

時計の鳴る音を耳にしながら、薫はお皿からキムチを箸で摘まんで口の中に入れ、

「キーンソンおばあちゃんが作ったものと同じ味だわ」

と小さな声で言い、再びキムチを口に運んだ。父は目を凝らして、息子が書いた手紙を読み続けていた。

「父さんの期待に反することになってしまいました。この一年間考え続けた結果、ハナと一緒にすることが、僕の幸せになるとの結論に達したのです。彼女が住んでいるスイスの山村に引っ越しすることにしました。自分の部屋に在る荷物の半分以上は、もう向こうに

送りました」

薫は父の眉間の皺が深くなっていくのを見て、もしかして、兄はあのことを書いたのだろうと知った。今、父の前にいることはよくないと思った彼女は、静かに立ち上がった。娘がいなくなったのも知らずに、父は便箋に目を注ぎ続けていた。

「ここまで書いて、父さんの怒りの声が聞こえてきそうです。ドイツに来て、美術専門大学に通い出し、卒業したあとは父さんの仕事を手伝うことになっていましたが、それができなくなってしまいました」

思いもしない息子の知らせに、父は息を呑んだ。

「父さんとお母さんとの約束を果たすことができず、それがとても心苦しいです。でも、お母さんは許してくれるように思うのです」

彼の目が三角に変わった。

「こちらに来て、二年が過ぎたころから、貴金属や石を扱うこの仕事は自分には適してないと思うようになったのです。でも、何とか好きになろうと、夜遅くまで大学の工房で制作活動をしていました。しかし、やればやるほど、自分には向いてないと知り、これが自分の一生をかけてする仕事かと思うと、空恐ろしくなったのです。そのような折、友人に誘われてスイスの山奥のスキー場に行き、そこでハナと出会ったのです。僕がプファルツハイムに住んでいると話したら、彼女の母も、昔、プフォルツハイムにいたと語ったのです。そこから、話が弾んでいきました」

拓郎は、テーブル上で泡だけが残ったコップに手を伸ばしてから、そこにビールを再び注ぎ、首を少し上向きかげにしてそれを飲んだ。が、一口目に飲んだビールとはまったく違う味に顔を歪めた。

彼は再び便箋の文面に目を集中させた。

「大自然のなかで暮らしているハナの生き方に感動した僕は、半年間、彼女と文通をしていました。そのあと、彼女のところにしばしば行くようになったのです。ここでハナのことを書いても、父さんの怒りがより増してくるような気がするので止めにします。もし彼女のことを知りたいなら、薫に聞いてください。薫には、しばしばメールを送っているので、ハナの写った画像もあるはずです」

拓郎は息子の書いた文字を追い続けた。

「父さんに相談もせずに、このようなことになって申し訳ありません。でも、これが自分にとって、一番いいと思ったのです。僕はハナと結婚します。七月になったら、彼女が経営しているペンション兼レストランで働くことにしています。」

六月二十日 正樹

息子からの手紙文を読み終えた拓郎は、ソファアに背を深くもたれかかった。彼が座っているところから大きな窓を通して、月に二回ほど庭師が来て、手入れをしている庭がよく見えるのだが、そこには目もやらずに、腕組みをしながら柱時計のほうに顔を向け続けた。

しばらくすると、彼はコップに残ったビールを飲み干さずに立ち上がり、息子が書いた便箋を持って二階の娘の部屋へ向かった。

ドアをノックする音を耳にした薫が、

「はい、どうぞ」

と、応えた。父がドアを開けると、娘はちよūd博士号論文をパソコンで操作している最中だった。父の姿を見るや、彼女は画面のスイッチを切った。

一週間前に還暦を迎えた拓郎は、すこし腹の出た姿勢で一人用の藤椅子に腰かけた。と、ギーと軋む音が一瞬、室内に響き渡った。

「お父さんがわたしの部屋に来るなんて、珍しいわね」

薫は椅子を回転させ、父のほうを見ながら言った。拓郎は、手にしていた息子からの手紙に目を注ぎながら、

「正樹が結婚しようとしていることを、おまえは知っていたのに、それをなぜ黙っていたのだ。何という名前だったかな」

と声を出し、便箋からその文字を見つけ出そうとした。

「ハナさんという名前よ。お兄さんから送ってくるメールのなかで、彼女のことは何度も出てきたわ。スイスの女性で、わたしより二つ年上かしら。お兄さんと同じ年齢で、誕生日も同じらしいわ。おもしろいことに、わたしと同じように右の耳たぶに大小二つのホクロがあるのよ。お父さんにもあったわね」

「そんなことはどうでもいい。正樹は、高森時計・貴金属三店舗の後継者だぞ。それがスイスで暮らそうなんて！。何のためにドイツの美術大学へ行ったのだ。結婚の相手を見つけたためだったのか！」

拓郎の声が、次第に荒くなっていった。

「そんなこと、わたしに言われても」

薫は、目がつり上がっている父の顔を逸らしながら低い声で呟いた。彼女は父に話そうかどうか一瞬、迷ったが、思い切った。

「一年前から、お兄さんはそのことで悩んでいたわ。わたし宛の手紙とメールから、それはよくわかったわ。お兄さんはたしかに小さいころから、いろいろな石を集めるのが好きだったわ。でも、本当に貴金属を扱う仕事をしたかったのかどうか。日本の大学では哲学科に籍を置き、勉強していたわ。将来は、その方面に進みたかったのではないかしら」

そこまで言って、薫は黙った。父は何も言わずに、椅子に座っている娘の顔に目をやり続けていた。

しばらくすると、娘が口を開いた。

「お兄さんは、お母さんが脳腫瘍で倒れ、亡くなる前にお母さんの希望を叶えるために、

『あとを継ぎます』と言ったように、わたしには思えたわ。優しいお兄さんのことだから」

父はなおも娘の顔を見続けていた。

「ハナさんという人、山麓の小さな村でペンションを営んでいるらしいわ。お兄さんはそこで彼女と一緒に働いていくそうよ。登山が、自然が好きなお兄さんには、いいのではないかしら。大学時代は山登りのクラブに入っていたし」

それを聴いた父は、甲高い声を上げた。

「何を言っているのだ！ 店のほうはどうなる！」

「お兄さんはそのことを気にして、わたしが考えを変えて、お店を継ぐ意思はないかと手紙に書いてきたわ。でも、わたしは大学院でドイツの戦中・戦後の歴史を学んでいるし、将来は大学で働く積もりよと返事を送ったわ」

「最初から、おまえにはそれを期待していない。おまえもそうだが、正樹も勝手だ」

「お父さんこそ、勝手だわ」

「おまえも、母と同じことを口に出すようになったな」

そう言ってから、拓郎は黙った。彼の実母キーンソンから、「あんたはまわりのことを考えずに、自分のエゴを貫くところがある」と何度も言われたことが蘇って、口を噤んだのだった。

拓郎は藤椅子から立ち上がり、娘のところへ寄った。

机の上には、博士論文に必要な資料とパソコンが置かれてあった。そのパソコンを見ながら、父が言った。

「正樹からのメールを読みたいが、いいか」

「それは」

薫は一瞬、躊躇ったような返事をした。が、見せたほうがいいと思った彼女は、「では」と言っ、パソコンの操作をはじめた。拓郎は立ったまま、息子の手紙に目を落とし続けた。

娘に代わって、父がパソコンの前に腰かけた。その父に、薫が言った。

「これは二ヶ月前にもらったメールよ。それと、ここをクリックすると、ハナさんの姿が映るわ」

長いメール文を読み終えた拓郎は、クリックしようかどうか迷った。スイス女性、それは自分の過去を想い出すことに繋がるからだ。しばらくの間、決め兼ねていたが、押した。隣で立っていた薫も、画面に写り出されたスキー場で撮った二人の写真に、腰を屈めながら観た。

「背筋がびんと伸びて、均整のとれた人ね。お兄さんと同じくらいの背丈かしら、百八センチはあるわね。ここをクリックすると、顔がクローズアップするわ」

薫が押した。

「髪の毛は明るいブラウンね。目鼻が整っていて、とてもきれいだわ。ほら、右の耳たぶのところは二つのホクロが」

拓郎は大きく映し出されたハナの顔を、目を凝らすように見つめ出した。薫が次の写真をクリックしようとすると、父が、

「待て！」

と声を上げた。

「どうかしたの？」

「いや、昔」

そこまで言っ、拓郎は言葉を濁した。

「彼女の苗字は何というのだ？」

「知らないわ。それがどうかしたの？」

「いや、何でもなし。とにかく、結婚には反対だぞ。そのことをメールで正樹に伝えておけ」

そう言葉を残して、父は椅子から立ち上がって部屋を出た。

翌朝、父は豆腐入りの味噌汁を手にしなが、前にいる娘に言った。

「一週間後に、正樹のところへ行くことにした」

「えッ、本当なの？」

薫は自分のお皿に盛った玉子焼きを箸でつかむのを止めて、父の顔を見た。

「正樹と、話をしなければならぬからな。勝手なことは許さん」

そう言いながら、拓郎は味噌汁を飲み出した。

「でも、お兄さんは決心しているし、荷物はもうスイスに送っているわよ」

娘は父の顔を見続けながら、玉子焼きを口に入れた。二人の間に沈黙がしばらく続いたあと、父が娘に、

「今日中に、航空券の手配をしてくる」

と言うと、薫は箸の動きを止めて父のほうに顔を向けた。

「わたしも行きたい。大学院の授業は明後日で終わりだし、ドイツに再び行ってお兄さんにお願いでいた、わたしの論文に必要な資料を直接受け取りたいわ。それに、ハナさんとも会ってみたいし」

父はすぐに返事をしなかった。が、芳子が脳腫瘍で倒れ、それも悪性なこともあって、あつという間に亡くなってしまった妻の病床で、よく見ていた薫の姿が彼の頭の中をよぎった。

「あと一年半で、博士課程を修了すると言っていたな。よし、わかった。連れて行こう」

「ほんと！ わたしの論文は日本では少し敬遠されるテーマだけれど、是非書きたいのよ。キーンソンおばあちゃんと約束したこともあるし、どうしても書き終えるわ」

「そうか」

「論文を提出したら、お兄さんのところにお金を貯めて行こうと計画していたのが、こんなに早く実現するなんて！」

薫は悦びの声を上げたあと、味噌汁を飲み終えた父に言った。

「お父さんは若いころ、お母さんと結婚する前、ドイツに長く住んでいたわよね」

「ああ、五年ほどな」

「お兄さんが住んでいるプフォルツハイムにも、長くいたのでしょ？」

「ああ、あそこはいいところだったな」

「お兄さんからの手紙でも、黒い森地方北部に位置して、空気が澄んでいいところだと書かれてあったわ」

拓郎は、黒い森という言葉聞き、一瞬体が浮いたようになった。

「とにかく、ドイツ滞在は一週間の予定となるが、薫はもつと長くいてもいいぞ。大学卒業と修士課程修了の祝いもしなかつたので、これで穴埋めとしよう。パスポートは持っていたな」

「ええ、高校のとき、キーンソンおばあちゃんと一緒に韓国に一度、それに大学時代にミュンヘン大学に交換留学生として一年間滞在していたので、そのときに使ったパスポートがまだ有効だと思わ」

薫は父と旅行をしたことがなかった。彼女に限らず、家族の誰もが父と一緒に今日に至るまで、一度も旅行をしたことがなかった。

拓郎は高校を卒業するまで、韓国人の母と日本人の父に育てられ、その両親は野菜と果物をライトバンに積んで、毎日売り回ることをしながら、何とか生活費を捻出していた。

ソウル市近郊の小さな村に住んでいた彼の母は、十八歳の時に、日本軍に服役していた

炊事当番の父と知り合い、結婚して、戦後日本に来たのだった。母はものをはつきりと言う性格で、それも感情が伴っていたので、父とは口喧嘩を子供の前でよくしていた。その父は酒好きで、酔って家に戻ってきた時は二人の争いは特に激しく、簡易的長屋に住んでいたこともあって、二人の争い声は近所の人には知られていた。

その二人の中で育った拓郎は、感情的にものを言う、母のような女性とは自分は決して結婚はしないと決めていた。彼には韓国名もあったが、それをつかったことが無く、母が韓国人であるのを自分から言ったことは一度もなかった。というのも、地元の公立中学校時代、同級生から「朝鮮人」とからかわれ、嫌な思いをしたからだだった。

彼には、一人の妹がいた。その妹は、兄とは反対に、普段でも韓国の民族服であるチマチヨゴリを着て、名前もソンヒと韓国語で通し、朝鮮学校によるこんで行き、母を慕っていた。また孫である薫は、自分の家からキーソン祖母の住いまで歩いて二十分もかからないこともあってか、週に三、四回は祖母のところへ遊びに行っていた。そのようなことで、薫は日常的な韓国語は理解していたし、情が深く、家族・親族を非常に大切にする祖母を好んでいた。もちろん、祖母は孫の薫をすこぶる可愛がっていた。

一方、正樹は小さい頃に母から聞き知った山登りの楽しさに夢中になって、祖母と接する時間はそうなく、祖母との関係は薄かった。

貧しい家庭で育った拓郎は、自分の希望で日本の中学と高校時代に通い、成績は優秀だった。特に、英語はすば抜けて、語学の才はあった。経済的な理由で、国立大学でしか学ぶことが許されていなかったもので、東京外国語大学を受験したが、不合格に終わってしまった。私立大学に支払う入学金と授業料は、家には無かった。

高校を卒業した彼は、証券会社に勤めたが、そこを一年で辞めた。それからというもの、賃金がより得られるところを追い求めて、職場を転々とするようになった。時が経ち、高森時計店の跡継ぎの一人娘である芳子と結婚。日本の高度成長期の波に乗り、目黒の他に、五反田、品川に店舗を持つ身となった彼だった。店の拡張はかなり強引なところがあった、強いものが勝つといったやり方で商いを営んできた。

彼は金銭に厳しいところがあった。息子の正樹には、ドイツで暮らすためのアパート代と食費代などの生活費として月々七万円を送金するだけだった。それだけでは足りなかった。正樹は大学の研究室で鉱石を磨くアルバイトをしながら日夜勉強に励んでいた。彼にとってはまったく新しい分野なため、大変な努力をしていた。ドイツの大学は、授業料が無料だった。

また、父と一緒に住む薫も、娯楽費は家庭教師で得た収入でまかなっていた。金銭的に、甘えを許さぬ父だった。それと言うのも、貧しい家庭の中で育った彼の経験から、人が自立して自由になることは、金の価値を知って、それを自分の人生の目標にすることが大切だと信じていたからだだった。控えめな妻の芳子は、拓郎のそのような考えに反発を覚えていたが、いつも夫に押し切られていた。

皿に残った最後の玉子焼きを食べ終えた父が、娘に、
「今日中にドイツ行きの飛行機便を予約するから、薫が帰る飛行機便をいつにしたらいのかを、目黒の本店に知らせてくれ」

と言葉を残してから、彼は前に置いてあるお茶も飲まずに椅子から立ち上がり、自分の部屋に戻った。

十五分後、半袖のワイシャツにネクタイ姿の拓郎が、キッチンで朝食の片付けをしていた娘のところに来て言った。

「今夜、家に戻ってから、正樹に電話をかけることにする」

「わかったわ。そのことをメールでお兄さんに伝えておくわ。いつものように、九時半ごろの帰宅でしょ？」

「ああ、そうだ」

拓郎はそう答えてから、広い庭の敷地内に駐車してある、十五年間も乗り続けているドイツ製のベンツ車で職場へ向った。薫も一時間後、山手線の電車に乗って、目白駅近くの大学へ向かった。

夜の十時前、リビングルームで本を読んでいた薫は、家の前で車が停まる音を耳にした。

しばらくすると、ポロシャツ姿に着替えた父が娘の前に現れた。

「夜も暑くなつたな。ビールを持ってきてくれ。それに、何かつまみもな」

そう声を出してから、ソファーに腰かけた。五年前に母が亡くなってから、朝食と父が寝る前に飲むビールのつまみの仕度をするのが、娘の役割だった。彼女は時々エゴが強く出る父と、口喧嘩をする時もあったが、ひとりで旅に出かけ、ドイツ語の新聞と雑誌を毎日読む父の姿に、そう嫌な顔を向けてはいなかった。彼女が文学部のドイツ語圏文化学科に入学したのは、父の影響もあった。

拓郎は冷蔵庫から冷えた豆腐とビール瓶を持ってきた娘に、

「二人分の航空券が取れたぞ。正樹に電話をかけたかったので、受話器を持ってきてくれ」

と言ってから、自分の住所録の手帳をめくり出した。

ダイヤルを回すと、正樹がすぐに出た。が、父は本題のことにはまったく触れずに、一週間後にそちらへ行くことだけを伝えてから受話器を置いた。

薫は、父と兄の激しい口論になるのではないかと想像していたのだが、そうはならなかったので小首を傾げた。

第二章 父と子の対話

「あと一時間したら、フランクフルト空港だな」

「十一時間近く飛行機に乗っているけれど、そう長く感じないわね」

「おまえは、よく眠っていたからな」

拓郎はそう言い、プラスチックのカップに入っているコーヒーを飲んだ。

「お父さんは、寝なかったの？」

薫が父の横顔を見ながら訊いた。

「ああ、あれこれと考えていたからな」

そう応えてから、拓郎はカップに残っていたコーヒーを惜しむかのようにすすった。その様子には、ドイツ行きがたのしいかのようにも、薫には思えた。今までにない父のようにも映ったのだった。その父に、娘が言った。

「お父さんがコーヒーを飲むなんて珍しいわね」

「若いころは、毎日飲んでいたぞ」

芳子と結婚してからは、彼女の好きなお茶を飲んでいたのでコーヒーから遠ざかっていった拓郎だった。

しばらくすると、娘が再び父の横顔を見た。

「お父さんは若いころ、飛行機に何度か乗ったのでしょ。最初に乗ったのは何歳のときだったの？」

「二十四歳だったな。船でナホトカへ渡り、そこから列車でハバロスクへ行き、そこでプロペラの飛行機に乗ってモスクワまで飛んだのだ。目的のドイツに着いたのは、六日目だったな。当時ヨーロッパへ行くのに、それが最も経費のかからない安いルートだったのだ」

「そんなことがあったの？」

「おまえたち二人には、当時の話をしたことがなかったな」

そう言った父の顔に生き生きしたものを感じ取った薫は、父の若い頃がどのようなものだったのかに関心を抱きはじめた。

「仕事で？ 旅行で？ グループで行ったの？」

「いや、ひとりでドイツに行ったのだ。当時は、ヒッピーの最後の時代だったな。薫は、ヒッピーという言葉を目にしたことがあるか」

「もちろんよ。一九六〇年にアメリカで現れ、既成の社会秩序・文化・習慣から抜け出して、自由に生きようとする若者たちのことでしょ」

「父さんはヒッピーと意を違えていたが、似たようなところもあった。当時の貧しい自分の暮らしから、開放されたかったからな。何でも自分の思い通りにやりたかったのだ。まわりを気にせずにな」

そう話した父に、薫が、

「なぜ、ドイツに行ったの？」

と、父の横顔を見ながら訊いた。父は言おうかどうか迷ったが、自分の過去を子供に伝えておくのもいいかなと思ひ、話し出した。

「高校を卒業したあと、職場を転々としていたときだった。ある一人のドイツ人の青年シユミットと渋谷のビアガーデンで知り合いになり、彼と親しく交わるようになった。それからというもの、彼が育ったドイツの地に関心を持つようになったのだ。日本とは違う社会があるように思えたからな。外国人労働者が多くいて、金を稼げるとも彼が言ったな。それを体験したくて、ドイツへ行こうと決心したのだ。それからというもの、ドイツの渡航費の金を貯めるようになったのだ」

拓郎はさらに続けた。

「そして、ドイツ語を勉強するための半年間の滞在費を貯めてから、その親しくなったシユミットが住むハンブルクへ行ったのだ。そこで徹底的にドイツ語を学んだな。それでドイツ語ができるようになった。また彼のおかげで長期滞在ビザも取れた。しかし、半年後、金がなくなったので、働かねばならなくなった。そこで思い切ってハンブルグを出て、ブルーメンとケルンに行き、レストランで皿洗いをしていたな。それから、これから行くプフォルツハイムでも働くようになったのだ。もちろん、公で労働することは許されていなかったが」

拓郎は遠くを見るような目つきで、若い頃の体験を穏やかで、生き生きした口調で語り続けた。それを聴いていた薫は、今までにない父を再び感じ出した。父はさらに、「そして、ドイツからアンカレッジを経由して日本に帰ったのだ」

と言ったあと、小さな溜め息をひとつ漏らした。昔のこと、それも今の自分とはまったく違う二十代の心が蘇ってきたからでもあった。

その時、飛行機がフランクフルトに着陸体制入ったとの放送が流れた。

二人が飛行場でチェックアウトを終えて外に出ると、午後四時が過ぎていた。日本を発つ前、正樹に、「迎えに来なくてもいいぞ」と言ったので、息子の姿はなかった。

拓郎はドイツの地で長く暮らしていたこともあって、また今でもドイツ語の雑誌や新聞を毎日読んでいるので、ドイツ語でのコミュニケーションはまったく問題がなかった。また薫もドイツ史の博士論文に取り組んでいて、それにミュンヘン大学での一年間の交換留学ではドイツ語会話の授業にも出席していたこともあって、ドイツ語による日常会話は不自由ではなかった。

特急列車に乗った拓郎は、目に入ってくる光景を見るとはなしに眺めていた。彼の頭の中は、正樹の結婚、それと自分の過去のことの想い出され、その二つが交錯していた。

薫は機内の小さな窓から見えたドイツの緑豊かな地が、目の前に今映り出されてくるので興奮気味だった。「再びドイツに来たのかわ」との思いで、彼女の顔はよるこびで満ちていた。

二人は、特急列車から普通電車に乗り換えた。しばらくすると、黒い森地方の景色になった。それを目にした拓郎は、懐かしさを覚えながら、次々に現れてくる風景を眺めるようになった。と同時に、若い頃にここにいた自分と現在の自分とがあまりに違うので、これは一体、どうしたことなのかと考えはじめた。

今の自分は、何者なのだ。営利を過度に追求している自分。この地にいた頃は、働いて得た金で自分の好きな旅をして、心が開放されて自由だった。それに、周りの人の親切や優しさに、ありがたさを感じたことが再三あった。今の自分はどうか。あの五年間は、自分の人生に何をもちがらしたのだ。無意味だったのか。拓郎はそんな過去の日々を思い起こしながら、車窓に映る景色を眺めていた。

列車がプフォルツハイム駅に、ガタンと音を立てて停車した。

スーツケースを持ってプラットホームに降り立った二人に、兄が手を振った。それを見つけた薫が手を振り返した。

正樹は早足で、父と妹のところへ近寄り、

「疲れたでしょう？」
と、訊いた。

「そうだな。ヨーロッパまで来るのに、昔はもっと長い時間がかかったものだったが」

そう応えると、隣にいた薫が声を上げた。

「お兄さん、ドイツにあつという間に着いたわ」

それを聴いた父が娘に言った。

「おまえは、よく眠っていたからな。目が覚めたら、もうヨーロッパの上を飛んでいただろう。おっとりとした性格は、母さんにそっくりだ」

薫は肯いた。正樹は父のスーツケースを持って歩き出した。

拓郎が駅構内を見回しながら、「以前とすこし変わったな」と誰彼にいうでもなく声を出すと、前を歩いていた正樹が父のほうに顔を向けた。

「父さんは、ここに何年ぐらい住んでいましたか」

「ああ、一年半近くいただろう。駅の建物自体は当時のままだが、正面の出入口のドアは変わったな。昔は厚い木扉だったが、今はガラス張りだ」

三人が駅舎を出ると、拓郎は急に立ち止まり、前に立つ大きな古い建造物に目をやった。

「あの大きな建物は昔のままだ。今も、ホテルとその下のレストランは営業されているようだな」

「あそこのイタリアレストランは、ピザがおいしいですよ」

正樹はそう言うてから、二人をタクシー乗り場に連れていった。

車が走り出すと、後席に座っていた薫が、左側に聳え立っている白い大きな建物を見ながら声を上げた。

「あれは教会なのでしょう。堂々としているわね」

それを耳にした父が、隣に座っている娘に言った。

「あそこに、クリスマスの日、行ったことがあったな」

それを聞いた薫は、驚いた声で訊いた。

「お父さんが教会へ？」

「ああ、ある人に誘われてな」

父はそう答えてから黙った。当時を想い出したいのか、そうでないのか自身わからなかったからだ。薫は、座り心地の良いベンツのタクシー車の窓に映る街並みに目を注ぎ続けていた。

少しすると、前に座っていた正樹が、体を半身よじりながら後席の二人に話し出した。

「僕の部屋は、父さんと薫を寝かせるがけのスペースがないので、下宿近くに建つホテルに部屋を予約しておきました。一人だったら、寝ることができたのですが、二人では無理なので」

父は黙ってそれを聴いていた。正樹はさらに続けた。

「二年前から学生寮を出て、今のところに移ったのです」

「何と言ったかな、おまえの恋人の名前？」

「ハナです。彼女はスイスに住んでいるので、大学のゼミスター休みの際は、僕が向こうに行き、それ以外のときは、彼女が時々僕の部屋に来て泊まっています。でも、ここ一年近くは、僕が彼女のところにいました」

父が何かを言おうとするのを感じ取った薫は、二人の会話に言葉を挟んだ。

「ハナという名前、日本語みたいね」

「ああ、彼女のお母さんが名づけたそうだ」

「そうなの」

タクシーは、人通りの少なくなったところで停まった。拓郎は、成田空港で両替したユーロを運転手に手渡した。

ホテルのカウンターで手続きを済ませた二人は、三階にあるそれぞれの部屋へ向かった。

拓郎は室に入るや、先ほど乗ったタクシーの車内でハナの名前が出たので、これから一気に息子と話し合おうと、一階にあるレストランへ正樹と行くことにした。薫は自分の部

屋でシャワーを浴びてから来ることになった。

父と子はテーブルに着くと、ビールを注文した。

拓郎は、前に座っている息子を正視して言った。

「正樹、ハナという娘と本当に一緒にいるのか。高森家の後継者となって店を継ぎ、おまえの新たな考えで、店を営んでいくと約束したではないか」

父がいきなりハナそして店のことを話し出したので、どのように応えていいのか、正樹は一瞬迷った。

「ええ、その積もりでこちらの美術専門の大学院で学んでいたのですが」

正樹は次に出す言葉を捜していたが、なかなか口から出てこないでいた。それを見た父が言った。

「おまえからの手紙を読んでからというもの、毎晩眠ることができなかつたぞ。母さんが生きていたら、さぞ、悲しんだことだろう。母さんの親から引き継いで、おまえが三代目になるはずなのだからな」

正樹は目を下に落としながら、父の言葉を聴いていた。

運ばれてきたビールのコップに手をかけながら、正樹は低い声で、

「済みません。でも、今となっては、どうしようもないのです」

と、声を出した。父は何も応えずに息子の顔を見続けていた。

少しすると、正樹が顔を上げた。

「お母さんが倒れたのは、僕が大学卒業寸前でしたね。そのとき、ベッドにいたお母さんと話し合って、ドイツの大学で石の装飾品について学ぶことを決心しました。しかし、プフォルツハイムに来て三年が過ぎたころから、これが一生続ける仕事かと思うと、否定的な言葉が返ってきたのです」

「それは、ハナと出会ってからのことだろう。一時的に、心が動いていたからだろう」

「いえ、違います。ハナと出会って、彼女と話をしていると、自分の進むべき道に疑問を抱いたのです」

正樹はさらにある言葉を言おうとしたが、口からそれがなかなか出ないでいた。が、思い切った。

「父さんのようになるのかと思うと」

今度は父の顔を見ずに言った。それを聴いた父は、怒りが心の中に生じてきたが、今は冷静に話すのがいいと思い、言葉を慎重に選んだ。

「だから、高級品を扱う貴金属ではなくて、おまえが主張した、若者向けの石の装飾品を取り扱う店に、今後はしていこうと話し合っただけではないか。母さんも病床のなかで、それはいい案だと言ったではないか」

息子は頭を下げたまま、聴いていた。父は前に置いてあるビールコップに手をかけ、熱くなりかけた喉に、その冷たいビールを注いだ。二人の間に、沈黙が流れ続けた。

しばらくすると、父が今までとは違った口調で、

「ハナという娘、ペンションを営んでいるらしいな」

と、訊いた。激しい言葉で何かを問われると思っていた正樹は、父の意外な声に顔を上げた。

「ええ、山奥でペンションを経営しています。両親と兄弟はいません。僕と会ったときは、

祖母と暮らしていましたが、今はその祖母もいません」

さらに続けた。

「彼女の母は、ハナが四歳のときに橋から落ちて即死しました。それ以来、彼女は祖母に育てられていました」

「彼女の父は？」

「祖母から何も聞いていないらしく、『わたしには父はいない』と言うだけで、父親のことをまったく話したがりません。ただ、母がここプフォルツハイムで働いていたときに、付き合っていた男性がいたと祖母から一度耳にしたことがあったと言いました。不運な身のハナなのです。でも、それを跳ね返す力強さが彼女にはあるのです」

それを聴きながら、父は泡の消えたビールを飲んだ。彼の頭の中は、先ほど息子が言った「父さんのようになりたくない」の言葉が耳に残り続けていた。

「その娘のことは、わかった。おまえは、本気でその娘と結婚する気なのか」

「ええ、彼女が運営してペンションとレストランを二人でやっています」

そう答えてから、正樹はさらに続けた。

「その建物は、彼女の祖父母が造ったもので、傷みが至るところに出てきています。これから修理をしながらとにかく二人でやっていきます」

今までとは違って、彼の目は輝いていた。それを聴いた父は、語句を強めながら、「山奥での暮らしは、厳しいぞ。おまえは小さいころから、山と自然が好きだったとはいえ、並大抵なことではないぞ。おまえにはできそうにないな」

と、穏やかな声で言った。息子は父の顔を見ずに、「そうでしょうか」と応えた。二人の間に再び沈黙が流れた。

ちょうどその時、薫がニコニコしながらテーブルに寄ってきて、椅子に腰かけた。

「二人の話、終わったの？ わたしはお腹が減っているわ。先ず、ドイツのソーセージを食べてみたいわ」

「話はまだ済んではないが、今日はこれくらいにしておこう」

父はビールを飲みながら、息子の目を見ながら言った。薫が兄のほうに顔を向けた。兄は頭を軽く横に振った。

ウエートレスがオーダーを取りにきたので、正樹がソーセージとフライドポテトを三皿注文した。そのあと、ウエートレスが、三人が座っているテーブルにローソクを灯した。

薫が、列車から眺めた景色を兄に語り出した。それを、正樹はビールを飲みながら聴いていた。

少しすると、薫が父に訊いた。

「明日の午後、お兄さんがわたしの博士論文に参考となるところを案内してくれることになってるわ。お父さんはどうするの？」

「ここは、若いころにいた地だ。行きたいところはある。その前に、正樹とまた話をする。それが終わったら、おまえたち二人でそのところへ行くがいい」

それを聴き、二人は肯いた。

薫が再び話し出した。

「再びドイツの地に来たわ。飛行機内では何ともなかったけれど、列車に乗ってから胸が高ぶり続けていたわ」

彼女はウエートレスが運んできたソーセージをナイフで切り、口に入れた。

「おいしいわ。この味、ドイツで食べるのが一番だわ」

三人はローソクの明かりで輝いているソーセージを口に入れながら、日本のことや正樹のここでの暮らしなどを語り出した。

拓郎は皿に盛ったものを食べ終えると、目が閉じはじめた。それを目にした正樹が、

「父さん、もう十一時半過ぎですし、疲れが出てきたのではないですか。部屋で休んだらどうですか。僕と薫は、もうすこしここで話をしていますから」

と言うと、父は首を縦にふった。

「明日は、僕の住んでいるアパートに来てください。ここから歩いて十分もかかりませんから」

それを聴いた父は、椅子から腰を上げてレストランから出た。

第三章 よみがえる記憶

拓郎と薫がホテルの朝食をちょうど済ませた時、正樹がやって来た。

「おはよう」

そう声をかけて、二人が座っているテーブルの席に着いた。

「おはよう、お兄さん。ドイツのパン、久しぶりだわ。丸型のパンを三つも食べてしまってたわ」

妹はニコニコしながらそう言い、兄に話し出した。

「朝六時に目が覚めたので、外に出てみたわ。近くに立つプラタナスや西洋クリ、それに菩提樹のふさふさした緑の下を歩いていたら、とても清々しい気持ちになったわ」

それを聴いた正樹が妹に言った。

「ここら一带は、広葉樹が多いところなのだ。郊外に足を延ばすと、樅の木やトウヒなどの針葉樹の木々が立ち並ぶところとなるよ」

「黒い森と呼ばれているところね」

「うん、そうだ。ここは黒い森地方の北部だからね」

そう言うってから、正樹は父に顔を向けた。

「たしか、父さんはその森近くに住んでいましたよね」

「ああ、街を見下ろせる高台に、おまえとこれから話をしたあと、そこへ行くことにしている」

拓郎は昔慣れ親しんだパンの味に郷愁の念を覚え、機嫌よさそうな顔で言った。

三人は一緒にホテルを出て、正樹の住んでいるアパートへ向かった。

「ここがお兄さんの部屋なの。ものがなくてガランとしているわね」

妹が、室内を見回しながら言った。

「多くは、もうハナのところを送っているからね」

拓郎と薫は、簡素なソファに腰かけた。壁には大きなポスターが貼ってあった。

「お兄さん、あの山はスイスなのでしょ？」

「うん、ハナが住んでいる地方の山だよ」

「まあ、そうなの。景色のいいところね。行ってみたいわ」

薫はそう言うことから、父のほうを見た。父は黙っていた。

「あら、あそこにリュックサックと山靴があるわ。お兄さんのでしょ？」

兄は肯いた。拓郎は立ち上がり、本棚にいくつも並んでいる山の暮らしに関する本から一冊を抜き出し、それを手にしてゆっくりとソファーにまた腰かけた。薫は木のテーブルにあった何枚もの写真を手に取った。その中の一枚に、彼女の目が留まった。

「この人がハナさんね」

「ああ、そうだよ、髪の毛の色、肌の白さ、鼻の高さを除けば、薫とよく似ているぞ。とくに、顔の輪郭はね」

「そうかなあ。わたし、こんなにきれいではないわ」

薫はソファーに座って本を読んでいた父に、その写真を手渡した。拓郎は本から目を離して、それを観た。と、彼の目が大きくなり出した。特に、民族衣装を身につけているハナの服に、目を注ぎ続けていた。

「お父さん、どうかしたの？」

娘が、なおもその写真を見続けている父に訊いた。

「何でもない」

拓郎は手に持った写真から目を離した。しばらくすると、父が息子に訊いた。

「ハナの苗字は何というのだ」

正樹は、父が自分の恋人に関心を持ったのだと思った。

「マイヤーです」

彼は声を少し高くして答えた。それを聴いた拓郎は、「顔といい、あの服といい」と周りに聴こえないくらいいの声を出し、テーブルに置いてある茶碗に手を伸ばした。そして、生温いお茶をグツと飲み、湯のみ茶碗を手にしたまま、ソファーに背を深くもたらせた。

薫は、写真に映っている草原のお花畑がどこなのかを兄に訊いた。正樹はそこには何度も行ったと言い、その景色がどのようだったかを語り出した。

しばらくすると、父が正樹に言った。

「これから、昔暮らしたところが、今どのようになっているかを知りたくなったので行ってくる」

それを聴いた薫が声を出した。

「お兄さんとの話し合いはどうするの？」

拓郎はそれには返事をしなかった。

「タクシーを呼んでくれ」

父が息子に言った。正樹は電話帳でタクシー会社の番号を調べてから、そこに連絡をした。

「すぐにタクシーは来ます。父さんが戻ってくるまでには、僕と薫とで昼食を作っておきますから、一時までには帰ってきてください。道に迷わないように」

「昔知ったところだ。迷うことはない」

そう声を出してから、拓郎はアパート前に停まっていたタクシーに乗った。車の中で、

彼は、「マイヤーと言う苗字は日本でいうと、鈴木や田中にあたる姓だ。よくある名前だ」と自分に言い聞かせるように呟いた。

車が高台を走るにつれて、拓郎の頭の中は昔のことが浮かびはじめていた。

十分ほどすると、彼は運転手に、「ここで停まってくれ」と言ってから車を降り、見慣れた通りを歩き出した。

百メートルほど行くと、昔住んでいた家が彼の目の中に入った。と、拓郎の胸は時めきはじめ、足が自然と速くなり出した。

一戸建ての古い家の前に立った。壁には、五センチぐらいの白い小さな木片が魚の鱗のように貼ってあり、屋根には黒色の平たい石がのっけていた。この地方独特の木造建ての家。

拓郎はその建物を見つめたあと、広い庭に目を注いだ。そこには、リンゴとプラムの木が一本ずつ立ち並び、太陽の光を浴びた熟した実が赤と紫色になっていた。その光景を懐かしむかのように、彼は眺め続けていた。

少しすると、玄関から一人の男の人が出てきた。その人に、拓郎が声をかけた。

「今から三十年前ごろ、この家で下宿していたことがあってね。当時、ここにハウグ夫妻が住んでいたが、今どうしているのだろうか」

「十五年前にハウグさんが、そして十年前には奥さんが亡くなってしまい、今は私たち家族が住んでいるよ」

「当時、庭の仕事を手伝ったあと、リンゴやプラムの実をもらったことがあってね」

リンゴの木を指差し、彼はさらに続けた。

「この家の裏には、トマトやねぎ用の小さな畑があったのだが、今はどうなっているのだろうか？」

「そこは、今は私の子供たちの砂場となっているよ」

そう言うことから、男の人は家の裏に消えた。拓郎はしばらくその家の前で立ち尽くしていた。

再び歩き出した。行き先は、彼が毎日働いていたところだった。十五分もすると、森の入口近くに建つ木工所前に立った。

広い敷地内には、切断された板が至る所に積み重ねてあり、木屑の匂いが漂っていた。

それを見続けていると、三十年前に知り合ったシモーネという名が、彼の頭の中にくつきりと浮かびはじめてきた。もっと正確にいうと、薫のパソコンでハナの映った画面を観て、

また先ほど民族衣装を着たハナの写真を目にして、あまりにもシモーネに似ていたので、彼女の名が浮かび出してはいた。

拓郎は木材を切る音を耳にしながら、木工所周辺をゆっくりと歩いていた。彼の頭の中は、過去の経験が今の自分とどのように繋がっているかに考えが集中しはじめていたが、答えを少しも見つけることができないでいた。ただ、回顧的になっている自分を見出しただけだった。

正午を過ぎたのに気づいた彼は、正樹のアパートへ帰ろうとした。ちょうどバスが来たので、それに飛び乗った。昔はこの路線バスにしばしば乗って、シモーネのところに行ったものだと思いつながら、外の景色に目をやっていた。

車を囲んで三人の昼食となった。薫が父の顔を見ながら、

「お父さん、懐かしかったのではない？」

と、訊いた。

「そうだな。もう忘れていた時間が、再び目の前に現われたのだからな」

父は箸を動かしながらそう答え、ほほ笑んだような顔で、二人が作ったマーボー豆腐を口に入れた。

「なかなかいい味だ。豆腐は硬いが、どこで手に入れた？」

「午前中に薫を連れて街に出て、繁華街にあるアジア店で買ったのです」

「そうか。昔は、アジア店などはなく、豆腐などを食べることはできなかったが」

「そうですか。街には韓国や中国の留学生が多くいますから。日本人はあまりいません」
「時代は変わったものだ」

そう言いながら、拓郎は再び豆腐を口に入れた。と、一人でハイデルベルクへ旅をした時に、そこで手に入れた豆腐を持ち帰り、すき焼きをしようとして、それを牛肉と一緒に煮て、シモーネに食べさせたことが浮かび上がり、彼女の名が再び頭をよぎったので、彼はハッとした。

一時間かけての食事が終わりになった頃、父が日本茶を飲みながら二人に言った。

「明日、スイスへ行こう。ハナとかいった娘にも会ってみよう」

「えッ、本当に！」

正樹は、父の顔を見ながら声を上げた。ということは、父は、僕がハナと一緒にすることを受け入れたのだと思った。

薫も父のほうを見ながら、

「明日からスイスになるのね。うれしい。どんなところかしら。早く行ってみたいわ。ハナさんにも会えるし」

と弾んだ声を張り上げて、うれしそうな顔で父の湯飲み茶碗に再びお茶を注いだ。

それを飲み終えた拓郎は、二人の顔を見ずに、

「時差ボケかな、眠たくなった。ホテルに戻ることにする。帰り道はわかるので、ひとりで歩いていく」

と、声を少し落として言った。

「そうですね。薫と僕はこれから路面電車に乗って、街で三時から始まる一つのイベントに行ってきます。七時ごろにはホテルに戻ってきます。夕食はそれからしましょう」

ホテルに帰る途中、拓郎は考え続けた。正樹は自身で決断し、選択し、それに賭けをようとしているのだ。それ以外に道はないと思っっているのだ。彼の純粋な心がそうさせているのだろう。それにしても、シモーネに似ているハナというあの娘、何か心に引っかかる。とにかく、一度会うことにしよう。

第四章 未来へ向けて

三人での昼食を終え、正樹と薫は電車で一時間半ほど乗り、目的の街へ向った。拓郎はホテルの部屋でひとり休憩していた。

電車内に座っていた兄が、横にいる妹に話しかけた。

「薫の博士論文のテーマは、たしかナチスの犯罪とユダヤ人大殺戮（ホロコースト）で、それらが現代のドイツ社会に、どのような影響を及ぼしたかを書くことだったね」

「ええ、そうよ」

「それは、ちょうどよかった。そのテーマに適するだろうと思われる記事が、先日新聞に載ったのだよ。ナチ時代にその街で暮らしていたユダヤ人たちが、どのような生活をしてきたかを映したドキュメンタリーフィルムなのだ。それを、一週間映画館で上映するとの内容だったね。午前是一般の人を対象に、そして午後は中・高校生の歴史授業のためにも書かれてあったね。しかも、午後の上映したあとは、フィルムに登場するユダヤ人五名と、その場で討論することも記されてあったよ。さらに、もしその討論に関心があったら、だれでも参加できるとも書かれてあったね。その際は、主催側の市当局に前もって連絡してくださいとも記されてあった。もちろん、薫は関心があるだろうと思い、参加したいと申し込んだよ」

「それは、わたしの論文のテーマと深く関係しているわね」

そう言ったあと、彼女は目を輝かせながら語った。

「当時のユダヤ人がどのようにに虐げられ、それを観て現代のドイツの若者たちが何を思うかを知ることができるわ。それに生き証人の人たちと生徒たちがどのような討論をするかを、この目で見ることもできるし、興味津津だわ。お兄さん、ありがとう」

薫は、兄に頭を下げた。

二人は電車を降りてから、イベントが催されている映画館へ歩いて向った。

映画館内にいた先生と話をしたあと、二人は十四、十五歳ぐらいの生徒たち二百名と一緒にフィルムを観ることになった。

しばらくすると、舞台の幕が開いた。と、今までザワザワした音が消え、スクリーンに、八十二歳の男性の姿がクローズアップで映し出された。

その人が、カメラに向かって話し出した。

「合法的な選挙で、ヒットラーは一九三三年に政権を取り、それ以後、私たちはプールや川で泳ぐことができなくなってしまった。それよりも、もっと身に応えたのはクラスメートの一人が、わたしの髪の毛をハサミで切り、平手打ちをしてから、『お前がきたないユダヤ人だからだ』と見下した顔で罵ったことだった。それを傍で見ていた先生は、何も言わずに立ったままでいた」

彼はさらに話を続けた。

「わたしの両親は食料品店を営んでいたが、ユダヤ人の店で物を買うなどというボイコット運動が起こり、店は倒産してしまった。父は、ナチ政府がドイツ国内のユダヤ教の会堂やユダヤ人商店、それに墓地や事務所などを燃やす指令を出した一九三八年一月九日の夜、逮捕されてしまい、どこかへ連れ去られてしまった。しばらくすると、父が肺炎で死んだとの通知が家に届いたのだ。しかし、それはウソで、強制収容所で殺されてしまったのだ。さいわい、自分は残った家族とイスラエルへ逃れることができたが、知り合いの多くは収容所へ送られてしまった」

ここで彼の顔が画面にさらに大きくアップされ、

「ドイツの地に、再び、足を踏み入れないと決心したのだったが」

と、一つひとつの語を区切りながら言った。

次は、七十九歳の女性がフィルムの中で語り出した。

「わたしが小学校のころ、プールの入口前に、ユダヤ人は入ることを禁ずると書かれた札が立てられていたわ。でも、ドイツ人の友だちが、『何も起こらないわよ』と言って、わたしの手を引いてなかに入ったわ」

彼女は続けた。

「また雪が降ったある日、近所の子供たちから、雪のボールを投げられ、家に帰って、母に『ユダヤ人て、いったい何を意味しているの?』と訊いたこともあったわ。母は『何も答えずに黙っていたわ』」

彼女は目をしばらく下に向け続けたあと、さいわいなことに、わたしの家族は早くからイスラエルへ行ったので、強制収容所へ送られずに済んだのだけれども……」

館内にいた生徒たちは、物音を立てずにスクリーンを観続けていた。

正樹と薫の他に、数名の大人たちがいたが、彼らはこの街の市民だった。

フィルムに出てきた五名は、現在ドイツに住んではなく、アメリカやイスラエルで暮らしているユダヤ人たち。街当局が、彼らを招待したのだった。この街では一九八一年以来、四回ほどユダヤ人を招いていて、特に今回は当時のことを語るユダヤ人が少なくなりつつあるので、次の世代を担う若者たちに、なるべく正確に当時の出来事を知らせようとしたのだった。市内に住んでいる千名以上の中・高校生、それに市民たちが、このフィルムを観ることになっていた。

インタビュー形式でフィルムは進行し、当時の写真も映し出され、本や講演での内容よりもきわめて生々しく、リアリティーがあった。

約一時間のフィルムが上映されたあと、今度は登場したユダヤ人たち五名がゆっくりと舞台の上へのぼって、生徒たちとの討論となった。

生徒たちから、質問がいくつ飛び出した。それに、八十歳前後のユダヤ人たちが真剣に答えていた。

十分が過ぎた頃、今度はユダヤ人女性の一人が、生徒たちに訊き返した。

「このフィルムを観て、そして今いくつかの質疑応答を聞いて、あなたたちは何を思ったか」

しばらくの間、生徒たちは黙っていた。

一分ほどすると、ある一人の女子生徒が立ち上がった。

「このようなことが、本当にあったなんて信じられません。今は、それしか言えません」
そのあと、男性生徒がマイクを持った。

「僕個人には責任はありません。ただ、当時の惨禍を知り、それを伝えていく責任はあります。なぜなら、それが未来に戦争のない世界ともなっていくと思うからです。戦争を二度と繰り返さないためにも、当時のことを知ることは、大切だと思います。」

はつきりした口調で語った。

少しすると、歴史担当の男性先生が生徒たちに説明をはじめた。

「ホロコーストについては、戦後二十年近くも社会のなかで黙っていたところがあったが、一九六十年代の後半から少しずつ語り合うようになって、一九六八年に学生運動が起こって、ヴェトナム反戦の学生たちが市民を巻き込んで、既存の政治体制に抗議するようになって、

り、ナチ時代に犯した犯罪を徹底的に省みるようになった。そして、一九六九年に西ドイツ首相となったヴィリー・ブランドが、ドイツの戦争責任を述べ、翌年ポーランドのワルシャワゲッター蜂起記念碑の前にひざまずいて、ドイツが交戦した国々と和解する姿勢を強く打ち出し、その後、一九八五年ヴァイツェッカー大統領が、終戦四十周年に連邦議会で、『過去に目を閉ざす者は、現在にも盲目である』と演説したことがあった」

生徒たちは、先生の話すことに耳を澄まして聴いていた。そのあと、若い女の先生が席から立ち上がり、壇上で座っていた五名のユダヤ人の前で、

「皆さん方の話しを聞き、わたしたち教職員も生徒も、当時のことを自分に引きつけて考えさせられました。学校に戻ってから生徒たちと今日話したことを討論します。そして、では未来をどうすべきかについて語り合います。遠いイスラエル・アメリカから来てくださり、本当に感謝します。皆さんの記憶を、私たちも共有していきます。ありがとうございます」

と語り、深くお辞儀をした。

約一時間の話し合いが終わったあと、薫と正樹は先生にお礼を述べてから映画館を出てから、プフォルツハイム行きの電車に乗った。

発車するやいなや、兄が妹に話しかけた。

「薫が今書いている博士論文に、先ほどのフィルムと討論の場面、かなり参考になったのではないか」

「もちろんよ。大いに参考になったわ」

妹はそう応えてから、さらに続けた。

「あのようなフィルムを生徒たちに観せたり、生き証人と直接会話をさせたりしながら、当時のホロコーストを加害者として、そして歴史を批判的に考察させたりするのが、ドイツの歴史教育なのね。教室に戻ってから、討論するとか言っていたわね。生徒一人ひとりに、当時のことを自分の身に引き入れさせながら、考えさせようとしているのだから。それが未来への希望となり、平和とつながっていくからと思っているからなのでしょうね」

彼女は、兄の顔を見ながら話し続けた。

「ドイツに再び足を踏み入れたくないと語ったユダヤ人もいたわね。高齢の身でここまで来て、ドイツの若者と対話をしたのだから。どうしても語り継ぎたかったのじゃないか。未来を見つめるその姿に、頭が深く下がったわ。と同時に、当時のようなことを、二度と起こさないようにしているドイツの学校教育にも敬意を表するわ」

「そうだね」

兄は妹の言うことに合槌を打ったあと、彼女に訊いた。

「でも、薫は、なぜナチスの戦争犯罪とホロコーストをそれほどまでに深く研究しているの？」

「それは、論文のなかでキーソンおばあちゃんと繋がる点を見つけたからよ」

「キーソンおばあさんと！」

兄は、突拍子もない声を上げた。

「そうよ。わたしがキーソンおばあちゃんに、今のドイツの民主主義の基にあるのは、戦後とくに学生運動のころから、ナチス時代の犯罪行為を黙しているのではなく、加害者の立場であからさまにしながら、今のドイツ国が築かれてきたところがあると話したら、

キーソンおばあちゃんが、『そのような国があるの』と言って驚き、戦争当時、朝鮮半島で日本軍が地元の人たちに何をしたかを、それに自分の従姉妹が当時従軍慰安婦をしていたことを話してくれたわ。そのことを、おばあちゃんは誰にも話したことがないと言ったわ。息子のお父さんにも話したことがないのよ。それを聞いたわたしは、キーソンおばあちゃんにわたしの書いた論文をぜひ読んでもらおうとしたわ。そこで、論文のすべてを韓国語にも訳すわと約束したのよ。そしたら、ことのほかよるこんでくれたわ」
彼女は続けた。

「キーソンおばあちゃんが日本に住むようになって辿った道は、在日韓国人の歴史でしょ。おばあちゃんも生き証人の一人だし、苦しいこと辛いことなど、叫びたいことが山ほどあるのではないかしら。先ほどのユダヤ人の高齢者たちのように。そのように思うと、わたしの論文に力が自然と入ってくるのよ」

「薫は、それほどまでにキーソンおばあさんのことを思っていたのか」

「ええ、そうよ。わたしには韓国人の血がいくら流れていることもあるわ。それよりも何よりも、将来韓国人と日本人が信頼関係を真に見出すようになってほしいのよ。そのためにも、わたしはドイツの戦後を例に引き合いに出して、論文を書き上げたいのよ」

「でも、今の日本の大学で、薫の書く論文を評価してくれるかどうか」
そう言うてから、兄はすこし黙ったのち、

「思うのだ。陸続きの国であるドイツは、九つの国々と国境を接して、常に他国との関係に気をつけなければならないよね。戦争犯罪でもまわりの国々からの批判があったからこそ、今のドイツが存在しているとも言えるだろうな」

と言い、さらに妹に、

「日本は海に囲まれ、他国と接していないよね。でも、今はグローバル化の時代だ。これからは他国の人々の痛みを自分の身として知り、そして、歴史認識でも真摯に対処しなければやって行けなくなるだろうね。薫が論文で訴えたい気持ちはわかるよ」

と、言った。それを聴いた妹は、お兄さんだからこそその声だと思った。

正樹はさらに続けた。

「とにかく、がんばれ。論文に参考になりそうな資料を見つけたら、すぐに送るから」

「ええ、ありがとう」

薫は立ち止まって、兄に頭を下げたあと、凜とした顔付きで、目を前にしっかり向けて歩き出した。

しばらくすると、兄が妹に言った。

「明日は今日よりも晴れて、青空が広がることだろう。明日行くところの景色は、それは素晴らしいぞ」

「たのしみだわ。ハナさんにも会えるし……」

二人は車窓に映る黒い森地方の景色を眺め出した。

第五章 スイスアルプスへ

スイス行き列車に乗った三人は、一つの空いたボックスを見つけ、そこに腰かけた。少しすると、薫が前に座っている兄に話しかけた。

「昨日の映画館でのフィルムと討論、とてもいい勉強になったわ」

「それはよかった」

「ミュンヘン大学に留学したとき、列車で二十五分走ったところに、ドイツで最初に作られたダッハウ収容所へ行ったことがあったわ。そこではフィルムと当時のユダヤ人の収容所の暮らしが展示されていたわね。あのときも、多くの中学・高校の生徒たちが学校の先生に引率されてグループごとにも別れ、ユダヤ人の宿舎内で話し合っていたのを目にして、ドイツの歴史教育に拍手を送ったことがあったわ。昨日は、それにもまして感動したわ」

「昨日のような催し物は、ドイツの至るところで行っているようだ」

「過去を克服し、歴史から未来へ繋ごうとしているのね。素晴らしいわ」

「市民一人ひとりが、ナチ時代にした行為を反省して、二度と繰り返してはいけないとしているのだろう」

正樹は、さらに続けた。

「ここドイツに住んでいると、さまざまなメディアで、当時のことを隠すこともなく報道されているのを知るね」

「そうなの」

「ドイツでは、歴史が人間をつくっているという姿勢を感じるよ」

「記憶は変化するわ。だから、昨日のような討論や収容所を残して、今の、そして次の世代にしっかりと伝えようとしているのだわ。未来の平和を見つめているからこそなのだわ」

薫はそう言うってから、兄の横に座っている父に目を移した。が、父は息子の本棚にあった本を読んでいて、二人の会話を聴いてはいなかった。

拓郎自身、自分の経験した過去を客観視しながら統合的に見るのがいくらかできる年齢には達していたが、まだ熟してはいなかった。まして、これから出会う出来事から、自分の今後の生きかたに変化が生じるとは、夢想だにしていなかった。

その父は車窓に映る景色を見ずに、手元の本に目を注いでいた。

薫と正樹の二人は、しばらく黙って外の風景を眺め続けていた。

昨日の討論のことは、しばし忘れようとしていた薫。彼女はこれから会うハナのことに考えを集中させようとしていた。

妹が兄に訊いた。

「わたしとお父さんが急に訪問することになって、ハナさんに迷惑をかけるのではないかしら？」

「そんなことはないよ。父さんと薫がドイツに来ると知らせたとき、ハナは僕のところまで来ると言ったのだが、それを断ったくらいだ。そのようなことだから、反対に薫たちを歓迎するよ。電話で、父さんと薫に宜しくと言っていたからね」

「ならいいのだけど、ね、お父さん」

薫は横に座っている父を見たが、拓郎は昨日息子の部屋で目にしたドイツ語で書かれた山の暮らしの本を読み続けていて、返事をしなかった。

兄が、車窓から流れ行く外の景色を眺め続けている妹に、

「薫が寝るところは、ハナが以前過ごしていた部屋。父さんが寝るところは、ハナの祖母が寝起きていた部屋。両方とも今は空いているので、そこで眠ってもらおうことになるよ」

「言い、さらに続けた。」

「ペンションは木造作りの三階建てで、一階は家族の部屋とレストラン、二階と三階は客室で九部屋ある。それに広いバルコニーがあつて、そこでお客たちは、パラソルの下で食事することもできるようになっているよ。そこからの景色がまた素晴らしいのだ」

それを聴いた薫は、目を輝かせて何度も、「たのしみだわ」と声を上げながら、兄の話に耳を傾け続けていた。

列車がドイツとスイスの国境線を通過すると、薫が、

「検査もないのね」

と、兄に言った。

「さつき、通路を歩いていたら人が検閲官だよ。パスポートを提示しないでもいいのだよ」

正樹はそう説明してから、父を見た。

「父さんがドイツにいたときは、かなり調べられたのでしょ？」

拓郎は読んでいた本から目を離した。

「ああ、パスポートを念入りに調べられたな。それと、荷物の検査もかなり厳しかったことを覚えている。トルコやイタリアやモロッコなどからの外国人労働者が多くいて、彼らの厳しい生活を垣間見ていたぞ。おまえもこれからスイスで外国人として働こうとしているが、それは並大抵のことではないぞ」

「僕の場合、スイス人の彼女と結婚して暮らしていくだけですのぞ」

「たとえパートナーがその国の人とは言え、大変なことだぞ。まして男は金を稼がないといけないからな」

二人の話を聴いていた薫が、話題を変えた。

「お父さんは、当時スイスに行ったことがなかったの？」

「山には関心がなかったのぞ、スイスには足を踏み入れたことがなかった」

「そうだったの。お父さんは海が好きだから。でも、ドイツ以外のヨーロッパの国々に行つたことがあるのぞでしょ？」

「ああ、スペインとイタリアとポルトガルにひとりで旅をしたことがあつたな」

今度は正樹が、斜め前に座っている父に話しかけた。

「父さん、旅をするお金がよくありましたね」

「当時のドイツの景気は非常によかつた。レストランや木工所でアルバイトをしては高いマルクを稼ぎ、その金で旅をしていたものだった。でも、父さんの場合、ヤミの不法労働だったから、警察官に見つかったら、日本へ強制送還となつただろう。さいわい、そうはならなかつたが」

それを耳にした薫が、父に言った。

「そのことは、飛行機内でも聞いたけれど。そんな危険を冒してまで、なぜドイツにいたの？」

「そう恐ろしいとは思わなかつたし、それ以上に自分の自由を味わいたかつたからな」

父は今までにない明るい顔で応えた。それを聴き、薫は父が飛行機内でヒッピーとは意

を異にしたと言ったが、心の自由を求めての姿勢は彼らと同じだったのだと思った。でも、それは周りに縛られない一人だけの、ある意味ではわがままな自由で、それは今も父に続いているのだとも思った。

五分ほどすると、小さなワゴン車が三人の横を通り過ぎようとした。と、薫が声を出した。

「お腹が減ってきたわ。あそこにチーズの挟んだパンがあるわ。おいしそうね。食べてみたいわ」

「昼食の時間か」

正樹はそう言っ、三つの細長いバケットを売り子から買い、妹と父に手渡した。三人はそれを食べながら、車窓に映る景色を眺めていた。

チューリッヒ駅に近づくと、鉄筋コンクリートの大きなビルディングが現れ出した。その建物の間を縫うように、列車は走り続けた。

チューリッヒ駅で降りた三人は、クーア行き列車に乗った。

一時間半ほどすると、列車は山間を縫いながらの走りとなった。薫は座席から立ち上がり、体を少し左右に揺らしながら、窓に映る山の風景を眺め出した。その彼女に、兄が、「昨日買った、そのトレッキングシューズのはき具合は、どう？」と、訊いた。

「ええ、とてもいいわ」

薫はそう答えて、兄に履いている靴を見せながら少し跳び上がった。

「ハナの住んでいる山村は、かなり山奥なのでそれなりの靴でないと、周辺を歩くことはできないからね」

そう言っ、正樹は父を見た。

「父さんには僕の山靴がむこうにありますので、それをはいってください。たしか、僕とサイズは同じでしたね」

「登山をするために行くのではないぞ」

父は、外の景色を眺めながら言っ。その父に、薫が話しかけた。

「お母さんは若いころ、よく山へ行っていたのでしょ？」

「ああ、そうだな。父さんと結婚する前は、山好きな人としばしば登っていたな」

「そういえば、お母さんから一度聞いたことがあったわ。一緒によく山に登っていた人が、穂高岳で足を滑らして亡くなったと」

それを聴いた拓郎は一瞬、体をギクツと奮わせた。薫は、父がその人のことを話すだろうと思っ、言葉を待っていたが、父は黙っ続けていた。

「その話を、僕は聞いたことがない」

正樹はそう声を出してから、妹の顔を見ながら、

「山では慎重に行動しなければならぬからね」と、言っ。

列車はクーア駅へ向かって走り続けていた。薫は、兄の部屋に貼ってあったポスターのアルプス風景を早くこの目で見たくて胸の内がワクワクしていた。と同時に、ハナと会うのを心待ちにしていた。

クーア駅に近づくと、妹が兄に訊いた。

「ハナさん、駅で待っているのですよ？」

「僕たちが降りたホームに、立っていると思うよ」

「どのような人かしら？ お兄さんと結婚する人でしょ。ということは、わたしの義理の姉になるのね。スイス人のお義姉さんか。信じられないわ」

薫の顔はいつになく輝いていた。父は、結婚に同意したわけでもないのにと思いながら、二人の会話を聴くではなしに耳にしていた。

「あと一分したら、クーア駅に到着します」の車内放送が流れた。

正樹はリュックサックを網棚から下ろし、拓郎はスーツケースを持ち、薫は旅行かばんを手にして、座席から立ち上がった。

ホームに降り立つと、正樹が辺りを見回した。と、五十メートル先で、一人の女性が手を振っている姿があった。それを見つけた彼は、登山靴の音を響かせながら、その女性のほうへ小走りで向った。と同時に、その女性も正樹のほうへ駆け足で走り寄った。二人は、お互いの肩を撫でるようにして抱き合った。

その二人が拓郎と薫の前に立った。女性はすそがいくらか波打っているスカートをはいて、花模様の刺繍入りの白いブラウスを身につけたいた。その女性が、

「ハナといひます」

と言つて、拓郎に手を差し伸べた。彼は一瞬、体を引いた。目の前で挨拶をする女性の眉と目の形が、昔を思い起こさせたからだった。

瞳の色は薄ブルーではなく、薄茶色だが、目がそっくりだったからだった。それにスイドイツ語も、彼の記憶を蘇えさせた。拓郎は握手するのを忘れるほどとなった。彼は慌ててハナに手を伸ばして、その手を握った。と、彼女が微笑みながら、

「タカモリさんのことは、マサから聞いていました。わたしのところに訪れてくれて、ありがとうございます。うれしいです」

と、言った。その声とアクセントに、拓郎の手は緩んだ。昔聴き慣れた声だったからだった。彼は、薄赤い頬に栗色の髪の毛をうしろで結んだ、化粧をまったくしていないハナの手を離し、

「これから三泊ほど世話になる。娘の薫は二週間ほど泊まることになるだろう。正樹から、素晴らしい地に住んでいると聞いたが」

と言ひ、さらに付け足す言葉を探したが、次の語が口から出ないでいた。いつもとは違う父の姿を見た娘が、日本語で父に、

「お父さん、どうしたの？」

と言うと、ハナが正樹に、

「今、妹さんは何て言ったの？」

と、訊いた。正樹は、妹が言ったことをドイツ語に訳してハナに伝えた。薫もドイツ語での会話はそう問題はないのだが、ハナのいる前でつい日本語で言ってしまったのである。ハナは笑顔を浮かべ、今度は薫に手を伸ばした。

「よく来てくれました」

「これから、よろしくお願ひします。お兄さんのフィアンセに会えてうれしいです」

薫はニコリしながら、ハナの手を握った。

正樹はリュックを背負ひ、父のスーツケースを持ち、ハナは片手で薫の大きい旅行かばん

んを軽々と持ち上げ、二人は歩き出した。そのあとを、薫と拓郎が続いた。正樹もハナも登山靴を履いていたので、周りの人よりも背丈が高く見え、白い半袖のブラウスから出ているハナの腕は、日に焼けたブラウン色である。その太さは、薫の二倍近くはあった。駅前に停まっていた九人乗りのバンの前まで来ると、薫が車体に描かれている花を指差しながら、

「あら、きれいな赤いバラだわ」と、声を上げた。

「あれは、アルプスに咲くアルペンローゼなのだ。ハナのペンションの名は、その花に因るのだよ。ほら、車のうしろにペンション・レストラン『アルペンローゼ』と書かれているだろう」

そう言いながら、正樹は車のドアを開けて三人の荷物を車の中に入れた。

車が動き出すと、ハンドルを握っていたハナが後席に座っている二人に話しかけた。

「時差ボケなどによる疲れはありませんか。どうぞわたしが住んでいる村で、ゆっくりと休養してください」

彼女はそう言うてから、助手席の正樹の横顔を見た。

「三日前から、満室となったわ。いそがしくなってきたわよ」

「そうか、そうすると十五名が宿泊しているのか。今日から、僕が手伝うから」

ハナは肯き、ペンションの今の状況について正樹に語り出した。

車がクーア市街地を抜けて郊外の道に入ると、ハナがうしろの二人に、

「あそこの家で、わたしは生まれ育ったのです」

と言うて、車の速度を落とした。薫は窓から身を乗り出して、庭に何種類もの花が色とりどりに咲いている小さな家を見た。

「あの家で、ハナさんが育ったのですか」

「ええ、二歳まであそこにおいて、そのあとは、祖母が住んでいた『アルペンローゼ』に母と一緒に移り住むようになったわ」

拓郎もその小さな家と庭に目をやった。花が好きだったシモーネのことが、彼の脳裏をかすめた。その父に、正樹が言った。

「父さんにも話したでしょ、ハナは四歳まで、母と一緒にだったと」

「そのことは、おまえから聞いたな」

今度は、拓郎がハナに話しかけた。

「お母さんは橋から落ちたと息子から聞いたのだが」

「ええ、雪が解けはじめた春先、つり橋から足を踏み外して谷に転落してしまいました。その日は、強い突風が吹いていたのです」

声を落しながら、ハナは語った。

五分もすると、赤い三両の列車が四人の乗った車を追い越していった。小さくなっていく列車を見ながら、薫がハナに訊いた。

「あの列車は、どこへ走っているのですか」

「三千人が住んでいる大きな保養地のアロサまでよ。そのアロサから、八キロ手前のシュトラウス村に、わたしは住んでいるわ」

ハナがそう答えると、正樹が身をくねらせながら、父と妹にその村について日本語で説

明しはじめた。

「ハナの住んでいるシュトラウス村は、高度一九一九メートルにあつて、七十戸の家々が建ち並んでいます。その高度で一年を通して生活している村は、スイスでは珍しいのです。シュトラウスの語の意味は二人とも知ってのとおり花束で、五月になると、雪解けとなつて、六月に山が開くのです。そのころに山に足を踏み入ると、何種類もの花が一斉に咲き揃い、それは明るい景色となり、村は花で包まれたようになって…」

一通り話し終えた彼に、ハナが訊いた。

「今、何を話していたの？」

「シュトラウス村について、すこし説明をしていたのだ」

「そうなの」

ハナはそう言うてから、拓郎と薫に笑顔を向け、「わたしが住んでいるところは、本当に素晴らしいですよ」と言った。

車内は時々日本語での会話となっていたが、四人のコミュニケーションにはまったく問題はなかった。

車はいくつものカーブを上り、三十メートルも真下に見えるV字谷に沿つての走りとなった。道路の左右には、針葉樹の木々が立ち並び、その樹木の間に、三角形の屋根をした素朴な家々が立ち建び、どのバルコニーにも、赤・黄・紫色の花が咲いていた。それらを見ながら、薫が隣に座っている父に弾んだ声で、

「ほら、ゼラニウムやベゴニア、それにマリーゴールドが窓のところに咲いているわ。日本のよりも大きくて色鮮やかね。庭には、百日草・カンナ・ダリア・ユリが植えてあるわ。あつ、あそこに赤いバラも」

と、声を出した。それを聴いた兄は、半身ひねりながら妹に、

「薫は花の名前をよく知っているな」

と、驚いた声で言った。

「お兄さんは、石集め。わたしは花を見るのが子供のころから好きだったでしょ。お母さんから花の名前をよく教わっていたわ」

「そうだったな。この辺りは野の花が咲いているが、ハナのペンションのまわりには、今は高山植物の花々が競つたように咲いているぞ。そこから、三百メートルの高度を登れば、アルペンローゼの花も、目にすることはできるし」

「ほんと、ぜひ見たいわ！」

日本を発つ前までは、スイスの山に足を踏み入れるとは、想像さえもしなかった薫だった。それが今、まさにアルプスへ向かっているのだと思うと、彼女の胸は膨らんだようになっていた。

大きな街のクーア駅から走つて、三十分が過ぎた。車は急カーブの先に三台ほど駐車できるところで停まった。運転席のハナが、うしろの二人に顔を向け、

「ここを通るたびに、わたしはあそこに寄っているのです」

と言い、十五メートル先に立っている、木で作られた十字架を指差した。

「あそこの下にある吊り橋から、母は足を滑らしてしまったのです」

拓郎と薫がその方向に目をやった。その二人に、正樹が訊いた。

「父さん、ハナと一緒にあそこに立ちませんか」

父は肯いた。

四人は車を降りて、十字架のところまで行つて下をのぞいた。一人ほどが渡れる幅の狭い吊り橋が架かっていた。その橋を見つめながら、ハナが話し出した。

「地元の人たちは、母が亡くなってから、あの橋に母の名前を付けて呼んでいます。風が強く吹いたときは、渡れません。母は皆から好かれていたと祖母から聞きました」

四人はその橋に目を落とし続けた。

今度は、高さ五十センチほどの木製の十字架の前に立った。そこには何も記されていない。ハナは、三時間前に自分で花入れに挿した、赤・黄・白・紫色の花を見つめ、両手を前で組みながら、正樹の父と娘が訪れてきたことを十字架に伝えた。三人はその言葉に耳を傾け続けていた。

車に戻る途中、父が薫に小声で、

「さつき彼女が唱えた句は、聖書からだ」

と、言った。薫は驚いた顔で、父の横顔を見た。

「お父さん、聖書を読んだことがあるの？」

「昔、ある人が聖書のあの箇所をよく口ずさんでいたのを、何度も耳にしたことがあったからな」

「どこで？」

父は答えないでいた。その代わりに、「これは偶然だ」と心の中で呟いた。

車が再び走り出すと、今までの広い道路から少し狭い道になった。ハナが声を少し高くして、うしろの二人に話し出した。

「ここから、五分ほどでペンションに着きます。五年前までは、この道は舗装されていなかったのですが、今はバスも走るようになりました。わたしの祖母が何度もバス会社と交渉して、やっと通るようになったのです。その結果、夏には休暇を過ごす家族連れ、冬にはスキー客がわずかですが来るようになってきました。わたしが子供だったころは、数戸しかなかった集落だったのですが」

数分もすると、今まで左右に目にしていた樹木がなくなり、丘陵地帯となって色とりどりの花が草原の中に姿を見せはじめた。薫は明るくなった周辺に視線を向けながら、「果てしなく続くお花畑だわ」と声を上げた。

起伏の緩やかな草原の中を、車はゆっくりと進んでいくと、木造作りの農家が見え出した。と、車が急に停まった。白と茶のまだらな色をした牧牛四頭が、路上に座って道を塞いでいたからだだった。

ハナが運転席から降りて、牛たちの名前を呼ぶと、彼らはハナに目玉をギョロリと向けて重い腰を上げ、カウベルの音を鳴らしながら道の端に寄った。

車に戻ってきたハナが、拓郎と薫に話した。

「村の人たちが飼っている牛たちです。今はこの付近で草を食べ、これから暑い日となると、彼らは山の上へ草を求めていきます。祖母がいたころは、わたしも牛を追ったり、チーズを作ったりしていたのですが」

それを聞いた正樹がハナに、

「いつか、チーズ作りを習わなければならないね」

と言うと、ハナは正樹の肩に右手を置き、

「少しずつね」

と、笑顔で応えた。

その二人のやり取りを目にした拓郎は、息子の結婚を認めるような気持ちになっていく自分を感じ出した。ハナと出会ってまだ一時間しかたっていないのに、彼女が醸し出す草原のような爽やかさに、好感を抱くようになったからだ。と同時に、自分の若い時分に過ごした日々のが重なってきたからでもあった。

車はシュトラウス村に入った。どの家々の庭と窓辺には花が植えられ、村全体が花で膨らんだようになって目にした薫は、花に優しく迎えられたような気持ちになっていた。

村の中でひと際大きい三階建ての前で、車は停まった。

「ここが、わたしの家です」

ハナがうしろを振り向きながら、ニコリして言った。それは、大自然の麓で暮らしている人が見せる顔だった。

荷を車から下ろしてから、四人は玄関前に立った。薫が二階と三階のバルコニーに目を向けながら、「赤とピンクの花が一メートルの束となって垂れ下がっているわ。いい匂いだわ」と声を上げた。

入口の木ドアの上には、ペンションとレストランの文字が刻まれ、アルペンローゼの花が大きく彫られてあった。一階の土台の部分は白いコンクリートだが、それ以外はすべて木材で造られた建物だった。

ハナが両手に拓郎のスーツケースと薫の旅行かばんを持ち、ドアを開けて中に入った。と、ひんやりとした空気が四人を包んだ。彼女は荷を床に下ろしてから、拓郎と薫に話した。

「この家は祖母の親が建て、今に至っています。ここに使われている木材は、すべて近くの森から運び出したものです。釘はすべて硬い木で、できています」

小さな窓から差し込んでくる光がハナの白いブラウスに照り返し、辺りが急に明るくなった。彼女は続けた。

「このペンションが建てられた当時、この村には電線が通っていませんでした。その暮らしは、厳しかったと祖母から聞きました。水道管もなく、冬は雪が深く積もり続けていたようです」

彼女はさらに、「母が亡くなり、祖母はわたしを育てながら、ここで暮らしていたのです」と言ってから、拓郎と薫が寝る部屋に案内した。

「ここが、祖母の部屋でした」

二人は、室内に整然と納まっている、梨の堅い木で作られた重厚な机と椅子、それに花などが彫られてある洋服箆笥やソファーに目をやった。

「ここで、朝食を祖母と一緒に摂ってから、わたしは八キロメートル離れたアロサの学校まで通っていました」

「冬も？」

「ええ、学校までの行き道は下りだったので速く進んだけれど、帰り道はスキーの板を背負っていたので、かなり時間がかかったわ。とくに、大雪のときはね」

それを聴いた薫は、豪雪地帯のここで暮らしていくのは大変なことだろうと思った。拓

郎が広い部屋に差し込んでくる光のほうへ向った。

「その窓から見た外の景色は、どうですか」

ハナが拓郎に声をかけた。

「いい眺めだ」

薫も窓辺のところに寄った。

「絵本に出てくるような風景だわ。白と黄色の花がまるで絨毯を敷いたように続き、その真ん中に小川が流れ、後方には雪がまだ残っている峰々が連なっていて、これがアルプスなのね」

「この部屋は、祖母が最も気に入っていたところでした」

「ありがとう、そこをお父さんに提供してくれて」

「もちろんだわ。マサの父親なのだから」

ハナは微笑みながらそう言い、室内にあったもう一つのドアを開けて、薫をそこに案内した。

「ここは、わたしの部屋だったわ。カオルはここで寝てね」

「まあ、明るいわ」

薫は感嘆な声を上げてから、壁に掛かっていたいくつかの写真に目を向けた。

「それらは、わたしの少女時代のものよ」

ハナは、少女の頃のことを話し出した。薫はそれに耳を傾けていた。

しばらくすると、ハナは拓郎に通じる部屋に行き、

「午後三時となりましたね。コーヒーでも入れましょうか」

と声をかけてから、彼女は調理室へ向かった。

調理場では、正樹がお湯を沸かしているところだった。その彼に、ハナが、

「二人とも、部屋が気に入ってくれるといいのだけれど」

と、言った。

「気に入るさ」

拓郎と薫は荷を解いてから、四十名ほどは座れるほどの食堂を通って、その奥にあるバルコニーに行った。

八つの丸いテーブルが並んでいる中の一つに、小さなお皿とコーヒーカップを見つけた二人は、そこへ行って椅子に腰掛けた。

目の前には、先ほど部屋から眺めていたと同じ風景が遮るものもなく広がっているのを目にした二人は、言葉を失っていた。少しすると、ハナと正樹がケーキとコーヒーを持って二人のところに来た。

薫が一切れのケーキを口に入れた。

「おいしいわ。リンゴの味が口のなかに広がって」

「それは今日の午前中、ハナが作ったりんごパイだよ」

父もリンゴパイを食べた。

「これは、旨い！」

拓郎はそう声を発しながら、ハナを見た。

「急に来たりして、申し訳ない」

「そんなことはありません。二人に会えてうれしいです」

そう言うってから、ハナはプフォルツハイムでの二日間をどのようにして過ごしたかを二人に訊いた。それに答えての歓談となっていた。花の匂いが風に乗って、バルコニーに爽やかに漂っていた。

しばらくすると、ハナが腕時計をのぞいた。

「あつ、もう四時半ね。そろそろお客さんたちの夕食作りの支度をしなければならいわ。

マサ、あなたはこれからアロサまで行って、注文していた肉と野菜を取ってきてほしいわ」

「ああ、いいよ」

正樹は即座に返事をしてから、妹を見た。

「薫も車で一緒に行くか。四十分で戻ってこられるだろう」

「はい」

薫は急に立ち上がって、駆け足の真似をして三人の笑いを誘った。

ハンドルを握っている兄に、薫が話しかけた。

「お兄さん、あのハナさん、とても心豊かな人ね。微笑みを浮かべながら話す顔から、それは感じたわ。まだ数時間しか彼女と接していないのに、こちらがエネルギーをもらったようになるわ」

「ハナをひと目見たときから、魅せられてしまったからね」

「お兄さん、いい人に出会ったわね」

兄は肯いた。

「父さんはどう思っているだろう？」

「お兄さんからの手紙を読んだときは、不機嫌そうな顔をしていたわ。結婚には反対だとも言ったわ。でも、ドイツに来て、お兄さんの意志が固いことを知り、それにハナさんと会ったりしているうちに、お父さんの考えが変わってきたように思えるわ」

「そうだといいのだが。お母さんと父さんに約束したことが、できなくなってしまったからな」

「お兄さんは自分の道を決めたのだし、それでいいのではない」

「そうだな」

しばらくすると、外の景色を見ていた薫が兄にまた話しかけた。

「ハナさん、苦労しているわね。最初に握手した際のごつごつした掌、それと彼女のことを知れば知るほど、そう思うわ」

「そうだね。両親がいないなかで育ったハナだからね」

そう言った兄に、薫が訊いた。

「ハナさんの父親のことだけど、今どこにいるの？ 生きているの？」

「それが、ハナのお母さんは、おばあさんにも誰にも父のことを語っていないのだ。父が誰で、どこにいるか、まったく知らないのだよ」

「そんなことって、あるのかしら？」

「何か事情があったのだろうか」

「酷い父親ね」

「ハナは、今はあのような明るい顔をしているが、思春期のころは、おばあさんに相当苦勞をかけたと言ったことがあったよ」

彼は続けた。

「今回父が来るとのことで、父親の存在を知らない彼女は、僕の父と会うのをとてもよろこんでいたね」

「そうなの。それにしても、ハナさんは大した人だわ」

保養地アロサの卸店で、注文した野菜と肉を購入してから、二人はシュトラウス村へ走った。

車が家の前で停まると、ハナが出てきて、「ごくろうさん」と二人に声をかけて、野菜などの入ったダンボールを調理室へ運んだ。そのハナに、正樹が訊いた。

「父さんはどうしている？」

「疲れが出てきたから、すこし横になると言っていたわ」

「そうか。じゃあ、まだ眠っているね」

「そう思うわ」

調理室に掛かっていた時計に、ハナは目をやった。

「夕食を作る時間だわ。今日の泊り客は十五名。それに、三十名ぐらいの登山者たちが食べに来ると思うわ」

「僕も調理室に入るよ。君と手伝いにくるステラの二人だけでは大変だからな」

「そうしてくれると助かるわ」

傍で二人の会話を耳にしていた薫が声を高くして、「わたしも手伝います」と言うと、ハナが正樹を見た。彼は二度背いた。小さい頃から、兄を慕っていた薫は飛び上がってよろこんだ。

食堂内で夕食を摂っていた人たちが、次々と席を立った。壁に掛かっていた柱時計が九つを打つと同時に、拓郎が食堂に現われた。

「いやー、一時間の積もりが、四時間以上も眠ってしまったようだな」

「お父さんは、大分疲れていたから」

木のテーブルを拭きながら、薫が言った。

「おまえは、ここで何をしているのだ」

「手伝っているのよ。食器を並べたり、片付けをしたり」

父は、その様子を感心しながら見ていた。ハナが調理室から出て来て、椅子に座っている拓郎に声をかけた。

「よく眠れましたか」

「ああ、十分なほどにな」

「お腹が減ってきていると思います。何を食べますか」
ちようどその時、正樹も調理室から出てきた。

「四人で一緒に食事をしよう」

「ええ、それはいいわ。では、メニューは？」

「父さんは肉が好きだから、ステーキにしよう」

「それなら、ちようど牛のもも肉があるわ。それに、野菜も添えて」

ハナはそう言うてから、正樹と一緒に調理室に戻った。

三十分が過ぎ、テーブルを囲んでの夕餉となった。湯気の立つ焼き上がった肉と野菜、それにサラダが木のテーブルの上に並んであった。四人はワイングラスを持って、グラス

を重ねた。食堂には、三十分ほど前までいた登山客の姿はなくなっていた。

「この肉はやわらかくて口に入れると、蕩けるようだ。野菜はナイフで切ると、サクッと音がして新鮮な味だ」

拓郎は、フォークとナイフを手に持ちながらハナに言った。

「ありがとうございます。お皿に盛ったものは、すべてこの村と近辺地域で採れたものばかりです」

それを聴いた薫が、深みのある赤ワインを手に持った。

「これもそうですか」

「もちろんよ、アロサ近くのブドウの実からつくったワインよ」

「口あたりがまろやかで、おいしいわ」

ハナは、やわらかい肉をナイフで小さく切りながら拓郎に訊いた。

「マサのお母さんはどんな人だったのですか。彼から、登山が好きだったと聞いたことがありましたが」

彼は今まで動かしていた手を止め、話しはじめた。

「仕事も家庭もよくやってくれた。子供の教育も熱心だった。とくに、言葉遣いを大切に、他者を思いやる子に育て、二人がまわりに左右されないで自分の考えを持って歩いて行けるようにと願っていたな。つねに前向き思考の彼女は、何かとこちらを支えてくれてものだった」

その父の言葉を聴いた正樹と薫は、目を見交わして驚いた。今まで、父が母について感謝の言葉を口にしたことがなかったからだだった。

柱時計が十一時を打った。ワインを三杯も飲んだ拓郎は、欠伸をするようになった。それを目にした正樹が、父を見た。

「調理場でハナと話し合ったのですが、明日は三人で、近くの山へ登りに行きましょう。

ハナは、明日十一時から、以前から約束していた二人とここで会うことになっているので、一緒には行けません。このペンションに関することを、その人たちと話し合うことになっているのです」

そのあと、ハナが済まなそうな顔で続けた。

「そうなのです。二人をこの近くの山へ案内したいのですが、どうしても会わなければならぬ人が訪れてくるのです」

それを聴いた拓郎は、ワイングラスを手に持って、

「いや、こちらが急に来たので、それはお構いなく」

と声を出して、グラスに残っていたワインを飲んだ。その父に、正樹が訊いた。

「それと、父さん、明日の朝食のあと、ハナがこの村にある墓地に二人を連れて行きたいと望んでいるのですが、いいですか」

父は黙っていたが、薫が、「もちろんよ」と答えた。

第六章 まさか…

拓郎と薫が朝食をちようど終えた時、ハナが二人が座っているテーブルに寄り、「今日は、母の誕生日なのです。村の墓地に案内しますので、外で待っていてください」と言っているから、早足で自分の部屋に戻った。

五分もしないうちに、ハナと正樹が拓郎と薫のところに来た。四人は歩き出し、村の外れに建っている小さな教会へ向った。

教会堂の横を通って、その奥にある墓地に足を踏み入れると、ちようど九時を告げる鐘の音が「カーンカーン」と鳴りはじめた。それを耳にしながら、四人は様々な形が並ぶ墓石を通り過ぎ、花びらの形をした薄赤色の石の前に立った。

「これが母の墓です」

ハナはそう言ってから腰を下ろし、花立てに今朝採ってきた色とりどりの花を入れた。墓石には、シモーネ・マイヤーという名前が刻まれ、その横に写真が貼ってあった。それを目にした拓郎は、愕きのあまり一瞬、身を引いた。

ハナは墓石をしばらく見つめてから立ち上がり、傍にいた薫に首から垂れ下がっていたペンダントを見せた。

「これは、母の形見なの。ほら、エーデルワイスが描かれているでしょ。母は、亡くなったときも、これを首にかけていたと祖母が話してくれたわ」

「まあ、きれいだわ」

それに目にした拓郎は、唾をゴクンと飲み込んだ。間違いない。これはあの時のだど心の中で叫んだ。あまりのことに、彼の体は硬直したようになって、啞然としながら立ち尽くし続けていた。その異常に気づいた薫が、

「お父さん、どうしたの？」

と訊いたが、父は返事をする事ができないでいた。薫が、もう一度訊いた。

「何でもない」

彼はわずかに聴こえるくらの声で答えたまま、なおも体を硬直させ続けていた。正樹は水を取りに行ったので、父の様子を見ていなかった。

拓郎は三人より一步下がったところから、墓石に刻まれている文字を再び見た。それも目で撫でるように。間違いないと心の中で呟いた。

四人は朝霧の立つ、ひっそりとした墓地を出た。

拓郎は胸を衝かれたような思いで歩いていた。三人が話している声が、彼の耳にはまったく入っていなかった。薫はペンションに戻ってから、父と兄との山歩きとなるので、胸が躍っていた。

拓郎は部屋に戻り、正樹が用意した登山靴の紐を力なく締めはじめた。そこに、薫がドアを開けて入ってきた。

「お父さん、準備できました？」

「ああ」

父は娘にわずかに聞こえる声で応えてから立ち上がったが、今自分がどこにいて、何をしているのか、わからないほどだった。彼は、「こんなことがあるのか。ここで、あのシモーネ、それも眠っている彼女に再会するとは。信じられない」と頭の中で何度も呟き続けていた。

ハナの「いつてらしやい」の言葉に送られて、三人は家を出た。朝の墓参りの時は、霧が立ち込めていたのだが、今は飛び散って、抜けるような青空に変わっていた。十分ほど歩いたところで、薫が立ち止まって息を大きく吸って、

「山の空気、なんて新鮮で心を弾ませてくれるの」

と声を上げてから、周囲を見渡した。緑の丘陵地帯に小川が流れ、それが緩やかな曲線を描きながら果てしなく蛇行している光景に、彼女はため息をついた。今度は、足元に目を落とした。

「あッ、エンチアンが咲いているわ。なんと深い青色なのでしょう。あそこに、キンバイソウもアネモスモも咲いているわ」

彼女は、紫色や黄色や白色をした可憐な花々を心ゆくばかり見続けていた。

再び歩き出した。目をどこに向けても、色とりどりの高山植物が太陽の光を浴びながら咲き乱れているのを目にした薫が、「なんて美しい素顔なの」と小さな声で呟き、周りの景色を眺めながら歩いていた。拓郎はそれどころではなかった。自分が若い頃に経験したことが蘇っていたからだだった。

「まさか、こんなことが、あのときにあったとは…」

頭の中でそう呟きながら、彼は顔を下に向けて歩いていた。父の様子が何かおかしいことに気づいた正樹が、父に訊いた。

「何か心配事でもあるのですか」

「いや、何でもなし」

「体の調子でも悪いのですか」

「そんなことはない」

拓郎は無言で歩き続け、正樹と薫は肩を並べて歩いていた。

「あの山の高度は二千五百メートルで、その奥にはもっと高い山があつて、それを越すと、ダボスに出るよ」

兄が前面に映る山について、妹に説明をはじめた。

「スキー場で有名な、あのダボス？」

「そうだよ」

「そこまで行くの？」

「いや、あそここの山頂近くまで登って、そこに咲いているアルペンローゼを見るだけだよ。そこに、ハナと二度行ったことがあったね」

「お兄さんはいいなあ。このような景色を、毎日目にしながら生活していけるなんて」

「でも、この高度でのペンションとレストランの運営は、そう生易しいものではないぞ。

朝は、ハナも僕も五時前に起きて、やることは山ほどあるし…」

正樹は妹に、ここでの生活、特に、冬の山村での厳しい暮らしを語った。拓郎は二人から少し離れながら、手をうしろにまわしながら重い足取りで歩いていた。

ペンションを出てから、二時間が過ぎた。薫が兄に言った。

「お腹が減ってきたわ」

それを聞いた正樹は、立ち止まった。

「それでは、この近くで昼食を摂ることにしよう」

座り心地の良いところを見つけた三人は、ハナが作ったチーズとハム入りのパンを食べ

はじめた。が、拓郎はパンを手を持っているだけで、口に運ばなかった。その父に、薫が心配顔で訊いた。

「お父さん、何か変ね。一体どうしたの？」

「何でもない、それにしても、ここは眺めがいいな」

父は抑揚のない声でそう言うてから、パンを食べはじめた。拓郎は、初めて周囲の景色に目をやった。その父に、薫が言った。

「ここに来るまでも、いい眺めだったのに」

「そうだったかな」

拓郎は小さな声を出したあと、水筒に入っていたジュースを一口飲んだ。

パンを食べ終えた正樹が、腕時計をのぞきながら、

「今ごろ、ハナはあの二人と話をしているころだろうな。どうなることか」

と、呟いた。その声は、父の耳にわずかに届くくらいだった。

二つ目のパンを食べ終えた薫が、立ち上がって兄に訊いた。

「あの先のひと際高くなったところへ、ひとりで行ってもいいかしら？」

「いいよ。足元には十分気をつけるように。時々、靴が草地に沈み込む場合があるから」

薫は肯いてから、歩き出した。

拓郎は、正樹が先ほど呟いた言葉が耳から離れないでいた。

「正樹、さっき何か小さな声で言ったな、『どうなることか』と」

「そうでしたか。自分では意識していませんでしたが」

「プフォルツハイムで、おまえは、ハナのペンションは経営的には厳しいところもあると話したな」

「ええ」

その声を出してから、正樹は黙った。その彼に、父が真顔になって、

「話してくれないか」

と、息子の目を見ながら言った。それを聴いた正樹は、ハナとの結婚を父が受け入れたのだと思った。と同時に、ペンションの今後については、ハナと自分で解決することが大切だと思い、そのことについての話をしなかった。父はしばらく息子の顔を見続けたが、正樹は黙り続けていた。

薫が頬を紅潮させて戻ってきて、

「あそこから下を見ると、シュトラウス村がお花畑のなかにあって、近くに流れている小川の水面がキラッキラツと輝き、それは素晴らしい眺望だったわ」

と、今もまだ興奮さめやらぬ声を出した。

三人は再び歩き出した。夏雲が青空にぽっかりと浮かんでいる下、薫たちはどこからともなく聞こえてくるカウベルのカランコロンの音を耳にしながら、柔らかい草地を踏み続けていた。時々登山者とすれ違ふと、お互いに「こんにちは」と挨拶を交わし、歩いては立ち止まり、アルプスの光景を満喫しながら進んでいた。

二十分もすると、岩場の登りとなった。今まで目にしてきた身丈二十〜三十センチの可憐な高山植物とは違い、岩と岩の間に密集して咲いているピンク色をしたこけが、辺り一面を被っていた。それらを踏まないようにして、薫たちは歩き続けた。

三人とも、汗が額から滲み出てくるようになった。さらに登って行くと、ツツジ科の類

であるアルペンローゼが、緩やかな斜面に百メートル以上も帯状になって咲いているのを見た薫が、

「まあ、目が吸い込まれていくわ」

と、感嘆の声を上げた。

拓郎も立ち止まった。朝から、ハナのペンダントのことが頭から離れないでいた彼だったが、目の前の光景に、「これは、すごい」と声を発した。その父の姿を見ながら、正樹が話した。

「ハナのペンションがアルペンローゼというのもわかるでしょ。あの鮮やか赤には、ハナのような力強さが宿っているのです」

拓郎は、誇ったように咲いているアルペンローゼを眺めながら肯いた。

なおも見続けていた薫が、兄に、

「あの花を採って、ハナさんに持っていくわ」

と言うと、正樹は、

「僕も初めてあの花を目にしたとき、それをペンションの食堂に飾ろうとハナに勧めたのだが、彼女は、『アルペンローゼは、気高いまでの気品を備えた山の花だわ。ここで咲いているのが一番よ。採らないで。採ってはいけない花なのよ』と言ったことがあったよ」その言葉を聴いた薫は、ナツプサクからデジタルカメラを取り出して、前面に広がっているアルペンローゼを撮りはじめた。青い空、濃い緑の葉、それに真紅の色鮮やかなバラ系統の花を、薫は飽きることもなく眺め続けていた。

二十分ほどしてから、登ってきた道を戻りはじめた。三人はアルプスの雄大なパノラマ景色を目にしたながら、花の香りと夏草の匂いが漂う中をゆっくりと下った。

ペンションの入口前に三人が立つと、ハナが出てきて、拓郎に、

「どうでしたか」

と、訊いた。彼は何かを言おうとしたが、言葉がなかなか口から出てこないでいた。それを目にした薫が声を上げた。

「ここは、本当に花の宝庫ね。エンチアンとアルペンローゼも咲いていて」

「そう、それではカオルたちは、今日の一日でアルプスの三大花を見たことになるわね」

「えっ、三大花？」

「エンチアンとアルペンローゼ、それにエーデルワイスをこの地方では、山の三大花と呼んでいるわ。エーデルワイスの花は、わたしのペンダントで見たでしょ」

そう言って、ハナはニッコリした。が、その笑顔は、今までのような明るさがなかった。

それを感じ取った正樹は、今日の話し合いがうまくいかなかったのだろうと察した。薫と拓郎はハナの心の内を読み取ってはいなかった。

四人は食堂内を通ってバルコニーに出た。椅子に座った三人に、ハナが、「何を飲みますか」と訊いてから、調理室へ戻った。

パラソルの下で、三人は登山靴を脱ぎ、爽やかな風に吹かれながら、疲れた足を伸ばしていた。

少しすると、ハナがビールを持って来て、彼女も椅子に座った。

喉が渴いていた正樹と薫は冷たいビールを口に入れては、満足そうな表情を浮かべていた。ただ、拓郎はビールを半分飲み終えると、「疲れたので、部屋に戻る」と声を出して、

椅子から腰を上げた。その父を、正樹と薫は不思議そうに見つめた。

薫が山歩きの様子をハナに語り出した。ハナは、その話に耳を傾け続けていた。しばらくすると、ハナが正樹に、

「そろそろ夕食の支度をしなければいけない時間だわ。その前に話したいことがあるので、マサ、わたしの部屋に来て」

と、言った。正樹は肯き、椅子から立ち上がって彼女のあとに続いた。薫は、目の前に広がるアルプの景色を眺め続けていた。

三十分ほどすると、正樹が再びバルコニーに現われた。

「薫、また手伝ってくれるか」

「ええ、いいわよ」

妹は、兄の顔を見ながらそう応えた。その兄の目がいくらか引きつって、赤ら顔で落ち着きがないことは、妹の薫にはひと目でわかった。

部屋に戻った拓郎は、ソファアに腰かけ続けていた。身体は疲れきっていたが、若い頃のことが記憶の底から浮かび上がり、いつ静まるもしれぬ気持ちで、彼は当時のことを想い起こしていた。

正樹がドアをノックした。

「父さん、夕食の仕度ができました」

それを聞いた拓郎は、我に返り、

「今、そっちへ行く」

と応えてから、立ち上がった。時計の針は、日が沈みはじめた九時を指していた。

第七章 知らねばならない

チーズの匂いが食堂内に漂うなか、拓郎は三人が座っているところに近寄った。

錫製のフォンデュ用なべが、テーブルの真ん中でグツグツと音を出していた。彼は空いた椅子に座った。

少しすると、ワイングラスを手を持ちながら、ハナが日本語で「カンパイ！」と声を上げ、四人での夕餉がはじまった。金ぐしに小さなパンを刺し、それを煮え立ったチーズに巻きつけるようにして口に入れる料理。スイス人がよく食べるものだった。

薫は蕩けたチーズのついた小さなパン切れを口に運ぶたびに、「おいしい、おいしい」を連発しながら食べていた。拓郎は、「旨い」との声を出したが、実感があるのかないのかわからない響きだった。

ハナがこの料理の由来について二人に語り出した。正樹は何となく沈んだ顔で、それを耳にしていた。一つのテーブルを囲んで、四人四様の姿があった。が、一家族が時を共有して過ごしていることは、ひと目でわかるものだった。

一時間半が過ぎた。拓郎は三杯目のワインを飲んだあと、「疲れがドツと出てきた」と言って、席を立って自分の部屋に戻った。

ハナは明日の朝食の準備をするために、調理室へ向かった。正樹も調理室に行こうとすると、薫が兄の顔を見て訊いた。

「お兄さん、何かあったの？　いつものお兄さんと違って、元気がないように見えるわ」「そうかな」

そう答えてから、正樹は次に出す言葉を探したが、なかなか口から出てこないでいた。

「お兄さん、私たちは小さいころから、何でも話し合っていたでしょ。わたしが大学へ進もうか、お父さんのお店で働くかに迷っていた際に、アドバイスをしてくれたわね。また、お兄さんが五年前にドイツへ行こうかと考えていたとき、わたしの意見も参考にしてくれたわよね」

「そうだったな」

正樹は椅子から立ち上がりかけてから、また椅子に腰かけ、前に座っている妹に話し出した。

「今日、二人がハナのところに訪ねてきたことは知っているね」

「ええ、アロサから来た人たちのことでしょ」

「一人は銀行員で、もう一人は大きなホテルの経営者だったのだ」

兄は、妹の眼差しが真剣なのを感じながら話し続けた。

「このペンションは、ハナの祖母の前の代から細々と続いていたが、その祖母の時分に、レストランも経営できるように建物を改築したのだ。それにかかった費用は、ペンションの横にある空き地を担保にして、銀行から借りたのだ。その借金は月々返済していたが、まだ返し切っていないのだ。返済期限はどうに過ぎたが、銀行側の配慮で今日まで延ばしてくれていた」

語り続けた。

「銀行側は、貸した金の残りを、今年の夏のシーズンが終わるまでに返すか、または空き地を処分して、それに当てるかと通告してきたのだ。ハナは、これから僕と一緒にあって、その空き地にこのアルペンローゼを増築して、今の二倍のお客が泊まれるペンションにしたい計画を練っていたのだが」

薫は兄の目を熟視しながら、聴いていた。

「とにかく、このペンションとレストランにくる客だけでは、今後やっていけないということは明白なのだ。もちろん、僕はハナの計画に賛成した」

「でも、今までの借金はあるし、増築の資金もないのですよ？」

「それは、この家と土地を担保に銀行から借りようとしていた。銀行には、そのことはすでに話していた」

「で、銀行側は何て言ったの？」

「その返事をもって、今日、銀行員が来たのだ」

そこまで言って、黙った。薫は、兄が話し出すのを待った。

「この地は、薫もわかるように素晴らしいところなのだ」

「ええ、天使が憩うようなところだわ」

「そうだろ。これから拓ける地なのだ。現に、アロサの大ホテル経営者がこの地に別館を建てたいと望んでいるのだから。今日、銀行の人と一緒に来た人が、その経営者だったのだ」

「その人が、このペンションと土地を買いたがっているのね」

「そうなのだ。ここにコンクリートのホテルを建て、ハナを共同経営者として、その女主人にしたいと彼はハナを説き伏せようとしたのだ。でも、ホテルの権利などは五十一パーセントが彼に、四十九パーセントがハナに。この一パーセントの違いは大きくて、いざという際は、相手の意思に従わなければならぬのだ。いずれ、彼はここを自分のものにしたいのだよ。ハナはそのことを見抜いていたからね」

「そうなの。そんな大変な時期に、私たちが来たのね。それにしてもハナさんは心を乱さずに私たちを接待してくれて、すごい人ね。そんな大切な話が数時間前にあつたとは、想像さえもできなかったわ」

「ハナは、祖母一人に育てられ、冬のこの厳しい地で培われた強い精神力があるから、こんなことで相手の言いなりにならないよ」

そう言って、正樹は口を噤んだ。

「どのくらいの借金があるの？」

「日本のお金に換算すると、約一千万円は残っている」

「大金ね。増築するには、どのくらいと見積もっているの？」

「二十万円以上はかかるだろう」

二人とも黙った。しばらくすると、薫が、

「それで、ハナさんはどうしようとしているの？」

と、訊いた。正樹はそれには答えないうでいた。その兄の顔を見ながら、薫はさらに訊いた。

「夏のシーズンの終わる九月までに、返事をしないといけないのでしょ？」

「ハナには親戚もないし、お金を融通してくれる人もいないのを、あのホテル経営者は知っていて、早く事を運びたいのだ」

そう言うてから、正樹は椅子から立ち上がろうとした。と、薫が兄の目を見ながら、

「ちよつと、お兄さん待って！ お父さんに話をしてみたら？」

と、いつもよりも高い声で言った。

「父さんは何もしてくれないよ。父さんは自分のためにはお金を使うが、自分以外の人、たとえ、息子のためでもお金を融通しないよ。父さんは自分さえよければと、いつも考えていたからね。お母さんが生きていたら、相談したかもしれないが」

「でも、お父さんはお兄さんが東京に戻って、お兄さんがやりたいような店にしようとお金を用意していたと思うわ」

「それは間接的に、自分のためになるからだろう」

「とにかく、話してみたら」

「いや、それはしない。この話を父さんには伝えるな！」

正樹は語句を強めてそう言うてから、明日の朝食の準備をするために調理室へ向かった。薫は、あと少しで消えそうな目の前のローソクの炎を見続けていた。その彼女も立ち上がった。

部屋に戻っても、薫は先ほどの話の内容が頭の中を駆け巡り、ベッドに入るところではなかった。ソファーに腰かけたまま、兄との話を思い返し、いい案がないかと考えを巡らし続けていた。

明け方になっても、薫はベッドに入らないでいた。

ニワトリの鳴く声とともに、朝日が窓から差し込んできたのを感じた彼女は、ソファから立ち上がって、部屋の灯りを消し、再びソファに腰かけた。と、壁一つを隔てて寝ていた父のベッドの軋む音が、彼女の耳に入った。しばらくすると、ドアを開けて外へ出て行く父の足音を、彼女は耳にした。

拓郎は、ペンションの玄関の戸を開けて、昨日ハナが案内した墓へ向かって歩き出した。村はまだ眠っていた。一羽のニワトリが辺りの静けさを破るようにまた高い声で鳴き出した。

古い木柵の戸を開け、墓地に足を踏み入れた拓郎は、シモーネ・マイヤーと刻まれた墓石前に立った。彼女の生前の生活は、一体どのようなものだったのだろう。あのペンダントは何を意味しているのだ。ハナは正樹と同じ年月に生まれたと聞いたが、もしかしたら……。知らなければならぬ。確かねばならない。拓郎は、シモーネと刻まれた墓石の文字と写真を見続けていた。

墓地を出た彼は、来た道を引き帰してペンションに戻った。部屋のドアを開けて中に入ると、薫の寝室に通じるもう一つのドアから彼女が出てきた。

「朝早くからの散歩？ お父さんがこんな時間に、散歩に行くなんて滅多にないことね」

そう言葉をかけて、薫はソファに座ろうとする父に、

「ちよつと、話があるのだけれど」

と、言った。拓郎は、目の周りが赤っぽくなっている娘の顔を見た。眠っていないのが、ひと目でわかった。

「何だ？」

そう声を出してから、父は娘と一緒にソファに腰かけた。薫は父の目を正視した。

「これから話すことは、深刻なので驚かないで。お兄さんからは、『父さんには話すな』と口止めされたけれど、お父さんなら何とかしてくれると思っただけで言うことにするわ」

薫はいつもと違い、語句を区切るようにして、昨夜兄から聞いたことを一つも洩らさずに父に語った。父は腕を組んで耳を立てていた。

「わたしがお兄さんに、『お父さんに話してみたら』と勧めただけけれど、『父さんは耳を貸さないよ』と言ったわ。そんなことないでしょ、お父さん！」

最後の語句を強くして言った。拓郎は表情を変えずに黙っていた。

しばらくすると、彼はソファから立ち上がった。

「外を歩いてくる」

「また、散歩なの？」

拓郎はそれには答えずに、部屋から出た。薫は父から何か肯定的な言葉がもらえるだろうと期待していたのだが、そうではなかったことになりして、自分の部屋に戻った。

一時間半して、外に出かけた拓郎がペンションに戻ってきた。自分の部屋に入るや、スーツケースから住所録の手帳を取り出し、電話をかけた。

五分ほどしてから、彼は受話器を置き、「これでよし」と呟いた。その時、誰かがドアをノックした。

「朝食の仕度ができました」

ハナの声だった。それを聴き、彼は食堂へ向かった。

薫はすでにパンを食べていた。

「どこに行っていたの？」

横に座った父に、訊いた。

「朝日が昇るのを見ながら、二日前に車で走った道を歩いていた」

「そうなの。あと一時間して戻ってこなかったら、お兄さんとも話をしたのだけれど、探しに行こうとしたわ」

「あの道では、迷わないさ」

そう言うことから、拓郎もこの村で焼かれたパンを食べ出した。

少しすると、正樹とハナが二人のところに来て、今日をどのように過ごすかとの話し合いになった。拓郎は、二人の顔を見ないで、ハナの手作りのイチゴジャムをパンに塗りながら、

「あと一泊して、明日フランクフルト空港へ向かおうとしたが、それは止めにして、この朝食を摂ったら、ここを発つことにする」

と、言った。それを聞いた正樹と薫が同時に、

「えっ、これから！」

と、声を上げた。

「昔ドイツにいたときに知り合った人がいて、その人に会いたくなかったのだ。先ほど、その人と電話で話をして、今日の夕方会うことにした」

「お父さん、そんな！」

薫は高い声を出して、父の横顔を見た。彼女は、今朝話をしたことが原因で、父は機嫌をそこねたのかなと思っただけ。薫はなおも父を見続けた。いつも明るい顔でいたハナも一瞬、曇ったような表情を浮かべた。正樹も不信そうな顔を浮かべた。

「残念だわ。もう一泊してもらい、今日はこの周辺を一緒に歩きたかったのですが」

ハナはそう言い、拓郎の顔を見つめた。その時、彼女は拓郎の耳に、二つのホクロがあるのに気がついた。

「耳たぶにホクロがあるんですね。わたしにもあるのですよ。偶然ですね」

拓郎は、それには応えなかった。その父に、正樹が訊いた。

「お父さん、昨日は山に登って、今日あたりは相当疲れが出ているのではないですか」

「いや、疲れはない」

それを聴いた薫は、今年で八十三歳になったキーンおばあちゃんには脚が達者で、それを受け継いでいる父のことだから、体には心配ないと思った。少しすると、ハナが薫に訊いた。

「カオルは、どうするの？」

「わたしはこの近くの景色に魅せられたので、この周辺を散策します」

「では、一緒に歩きましょう。案内するわ」

ハナは再び明るい顔となった。そのハナに、薫が訊いた。

「あと一週間ここで過ごす積もりでいたのだけれども、もっと延ばして、ここで一ヶ月間滞在してもいいですか。航空券は延長できるので」

「もちろんよ」

ハナは、微笑みながら答えた。

「ありがとう、ハナさん」

薫は微笑み返した。

クーア駅へ発つ時刻となった。拓郎は薫に見送られて、ハナが運転する車に乗った。正樹も一緒だった。五分ほどすると、車は停まった。三人は車から降りて、ハナの母が転落したところに立った。ハナが十字架を指差しながら、正樹に語りかけた。

「今日の朝、ここに誰か訪れたのかしら？ ほら、十字架の前に人の足跡があるわ」

「うん、村の人が来たのだろう」

「そうね」

拓郎は、それは自分の足跡だとは言わなかった。三人は十字架の前に立って目を瞑った。車が再び走り出して二分もしないうちに、ハナが急にモーターを止めた。助手席に座っていた正樹が、彼女の横顔を見た。

「どうしたの？」

「ほら、あそこにいる三頭の馬たち、何かおかしいわ。首を下に向けたまま、動かないでいるわ」

百メートル離れたところに立っている馬たちを、ハナは指差した。

「草を食んでいるみたいだが、それがどうかしたの？」

「いや、違うわ。何か変よ。わたし、あそこへ行ってくるわ」

彼女は車を降り、馬たちのところへ駆け出した。数分が過ぎても、戻ってこない。正樹は父に、

「まだ時間は十分にあるし、僕もあそこへ行ってきます」

と、言った。それを聴いた父も車から降り、馬たちのところへ向かった。

正樹と拓郎は、草地に横たわっている馬の首を撫でているハナを見た。馬の目は閉じていた。周りに立っている馬三頭は横たわっている馬に向かって、前足を軽く動かして、「起きろよ」と呼びかけているようでもあった。

二人の姿を見たハナは、馬の首を撫でながら、

「心臓の鼓動が聞こえないわ。傷などはどこにもないのに。今朝、心臓マヒで急に死んだのだと思うわ」

と、低い声を出した。正樹と拓郎にとっては、初めて目にする情景だった。特に、拓郎は死んでいる馬よりも、同じ時を一緒に過ごした三頭が前足を動かして、仲間の死を深く悼み、悲しんでいる姿に目を向け続けていた。

ハナは立ち上がり、目をしばらく閉じたのち、携帯電話で馬主に知らせた。

第八章 エゴイストよ

拓郎は正樹とハナと別れの握手をクーア駅でしてから、列車に乗った。空いた席があったので、そこに腰かけたと同時に、ハナと自分との関係の事実をしっかりと見つめなければと考え出した。それが次第に募り出すと、「どうしても、確かめなければならない」と

口に出して何度も呟くようになった。

チューリッヒ駅でドイツ行きの列車に乗り換えた彼が、再びプフォルツハイムに着いたのは夕方前だった。彼は駅前からタクシーに乗って、三日前に宿泊していたホテルへ向かった。

拓郎は部屋に入り、腕時計をのぞいた。約束した時間までにはまだかなりあると思った彼は、ホテル一階のレストランで夕食を摂ろうとした。

夕方六時半、拓郎がレストランに行くと、客が数名いるだけだった。メニューから、牛の薄切り肉で野菜を巻き込んだローラードを注文した。その料理は、彼がシモーネの住んでいたアパートに初めて訪れた時に食べたものだった。それ以来、彼女の部屋でそれを何度か食べたことがあった。

二十分ほどしてから、ウエートレスが大きな皿を運んできた。それに目を注いだ拓郎は、まずナイフで野菜巻きの肉を小さく切って口に運んだ。と、からの利いた風味が、シモーネと初めて出会った時のことを想い起こさせはじめていた。

あれは、プフォルツハイムの木工所で働き出して、ちょうど一年が過ぎた日だった。いつもは昼食用のパンを持って、作業所へ出かけていたのだ。しかし、あの日は仕事はじまる八時前に起きたので、ハムの挟んだパンを作る時間がなく、急いで木工所へ行ったのだ。

太く重い幹を持ち上げ、それを幅十五センチ厚さ二センチ長さ四メートルほどの板に切断して、二メートルの高さに積み重ねるのが自分の仕事だった。木屑がいつも頭にのって、切断する機械から出るような音や音を耳にしながらの作業だった。かなりの肉体労働だったので、昼食なしで働き続けることは無理だった。仕方なく、あの日、従業員四十名が利用する食堂に食券なしで行ったのだ。

手作りのパンなら百円で済んだが、食堂で食べるとなると、その五倍はした。自分は臨時のアルバイト、それもヤミで働く身だったので、正規従業員に手渡されている食券を持っていなかった。

皿に料理を盛るエプロン姿の太ったおばさんに、「食券を持ってないので、現金で払うよ」と言ったのだが、断られてしまったのだ。どうしようかと立ち尽くしていると、一人の女性が近寄って来て、「どうしたの？ 食券がないようね。わたしがあるから、これをあげるわ」と言って、太ったおばさんに食券を渡したのだ。

その女性に礼を言ってから、財布からコインを出そうとすると、彼女が、「いらないわ」と首を横に振り、自分の皿を持って同僚の女性が座っているテーブルへ向かったのだ。

翌日、事務所で高い金を払って食券を買い、食堂に行ったのだ。昨日のように火の通った暖かい料理を食べたこともあったが、それ以外に目的があったからだった。

食堂に入り、太ったおばさんに食券を渡し、皿を持ちながら辺りを見回したが、昨日の女性の姿を見つけることができなかった。仕方なく、空いた席を見つけたので、そこに腰かけたのだ。

食べはじめてみると、二人の若い女性が笑い声を立てながらテーブルに着き、昨日の女性がこちらを見てニコリしたのだ。その目は、輝くように澄んでいた。

皿に盛った料理を食べ続けていると、彼女が寄ってきたのだ。

「今日は、食券を持っていたのね」

「事務所で食券を買ったよ」

そう言うてから、ズボンのポケットから一枚の食券を取り出したのだ。

「これ、ありがとう。昨日は助かったよ」

「いいわよ。何枚も持っていたので、あげただけだから」

「でも、これ、返すよ」

食券を渡そうとしたのだが、彼女は、「いらないわ」と手を横に振ったのだ。でも、無理やりに手渡すと、彼女が、「そう」と声を出して受け取り、同僚のいるテーブルに戻ったのだ。

翌日も食堂に行き、皿を持ってどこのテーブルに着こうかと辺りを見回すと、彼女がひとりで座っていたので、そちらへ向かったのだ。

「ここ、空いているの？」

「ええ」

「腰かけてもいいかな？」

「どうぞ」

彼女の前に座り、食べ出してから、

「今日は、一人なの？」

と、訊いたのだ。

「ええ、同僚のモニカは展示会へ行ったわ」

「展示会？」

「わたしは木の彫刻班で仕事をしているでしょ。フライブルクで私たちの作った作品が、今日から一週間展示されているわ。モニカは今そこにいるわ」

薄ブルー色の瞳をこちらに向けて言ったのだ。一瞬、明るい瞳に吸い込まれそうになった。目を皿に落とし食べ続けていると、彼女が、訊いたのだ。

「よかつたら、名前は何ていうの？」

「タクロウ・フジサワ」

「わたしはシモーネ・マイヤーよ」

そう言うて、彼女はニッコリして握手を求めてきたのだ。太陽の光線が窓ガラスを通してテーブルに注ぎ、その光が彼女の明るいあざき色をした柔らかな髪に反射して、眩しいくらいに輝いていたのだ。その彼女がフォークとナイフを手にしながら、

「会社の従業員から、アジア系の人が一年前からここでアルバイトをしていると聞いたわ。あなたがそうなのでしょ。どこの国からやって来たの？」

と、言ったのだ。

「日本から、東京に住んでいたよ」

「そうなの。わたしの親が営んでいるスイスの山奥のペンションに、東京から登山者が訪れたことがあったわ。もう三年前のことになるかしら」

「君はスイス人なのか。ドイツ人とは、アクセントが違うと思ったが」

「ここに来て二ヶ月が過ぎたわ。あと七ヶ月ほどここにいてから。わたしのふるさとへ帰るわ」

彼女は微笑を浮かべながら、そう言ったあと、

「スイスに行ったことはないの？」

と、訊いてきたのだ。

「ドイツで金を貯めては、スペイン、ポルトガル、イタリアに行き、ひとり旅をしたことがあったが、スイスに足を踏み入れたことはないよ」

「スイス、それもアルプスでの暮らしはいいわよ。ここに来たのは、ふるさとでは冬になると、雪が数メートルも積もってしまい、外では仕事ができなくなってしまうので、家のなかで木を彫る仕事をしようとして、この会社でそのテクニクを教わっているのよ」

いつも民族衣装的な服を身につけ、登山靴でリズムカルに歩いている彼女の姿を木工所内で何度も見かけたことがあった。周りの女性たちがほとんどジーンズ姿だったのに、彼女だけが裾が広がった、動き易いスカートをはき、清潔感が漂っていたのだ。

皿に盛ったものを食べ終えた彼女は、椅子から腰を浮かしかけたのだ。その時、彼女の澄んだ目を見ながら、訊いたのだ。

「明日も、ここに来るの？」

「ええ」

彼女は立ち上がり、笑顔を浮かべながら応えたのだった。歯が白く輝いて、健康的な顔だった。

翌日も翌々日も、彼女と一緒に昼食を摂ったのだった。

それから数日が経った週末、シモーネに招かれて、彼女のアパートへ訪れることになったのだ。その時に食べた料理が、今口になっているローラーだった。

拓郎は皿にのっていた最後の肉を食べ終えたあとも、彼女と毎日過ごした半年近くの日々のことを思い起こしていた。

ウエートレスの「食後にコーヒーを飲みますか」との声に、拓郎はハツとして腕時計をのぞいた。八時三十分前。約束の時間に遅れてはいけないと思い、彼は勘定を急いで支払ってから外に出た。

歩いて二十分で、待ち合わせたティールームに入った拓郎は、辺りを見回した。と、一人の女性が手を振っているのを見つけた彼は、そのテーブルに歩み寄った。

「わたしよ」

金色に白い髪の毛の混じった女性が椅子から立ち上がり、拓郎に手を差し伸べてきた。彼はすぐにモニカだとわかった。

「久しぶり、モニカ」

拓郎は彼女と握手を交わしてから、椅子に座った。

「もう三十年近くも会っていないわね」

彼女はそう言い、目を細めながら拓郎の顔全体を眺めた。

「昨日、スイスのシュトラウス村から、電話がかかってきたので驚いたわ。シモーネは元気にいるの？ 彼女がスイスに帰ってからお互い何の連絡もしていなかったの、あなたの声を聞いたときは、本当に驚いたわ。あのときは、本当に心配したわよ。シモーネは妊娠していたしね。あのときの子、元気なんでしょう？」

それを聴いた拓郎は、「エッ」と声を発して、上半身をうしろに引いて唾を一つ飲み込んだ。彼は、「やはり、そうだったのか」と心の中で呟き、テーブルの上に置かれていたメニュー表を見るではなしに目を落としたままでいた。その彼を見ながら、モニカが訊いた。

「拓郎、あなたたちの生活、今はどうなっているの？」

彼はそれに何と答えていいのか一瞬、言葉を失い、口を噤んでいた。

ウエートレスが来て、モニカは飲み物の注文をしたが、拓郎は返事をしないでいた。その彼に代わって、モニカがコーヒートを注文した。彼女は拓郎の顔をのぞき込むように見続けた。

胸を突かれたようになった彼は、しばらくの間、黙っていたが、少しすると口を開いた。「昨日、きみに電話をかけたが、あそこには数日前からだけなのだ。シュトラウス村がシモーネのふるさとだとは知らなかった。それに、日本に帰って以来、シモーネとは連絡を取り合っていないかったのだ。彼女が当時妊娠しているとはまったく知らなかったのだ」

そう言うってから、拓郎は次の言葉を探しあぐねた。モニカは目を白黒させ、訝しそうに拓郎を見つめた。その彼女に、拓郎が、シモーネが不慮の事故で命を落としたことを知らせた。

「シモーネが橋から落ちたって！ 信じられないわ。いつのこと？」

「彼女がスイスに戻って、四年が過ぎたときに。自分もそのことを三日前に知ったのだ」

「そんな！」

モニカは啞然とした顔となった。ウエートレスが二つのコーヒークップをテーブルに置いて立ち去るや、彼女は拓郎の目を正視した。

「シモーネは、あなたが日本へ急に行ったとき、『拓郎はすぐに戻ってくるから』と言ったわ。わたしもそれを信じたわ」

モニカは拓郎の目を見続けていた。その彼女に、拓郎が低い声で言った。

「あのときは、またドイツに戻ってくる積りだった」

が、果たしてそうだったかと自問した。父が危篤との連絡を受け、すぐに日本へ戻ったのだ。父の死には間に合わず、それから五日して、今度は芳子の父が亡くなり、彼女の店を継ぐというところで、芳子と結婚し、これで貧しさから自由になると思った自分だ。果たしてシモーネのところに戻ったのだろうか。いや、戻らなかっただろう。

モニカは、コーヒートを一口飲んだ。

「あなたが日本へ帰ってから、一週間後に妊娠していることを、彼女は知ったわ。あなたに連絡しようとも、日本の住所も知らず、あなたが住んでいたところの大家さんにも訊いたけれど、知ることはできなかったわ。ただ、『拓郎はかならず戻ってくる』とシモーネは信じていたわ」

疑惑の目で拓郎を見つめながら、彼女は続けた。

「一ヶ月、二ヶ月と、あなたからの連絡を待っていたわ。ドイツの法では、墮胎は三ヶ月以後許されないわ。それが過ぎていたし、彼女は子供を生むと言って、スイスに帰っていたわ。それ以後、彼女から連絡がなかったわ」

拓郎は、声のトーンが次第に高くなってきたモニカの言葉を聴いていた。と同時に、罪責の念が襲ってきて、胸が締めつけられ、頭を下げたままでいた。

「あのときに、お腹のなかに入っていた子はどうなったのかしら？」

モニカは自分の気持ちを落ち着かせようと、声を落としながら自分に言った。それを聴いた拓郎は、頭を上げて、

「女の子が産まれ、その子が、今、シモーネのペンションを営んでいる」と、言った。それを聴いたモニカは、啞然とした顔で彼を見つめた。

「会ってきたの？」

「会ったよ。でも、誰が父親だか知らない」

モニカの顔に、再び不快感が走った。

「あなたは、シモーネが妊娠していたことを本当に知らなかったの？」

「まったく、知らなかった」

二人の間に沈黙が流れ続けた。

モニカが口を切った。

「山に関心のなかったあなたが、なぜ、シュトラウス村へ行ったの？」

「それが、偶然というか、巡り合わせなのだろうか」

拓郎は息子とハナの関係を彼女に詳しく語った。それを聴いたモニカが高い声を上げた。

「それでは、きょうだいの結婚になるのではないの！ そんなこと許されないわよ。まして、若い二人は何も知らないで」

周囲の人たちが一瞬、二人を見た。モニカはカップに残っていたコーヒーを飲んだあと、声を落とした。

「シモーネから紹介されて、あなたと初めて会ったとき、あなたは、『自分の時間を、自分の思い通りにして過ごせばいいのだ。鳥のように自由に大空を飛んでね』と言ったわね。でも、あなたは鳥とは違って、飛んだあとにいやな跡を残していったわ」

拓郎を睨むようにして語り続けた。

「シモーネはあなたのことを、『よく働かし、よく気がつく人よ』と何度も言ったわ。でも、わたしにはそう思えなかったわ。エゴイストに映ったわ。それは、今も変わらないみたいね。責任感のない人よ。シモーネはあなたとの関係をどうしても保とうとしたわ。一途に思い込むところがある彼女だったから。いざとなったら、日本へ行って暮らそうとも考えていたわ。それなのに、あなたという人は……」

拓郎は、モニカの責め立てる言葉を黙って聴き続けていた。

「当時、わたしは結婚していたし、二ヶ月過ぎても、シモーネに何の連絡もしてこないあなたのことを夫に話したとき、彼もあなたをエゴの強い人だと言ったわ。それがあなたの言う自由の意味だったの？」

鋭い言葉を浴びせてくるモニカの言葉に、拓郎は頭を下げ続けていた。しばらくすると、拓郎は急に頭をもたげ、モニカの顔を見た。

「きみの夫は、たしか法律関係の仕事をしていたよね。今も、その仕事をしているの？」

「ええ、駅前通りのところで。それが何か。話をそらさないで！」

「逸らしてはいない。明日、飛行機に乗るのだが、その前に、一人の依頼客として相談したいことがあるのだが」

「それなら、これからわたしの家に来ては？」

「もう、十時過ぎだし、今、体と頭が疲れ切っている。明日の午前中に、事務所に行くことにするよ。話の内容は、きみの夫から聞いてくれ」

「わかったわ。彼に伝えておくわ。彼の事務所は、駅前通りの三番地よ」

それを聴き、彼は立ち上がった。モニカが、ホテルまで一緒に歩いて行くわと言ったが、拓郎はそれを断って、タクシーを呼んだ。

ホテルの部屋に戻った彼はベッドに入ったが、自分がしてきたことを省みていると、神経が研ぎ澄まされ、特に、モニカとの会話で、自分の非をあからさまに指摘されて、「エゴイストよ。責任感のない人よ。それがあなたの自由の意味だったの？」の言葉が脳裏から離れないでいた。

シモーネと知り合ってからの日々は純粹だった。人との関係の中で、はじめて自由を味わったからだ。ところが日本に戻って、日本の社会で働いていると、金を作り出すことが自分の生を豊かにし、成功の道だと思ふようになった自分だ。

拓郎は、部屋の小さな冷蔵庫からビールを取り出して飲み、再びベッドに入った。しばらくすると、酔いが回って眠りに落ちた。が、意識は夢の中を彷徨い、何度も寝返りを打っていた。

小鳥の鳴き声とともに、彼は目を覚ました。朝食までには、まだ三時間あると思った彼は、外に出て散歩をしようとしてベッドから身を起こした。

当時よく散歩した道を歩き出した。周りの自然は昔と変わらないが、自分の心はあの時とは違う。シモーネと共にいた時は、心が自由だった。シモーネは、愛する心があれば、心は自由になるとよく言っていた。しかし、今の自分は…。

拓郎の足が森の入口前で止まった。意識してここに来たわけでもないのにと彼は呟きながら、針葉樹が立ち並ぶ薄暗い森に足を踏み入れた。

土と縦の木の織りなす小道を、彼は歩いていった。小鳥たちが鳴いてはいたが、彼の耳には入っていなかった。当時のことを思い返しながらか、彼はシモーネと手をつないでしばしば一緒に歩いた小道を踏み続けた。

彼は耳を澄ました。あれは、夏の暑い日だった。シモーネと一緒にテントを張って、森で過ごしたことがあった。たのしかった。昼間は森中を歩き回り、夜はランプを灯し、テントの中ではお互い思っていることを話し合ったのだ。彼女は生まれ育った故郷の景色、冬は春を待ち、春は夏を待ち。夏は秋を待ち、秋は冬を待つという四季の変化の中の心のありようを語り、大自然の時をよるこぶ彼女だった。その目は輝き、満月の光が彼女に注いでいたのだ。

彼女と結婚をしようと決意もした。しかし、父が危篤との知らせを受け、すぐに帰国することにになったのだ。そして、芳子と結婚し、それからというもの、金銭の欲望を充足するためにがむしやらに働くようになり、富を築いた。しかし、気がつくやうに、金を追いかけ、人を思う気持ちがなくなっていた。

拓郎の頭に、再びモニカが言った「あなたは、責任感の欠けた人」の言葉が浮かんだ。責任について、シモーネとテントの中で話し合ったこともあった。その時、彼女が「責任とは、相手が何かを発したとき、それを真摯に受け止め、誠実に返答して実行することよ」と言ったのだ。それを、自分はしなかった。彼女のところに戻ると約束したのに、それを守らなかつた。モニカの言うとおりだ。彼女はこの私を信頼して待っていたのだ。その信頼を裏切り、愛よりも金を選んだ自分だ。この歳になって己を省みると、情けない。だが、私の人生は終わったわけではない。まだまだ遣るべきことはあるのだ。そう思いながら、彼は森閑とした中を歩き続けた。

翌日、ホテルで朝食を摂った彼は、荷をまとめてからタクシーに乗り、法律事務所へ向かった。

駅前通りの三番地の建物内に入った彼が、外に出てきたのは一時間半が経ってからだった。彼はプフォルツハイム駅構内からモニカに電話をかけ、会ってくれた札をのべ、フランクフルト空港行きの列車に乗った。

車中、彼はお金でまた済ませようとする自分を見出し、溜め息をついた。その顔には、晴れ晴れしさはまったくなかった。

第九章 弁護士からの手紙

拓郎が日本に帰って一週間が過ぎた。ハナは、いつものように朝食の後片付けを済ませて、今朝配達されてきた封書を郵便箱から取り出した。その中に、チューリッヒの法律事務所と記された文字を見た彼女は、歩きながら封を切った。

読んでいるうちに、ハナの目が次第に大きくなっていった。彼女はタイプで打たれた内容文を再び読み返した。

「誰かのいたずらだわ。でも、署名してあるわね」

一枚の紙に目を落としながらそう呟き、泊り客の朝食が終わった食堂に入り、椅子に腰かけてその手紙をまた読み返した。

「まさか、本当かしら？」

首を傾げながら小さい声で言った。ちょうどその時、朝の仕入れに出かけた正樹と薫が、野菜などの入っている箱を持って食堂に入ってきた。二人が戻ったことも知らないで、ハナはなおも文面に目を注いでいた。

「ハナ、どうした？」

そう言っ、正樹は手紙を一心に読んでいるハナのところに歩み寄り、彼女の肩に手を置いた。

「あつ、マサ、帰ってきたの。これを読んでみて！」

ハナは椅子に腰かけた正樹に、今まで読んでいた手紙を見せた。薫も座った。

タイプで打たれた文面を読み終えた正樹は、また読み返した。ハナは、封筒の送り主のところを目を落とし続けていた。

「これは、何かのいたずらよ。いやないたずらだわ」

ハナが正樹に言った。

「いや、そうともいえないよ。住所と名前と電話番号、それに署名もしてある」

「でも、このような人が世のなかにいると思う？」

彼女は、なおも文面に目を注いでいる正樹に訊いた。彼は黙り続けていた。その二人に薫が話しかけた。

「何か、嫌なことが書かれてあるの？」

「いやなことではないわ。でも、信じられないことが記されているよ。カオルは、マサ

からこのペンションが経営的危機に立たされていることを聞いたでしょ」

「ええ、銀行の人が来て、ペンションの借金それに大きなホテルの社長がここを欲しがっていることは、兄から聞きましたけれど」

そう言っつて、薫は兄とハナの顔を見た。ハナは二週間前からここにいる薫を実の妹のように思い、何でも心の内を打ち明け、薫も明るいハナを実の姉のように慕うようになっていた。そのハナが、薫に話し出した。

「この手紙はチューリッヒの法律事務所からなの。アルペンローゼの経営者に、お金が贈与されると書かれてあるのよ」

「ほんと、それはいい話だわ」

「それが、小額ではないのよ」

「どのくらいの額なの？」

「日本の円に換算すると、どのくらいかしら？」

ハナは隣にいた正樹に訊いた。

「三千万円ぐらいだろう」

薫は驚いた表情を浮かべ、正樹の顔を見て、

「本当なの？」

と、声を出した。兄はその箇所に戻り目を注ぎながら、

「すでにその額は、この法律事務所ですでに預かっていると書かれてあるのだ」

と、言った。その兄に、薫が訊いた。

「預かっているということは、誰かがこの法律事務所に、すでにお金を送ったのね。一体、誰が？」

「それが、そのことに関しては、何も記されていないのだよ」

「ハナさんの親戚の人ではないの？」

薫がハナに言った。

「わたしには、兄弟もいないし、親もいないし、そんな大金を出してくれる親戚の人はいないわ」

「では、今までここに泊まっていたお客の誰かが、このペンションの経営が行き詰っているのを知って、投資というかたちでお金を寄せたのではないの？」

「そのような人を知らないわ」

二人の会話を聴いていた正樹が、ハナに訊いた。

「きみの母の友人ではないか？ 君の家系は、地元のキリスト教会の人たちと昔から深く結ばれていたよね。そのなかの誰かが援助しようとして出したのではないか」

「そのような人を知らないわ。まして、こんな高額を誰が出したりする？」

ハナは首を傾げながら応えた。正樹が文面の一箇所を指を当てた。

「ここに記されているね。銀行に振り込むので、ハナの銀行の口座番号を知らせてほしいと」

「ええ、でも、ここに書かれてあること、本当なのかしら？」

「この法律事務所に直接電話してみることだ」

正樹はハナに電話をかけるように促した。彼女は立ち上がり、受話器があるところへ向かった。

十分後、ハナが二人のところに戻ってきて、「これに署名した人と話をしたわ。明日の十時半、チューリッヒの事務所で彼と会うことになったわ」

と言い、再び手紙文に目を落とした。正樹と薫も同じように文面に目を注ぎ続けていた。翌日、ハナは泊り客十五名の朝食の準備を済ませ、車のドアを開けながら、正樹に「帰ってくるのは、二時ごろになるわ」と言って、ひとりでチューリッヒへ向かった。

午後一時半が過ぎた頃から、正樹はペンション前の駐車場に車が停まるたびに、調理場の窓からそちらに目をやっていた。その正樹が誰彼にいつでもなく、「ハナが帰ってきた」と声を上げて駐車場へ向った。

車から降りてきたハナに、正樹が訊いた。

「どうだった？」

「喉が渴いたわ。何かを飲みたいわ。チューリッヒからの帰り道、車が渋滞して遅れてしまったわ」

ハナは火照った顔でそう答えてから、正樹と一緒に食堂内を通って広いバルコニーへ行き、パラソルの下にある椅子に座った。ちょうどその時、昼食の後片付けを済ました薫が調理室のドアを開けて二人のところに来た。その姿を見た兄が、

「ハナは、喉が渴いている。リングジュースを持ってきてくれないか」

と、妹に言った。それを聞いた薫は、

「はい」

と返事をして、調理室に戻った。

ハナは前面に広がるいつもの見慣れた色とりどりの花の光景を目にして、ホッとした表情を浮かべ出した。二千四百メートルの山から吹き下ろすやわらかい風が、彼女の髪を撫でていた。その彼女に、正樹が話しかけた。

「チューリッヒの法律事務所の人、何て言っていた？」

「手紙を書いた人と、直接会ったわ」

ハナがそう応えた時、薫がリングジュースを持ってきて、テーブルの上に置いた。

「ありがとう。カオル」

ハナがそう声を出すと、薫はニッコリしながら、兄の横に座ろうとした。と、正樹が妹に言った。

「薫はすこしの間、向こうにいてくれるか」

それを聴いたハナが、笑顔で薫の顔を見た。

「カオルは、もう私たち家族の一員よ。ここに腰かけてもいいわよ」

「ありがとう。ハナさん」

薫は頭を少し下げながら、椅子に腰かけた。

「大きな事務所には、個室がいくつもあつたわ。そのなかの一室に入って、手紙に署名した人と会つたわ。その人は弁護士だつたわ」

ハナはコップに入ったリングジュースを二口飲んでから、話を続けた。

「これはいたずらではなく、本当のことだつたわ。わたしのいくつかの問いかけに、彼が答えてくれたわ」

「では、お金を贈与した人は誰だつた？」

頬がなおも火照っているハナの顔を見ながら、正樹が訊いた。

「それが、『それには、返答できない』と言ったわ。ただ、『ドイツの同僚から』だともつけ加えたわ」

「職業上の秘密か」

正樹が呟いた。しばらくの間、三人は黙ったままでいた。

少しすると、薫が言った。

「出どころは、ドイツからね」

彼女はさらにある言葉を口に出そうとしたが、ハナの前では言えなかった。正樹も、もしかしてハナの父親であるドイツ人からのお金ではと思ったが、口に出せなかった。ハナは、なおも黙っていた。その彼女が口を開いた。

「その弁護士に、一応わたしの口座番号を知らせてきたわ。でも、そのお金を受け取るかどうかは、これから結婚する相手と相談して決めると伝えたわ」

彼女はコップに残っていたリンゴジュースを飲み干してから、前に座っている正樹の目を正視した。

「わたしの知らない人から、お金それも大金をもらうなんていやだわ。気持ちが悪いわ。そのお金があれば、たしかに借金は返済できるし、ペンションの増築も可能となるけど。マサは、どう思う」

「僕は、何とも言えないよ。でも、お金を贈与した人は、なぜ、自分の名前を名乗らないのだろう。何か事情があるとはいえ、変だ」

そう言うことから、正樹は口を噤んだ。

少しすると、彼がハナにきつぱりとした口調で言った。

「『借金の返済で、このペンションとレストランが取られても、ゼロからやるわ。ホテルのオーナーの案にはのらないわ』と君は言ったよね。僕は、君とどこまでも一緒にやっていくよ」

それを聴いたハナは、ニツコリと肯いて正樹に両手を差し伸べた。薫の前で、二人の手がしっかりと結ばれた。

それから四日後、弁護士からの手紙のことを忘れたかのように振舞っていたハナと正樹だった。その二人が、午前中の仕事を済ませてからアロサの銀行へ行き、戻ったのは二時間後だった。

調理室で昼食の手伝いをしていた薫が、サラダソースを作っていた兄に訊いた。

「あの手紙の件、どうするか、もう決めたの？」

「あの話は、もうハナと話し合っていない。今日二人で銀行に行ったのは、この建物がどのくらいの額で売れるかを知るためだった」

「そうなの」

「銀行側は、借金の返済額ぐらいだろうと言ったよ。なにしろ、古い造りだからね」

「そう」

「薫、今日仕入れたジャガイモをボイルしてくれるか。それが終わったら、ハナが客室の掃除をしているので、その手伝いをしてほしい」

「はい」

薫はハナのところへ行く途中、二人はもうこのペンションを売る決心をしたのだと思っ

た。でも、彼女は吹っ切れないものを感じていた。

ハナは各室のベッドシートを換えているところだった。薫はその彼女に「手伝います」と声をかけてから、部屋内の掃除にとりかかった。三週間ペンションにいた彼女は、次に何をするかの仕事はわかるようになっていた。

薫は、この仕事は大変だと思った。朝五時前には起き、調理室で朝食と昼食と夕食作り、それに各室の掃除など、やることはいくつもあり、並の人ではやり続けていけないわ。気丈夫なハナさんだからこそできるのだわ。そのハナさんが、三代続いたペンションを出ていかざるをえないのかしら。何とかならないのかしら。そう思いながら、薫はハナと一緒に掃除を続けた。

夜の十一時になった。日本時間では朝の七時だった。薫はこのような時、お父さんだったら、何かいい知恵を出してくれるかもしれないと思い、東京の家に電話をかけた。

「お父さん、もう起きていた？」

「ああ、朝食を摂るところだ。元気にいるか？」

「ええ、お兄さんもハナさんも元気であるわ。ただ、変なことがあって…」

薫はハナ宛に届いた弁護士からの手紙について父に詳しく話した。

「それは、いいことではないか」

「それが、ハナさんは受け取らないようだよ。『名前もわからぬ人から、そんな大金をもらうわけにはいかない』と」

「それではペンションの運営が、今後できないではないか」

「お父さん、ペンションの経営が苦しいのを何で知っているの？」

「おまえが、話したではないか」

「あつ、そうだったわね」

薫は続けた。

「そのお金を出した人、ハナさんの父親のような気がするの。ドイツからの送金だから、ドイツ人の…」

拓郎は受話器を耳にしつかりと当て続けながら、娘の語ることを聴いていた。

「ハナさんとお兄さんは今日の午前中、銀行に行つて、ペンションがどのくらいの額で売れるかを訊いたそうよ」

「そんなバカな！」

父の声が、一オクターブ高くなった。

「もう、売る契約をしたのか」

「それは、まだ決めていないようよ」

「そうか」

そう言ったあと、拓郎はしばらく黙ったのちに呟いた。

「そうか。そうだろうな」

「今、何か言った？」

「いや、何も」

父の声がもとに戻った。

「お父さん、何かいい考えがないかしら？ 電話したのも、お父さんならいいアイデアを出してくれそうな気がして」

父は答えないうでいた。いや、返事ができないでいた。

「お父さん、聞こえている？」

「ああ」

その声を出してから、拓郎は黙った。

しばらくすると、父が娘に言った。

「おまえは、そろそろ論文のことが気になりだしたころではないか」

「そうでもないわ。ここにいると、体が自然と呼応して、考えの質も変わってくるのでいわ。それに、頭を休めるにはここはいいところだわ。もうすこしいるわ」

そう言ったあと、薫は続けた。

「キーソンおばあちゃん、元気でいるのでしょ？」

「ああ、ソソヒを連れて一週間前にふるさとへ行ったので、今日本にはいないぞ。あと数日したら、戻ってくるだろう。どういうわけか、彼女はお前の論文のことを気にかけていたぞ」

「そうなの。日本に帰ったら、キーソンおばあちゃんにこちらで見聞きしたことを話すわ」

「スイスのアルプスについてか」

「そうではなくて、わたしの論文についてよ」

「ああ、そうか」

そう言うてから、拓郎は受話器を置き、ソファーに座りながら、これからどうしようかと考えを巡らしはじめた。

翌朝、彼は朝食も摂らずに家を出て、目黒駅前の旅行店で三日後のチューリッヒ行きの航空券を購入し、これしかないと自分に言い聞かせながら目黒店へ向かった。

第十章 真相を明かす

飛行機内で目を閉じてても、拓郎はなかなか眠ることができずにいた。午後の八時過ぎ、チューリッヒ空港に降り立った彼は、一週間の滞在に必要な荷が入っている小さな旅行かばんを持って、日本から予約した駅前のホテルへ向かった。

ルームに入った彼は、早速アルペンローゼに電話をかけた。

「チューリッヒに着いたのですか」

ハナの声が彼の耳に入った。

「今、ホテルの部屋に入ったところだ」

「お疲れになっていませんか。お体の具合は、どうですか」

「機内では眠れなかったが、体調はいつもと変わりはない」

「そうですか。今、マサと代わります」

正樹が電話口に出た。

「父さんからのメールで、すぐにこちらに来るとのことを読み、驚きました。何か特別な用でもあるのですか」

「いや、おまえとハナに、どうしても話をしなければならぬことがあつて、やつて来たのだ」

「それなら、電話でも、よかつたのに」

「いや、おまえたち二人の顔を見ながら、話がしたかつたからな」

それを聴いた正樹は、よほど大切なことなのだろうと思つた。

「明日の何時にクーア駅に着きますか」

「正午ごろだろう。迎えに来なくていいぞ。ひとりでそちらへ行けるから」

「でも、ハナか僕かが迎えに出ます」

「その必要はない。ひとりで訪れたいところがあるのだ。アルペンローゼには、二時ごろ着くだろう」

「一人で訪れたいところが？」

「ああ、そうだ」

「わかりました。では、待っています」

息子との会話を終え、拓郎は受話器を置いた。

翌日朝食を済ませてから、彼は列車に乗った。座席に腰かけながら、これから二人にどのようにして話をもつていこうかと考え続けていた。

列車は二時間でスイス東部のクーア駅に到着。拓郎は駅構内のスナック店で軽い昼食を摂つたあと、アロサ行きのバスに乗った。

車窓に映る山村と緑豊かな自然の景色に目をやりながら、彼はシモーネと一緒に過ごした日々を想い起こしていた。シモーネは、思っていることは何でも口に出し、こちらの言うことは必ず耳を傾けてくれた。彼女と一緒にいると、自分も思っていることを何でも話すようになった。あのような日々は、それまでにはなかつたことだ。今日に至るまで胸を開いて、人と何でも話し合つたことがあつただろうか。最も身近にいた家族ともしなかつた自分だ。しかし、あの半年間は、背筋を伸ばしていたものだ。周りが新鮮に見えたものだった。

拓郎は停車を知らせるボタンを押してからバスから降り、五十メートル先に見える小さな木の十字架ところまで歩いて行つた。

小さな花入れには、ハナが持つてきた色とりどりの花が束になって納まつていた。その前で、彼は目を瞑つて手を合わせた。

バス停に戻つた拓郎は、時刻表を見た。あと一時間半待たないと、シュトラウス村行きバスが来ないのを知つた彼は、徒歩で四十分もかからない道を、小さな旅行かばんを持つて歩き出した。

周囲の景色に目をやった彼は、入道雲が青空にぼつかりと白く浮かび、緑の草原に咲いている高山植物を目にして、再びアルプにやつて来たのだと肌で感じ出していた。しかし、それは五分もしないで終わった。これから、正樹とハナにどのような話をして話したらいいのかとの思ひになつたからだ。周りの風景は、もう彼の目には入っていないかつた。

拓郎はしばらく考えを巡らせていた。と、シモーネから「何でも思っていることを、口に出して言うことよ」と何度か言われたことが浮かんできた。そうだな、どのような時、いつも本音でまごころを込めて語る彼女に魅せられた自分だ。だから彼女といふと、自分が解放されたようになったのも事実だ。あの時、彼女と思つていることを何でも話し合つた

ではないか。だからこそ、お互いの信頼関係がわずかの期間だったが、生じたのだ。そのあと、彼女のもとに戻らなかった自分だったが。今、この歳で真相を語らないで、どうする。

緩やかな土道をゆっくりとした足取りで登っていた彼は、四十分ほどでシュトラウス村に着き、アルペンローゼの前に立った。

父の姿を目にした薫と正樹とハナが、ペンションの入口を開けて出てきた。

「お父さん、どうしたの？ 二時ごろに着くと言ったから、その時間に待っていたのに。心配したわ。歩いて来たの？」

湯気が立ち上っている父の体を見ながら、薫が訊いた。

「ああ、クーア駅からバスに乗って、途中で降りて、寄り道をしてからここまで歩いて来たのだ」

拓郎は額の汗を拭きながら答えた。正樹が父の旅行かばんを持ちながら、

「父さん、どこに寄ったのですか」

と訊くと、父はそれにはすぐに返事をしなかった。が、少しすると、声を落として、

「ハナの母が亡くなったところに行ったのだ」

と、答えた。それを聴いたハナが驚いた声を出した。

「えっ、タカモリさんが母の十字架の前に立ったのですか」

「ああ、寄りたくなかったからな」

ハナの顔を見ずに言った。

「父さん、また何で？」

正樹も目を白黒させた。

「それは」

そう声を出してから、拓郎は半袖シャツの前ボタン二つを外して黙った。それを見たハナが三人に言った。

「バルコニーで、皆で冷えたビールを飲みましょう」

「それはいいわね」

薫がひと際弾んだ声を出した。正樹は父の旅行かばんを持って、父が寝る部屋へ向かった。拓郎と薫はバルコニーへ。ハナは飲み物を取りに調理室に行った。

四人が揃ったところで、乾杯となった。拓郎はビールを飲みながら、この三週間にシュトラウス村で何が起こったかに耳を傾けていた。

ハナが腕時計をのぞいた。

「あら、もう四時過ぎね。アロサまで肉を買いに行かねばならないわ」

彼女は立ち上がった。と、薫が声を上げた。

「ハナさん、わたしも行ってもいいかしら」

「ええ、もちろんよ。一緒に買い出しに行きましょう」

ハナと薫はバルコニーから出て行った。

その二人の姿を見ながら、正樹が父に言った。

「ハナと薫の仲は、とてもいいのです」

「ああ、そうか」

拓郎は今、話す時がきたと思ひ、椅子の背にもたれ掛かっていた姿勢から背筋を伸ばし

た。

「あのな、正樹」

「神妙な声で息子に言った。

「父さん、何です？　こちらに急に来たり、ハナの母が死んだところに訪れたり、父さん何か変ですよ」

「おまえに、そう映るか」

「僕だけでなく、薫もそう感じていると思いますよ」

「拓郎はしばらくの間黙り続けたのち、話し出した。

「ハナに、金が送られてきただろう」

「えっ！　父さん、何でそんなこと知っているのです？」

「正樹は驚いた声を上げた。

「薫から、電話で聴いたのだ。おまえたち二人が、このペンションの経営が厳しくなって銀行に行ったことなどを」

「たしかに、このままではこのアルペンローゼは存続できません。それと、父さんとは何の関係もないでしょう」

「いや、あの金はな」

「そう言うてから、父は息子の目を正視した。

「あれは、父さんがハナに送ったのだ」

「父さんがハナに！」

「正樹は父の目を見ながら、息を呑み込んだ。

「ああ、そうだ」

「ハナに！　どうしてです？」

「驚きのあまり、彼の体が一瞬、前に出た。

「借金とこのペンションの増築に三千万円が必要だと、薫から聞いた。そこで、父さんに行きかたはないかと考えたのだ。借金と増築に必要な額を援助しなくなったのだ」

「今どき、息子の嫁の仕事に、そんな大金を出す義親などいませんよ」

「かもしれないな」

「拓郎はそう言うてから少しの間、黙っていた。その父に、正樹は詰め寄るようにして訊いた。

「もしそうなら、なぜ、ハナに？」

「拓郎は真相を話す時が来たと思った。

「父さんはもうある事を隠し続けていくことに、疲れを感じたのだ。このままではいけないと思ったのだ」

「あること？」

「そうだ。ある事をだ」

「正樹は、父の真剣な顔を見続けた。その時、今まで穏やかな風がバルコニー上を渡っていたが、一瞬、強い風が吹き抜けた。拓郎の体がわずかに震えた。彼は、静かに語ろうと自分に言い聞かせた。

「ハナは、自分には父がいないと話していたが、父さんが彼女の父親なのだ」

「拓郎は言葉を区切るようにして、低い声で言った。

「父さん、自分が何を言っているのか、わかっているのですか。冗談はよしてください。父さんがハナの父親ですって！」

正樹の声のトーンが一瞬、高くなった。

「冗談ではないのだ。プフォルツハイムで、ハナの写真を見たとき、昔、付き合っていたシモーネという女性に、よく似ているなど思っただけだったが、この地に来て、ハナの母の墓に行った際に彼女だったのを知ったのだ」

「たしかに、ハナの顔は東洋的な輪郭をしているところもありますが、そんなことはありませんよ。ハナは、あのお金は口には出して言いませんでしたが、ドイツに住む父親からだと思っているところがありました。父親が日本人だとは、僕もハナも思ったことはありませんよ」

拓郎は、息子の語ることを黙って聴いていた。

「父さん、何か証拠でもあるのですか」

訝しそうな顔をして訊いた。

「ハナの母の墓に行ったとき、シモーネ・マイヤーとの名が墓石に刻まれてあったな。彼女の名前なのだ。それと、ハナが形見にしているペンダントがあっただろう。あれは、父さんが彼女にプレゼントしたものののだ」

「そんなの、偶然ですよ」

呆れた顔で言った。

「あのペンダントの裏に、『T・Fから』と刻まれているはずだ。あとで、おまえの目で確かめるといい。それと、シモーネが当時住んでいたプフォルツハイムに、彼女の友人であるモニカが今もそこに住んでいる。前回ここを発って、フランクフルト空港へ行く途中、彼女と会って、シモーネが当時身ごもっていたことを知ったのだ」

正樹の顔が次第に青ざめた。

「まさか」

彼はそう声を発してから、「そういえば、ハナの右の耳たぶに、薰と同じホクロが二つある。父さんにもある。僕にはないが」と呟いた。二人の間に沈黙が流れた。

しばらくすると、正樹が頭を振って、父からの視線を逸らしながら言った。

「僕とハナは、生まれた年月が同じですよ。そんなことがあるわけじゃないでしょう」

「それには、訳がある」

そう言うてから、拓郎は次に出す言葉を探しあぐねていたが、その言葉がなかなか口から出てこないでいた。

「もしそうなら、僕とハナは血の繋がった仲ではないですか。そんなバカな！」

正樹は父を見ないでそう言い、口を嚙んだ。少しすると、正樹が今度は父の目を見ながら、唇を震わせて高い声を出した。

「そうなら、なぜ、今までそのことを黙っていたのですか」

そう言うてから、彼は急に椅子から立ち上り、バルコニーから出て行くとした。

「正樹、ちようと待て！ まだ話すことがある」

父は息子のうしろ姿を見ながら声高に言ったが、正樹は振り返りもせず、バルコニーから姿を消した。

部屋に戻った正樹は、洋服箆笥の引き出しから装身具などが納まっている箱を取り出し

て、ペンダントを手に持ち、裏に刻まれている文字に目を注いだ。確かにT・Fと刻まれている。呆然となった彼は、その場に立ち尽くし続けた。五分ほどしてから、彼はテーブルの上にメモした紙を置いて部屋を出て、アルペンローゼをあとにした。

アロサへ行ったハナと薫が戻って来たのは、正樹がアルペンローゼを出てから三十分後だった。薫はバルコニーに行き、目を下に向けて腕を組んでいる父に声をかけた。

「お兄さんは？」

父は娘の声が耳に入っていないかのように、何の返事もしなかった。

「お兄さんは？」

薫が再び訊いた。父は黙り続けていた。

「どうしたの？ お兄さんと話をしていたのですよ？」

ちようどその時、ハナがバルコニーに来た。

「ここにも、マサはいないわね。どこにいるのかしら？」

今まで口を閉じていた拓郎が、二人の顔を交互に見た。

「おまえたち二人がアロサに行つてから、正樹とここで話をしていた。その話がまだ終わらないうちに、正樹は急に立ち上がつて、自分の部屋へ向かった。そのあとのことは、わからない」

「そうですか」

ハナはそう声を出してから、小首を傾げながらバルコニーから出て行つた。

「お父さん、お兄さんと何の話をしたの？」

薫はテーブルを挟んで父の前に座つた。

「それは」

「シリアスな話？」

「ああ、そうだ」

拓郎は再び黙つた。薫はいつもと違う父の深刻そうな顔を見続けた。そこにハナが一枚の紙切れを持って、再びバルコニーに現われた。

「マサは、山小屋へ行つたようだよ」

「山小屋に！」

薫が、突拍子もない声を上げた。

「ええ、ここから歩いて二時間ほどした山小屋へ」

「何で？」

「わたしにも、わからないわ」

肩をすぼめながら応えた。

「これから、夕食の準備で忙しくなるのに。お兄さん、どうしたのかしら？」

「マサはその山小屋が好きで、何か考えごとがあると、そこへよく行つていたわ」

「でも、今でなくてもいいのに！」

薫は不可解そうな顔を浮かべた。

「ステラに、また来てもらいましょう。さあ、夕食の支度に取りかかるわ。カオルも手伝つて」

「はい」

二人がバルコニーを出て行きかけた時、薫が父の方に振り返って睨んだ。

「お兄さんに、何の話をしたの？ いやだわ」
そう声を上げてから、薫は調理室へ向かった。

拓郎は泊り客に混じって夕食を摂ったあと、自分の部屋に戻り、一時間してから部屋を出て、村の墓地に行った。

シモーネ・マイヤーと刻まれた墓石前に立った彼は、白い小さな教会堂の鐘が九つを打っているのを耳にしながら、シモーネの文字を目でなでるように見続けていた。

ハナと薫は、客のいなくなった食堂で夕食を摂りはじめた。それも終わり、二人でコーヒーを飲んでいるところに、拓郎が現われた。

「タカモリさん、今私たちは夕食を終えたところです。ここにきて座ってください」
彼女の前に腰を下ろした拓郎に、ハナが、

「村のなかを、散歩でもしていたのですか」と、訊いた。

「ああ、ここは静かだな。村人の姿をほとんど見かけなかった」
窓に映る夕闇の景色を見ながら、拓郎は答えた。

「陽が山の端に隠れるこの時間帯は、皆野良仕事を終えて夕食を摂り、それぞれの家のバルコニーで、夕涼みをしながらのんびりと過ごしているところなのです」

「どの窓辺にも、赤と黄色の花に夕陽が射してきれいだった」
それを耳にした薫は、父が花に関心を寄せるなんて、初めてだわと思った。

「ええ、花は私たちの友だちですから」
そう言うてから、ハナが拓郎に訊いた。

「何か、飲みますか。またビールにしますか」
「いや、ビールよりも、冷たいジュースを飲みたい」

それを聴いた薫は腰を浮かせ、調理室へ向かった。拓郎は一つ咳払いをしてから、前に座っているハナの目を正視した。

「正樹にも話したのだが、ハナにも、どうしても言わねばならぬことがある」
ハナは正樹と父との会話で何かがあったのだと感じ取っていたので、拓郎の目をしっかりと捉えていた。

「ハナに送られた金、あれは日本の銀行からドイツにいる知人の弁護士を通して、ハナに渡すようにしてもらったのだ」

ハナは、拓郎が話したことが一瞬、理解できずにいた。そのあと、彼女は息を呑み、少し顎を引いた。と、その時、薫が氷の入ったリングジュースを持ってきて、父の前に置いた。ハナと父は黙っていた。今までとは違った空気が二人の間に流れているのを感じ取った薫が、

「一体、どうしたの？」
と訊いたが、二人ともそれには答えずになお黙り続けていた。
拓郎が口を開いた。

「ハナに贈与された金のことを話していたのだ。あれは、父さんが送ったのだ」
薫が目丸くした。

「お父さんが！ また何で！ あれは、ハナさんのドイツ人である父親からだと思っ
たわ」

彼女はあまりの驚きのために、今まで思っていたことが、パツと口から出たことに後悔を感じ、「いけない」と自分の口に手をもっていった。

「そうなのだ。あの金は、ハナの父親からなのだ」

「お父さん、何を言っているのかわかっているの？ お父さんはドイツ人ではなく、日本人よ」

声を一オクターブ高くして言った。その娘に、父が、

「ハナの父は、自分なのだ」

と声を少し落として言い、さらに続けた。

「そのことを聴いた正樹は、席を立てってしまったのだ。彼ともっと話をしなければならなかったことがあったのに、それに耳を傾けようともせず外に出て行ってしまったのだ」

そう声を出してから、拓郎はハナの目を見ながら、

「これから話すことも事実なのだ」

と、言った。三人の間に、沈黙が流れ出した。

父が話をはじめようとしたのを感じた薫は、椅子から立ち上がった。

「わたしは、今日干したシーツのアイロンかけをします」

自分がこの場にはいないほうがいと察したのだった。

広い食堂内は、ハナと拓郎の二人だけとなった。拓郎は前に置いてあるリンゴジュースを一口飲んでから、語り出した。

一時間のアイロンかけを終えた薫が食堂に行くと、父とハナはテーブルを挟んでまだ話し合っていた。その二人の間に、異様な雰囲気漂っているのを見てとった薫は、彼らのところには行かずに、自分の部屋に戻った。

第十一章 山湖に映る二人

拓郎の話に耳を澄まして聴いていたハナは、あまりに衝撃的な内容に心が動転して、途中から前で語っている彼の顔を見ずに、ずっと目をテーブルに落とし続けていた。

話が終わると、彼女は拓郎に何も言わずに目を瞑りながら椅子から立ち上がり、自分の部屋へ戻り、ソファアに腰かけて、何度も「そんなことがあったなんて！」と呟き続けた。

今まで父親のことを思うと、自分の存在が不安定になるので止めにしてしたが、今それがわかり、考えてもいいのだと思っただ。自分がどこからきたのかを知ったハナは、これだけは聞き出そうとした。自分のため、そして何よりも母のために、拓郎に問わなければならないと思っただ。

彼女は正樹と話をしたかったが、携帯電話を調理場の料理台に置いていった正樹だったので、彼に連絡することができないでいた。ひとりソファアに座り、拓郎が語った「自分が父親だ」の言葉を想い起こしていた。真夜中の一時にベッドに入った彼女だったが、眠ることができず、そのまま夜明けの五時まで、まんじりもしないで朝を迎えた。

ニワトリの鳴き声を耳にしながらハナはベッドから身を起こし、服に着替えて調理室に

行き、ペンションの泊り客の朝食の仕度に取りかかった。と、お手伝いのステラが、「おはよう」と声を出しながら入ってきた。

二人はテーブルの上にお皿などを並べはじめた。それが済むと、ハナはバルコニーの前面に広がる草地に咲いている花を採りに出かけた。

拓郎は、五十メートル先のお花畑で腰を屈めているハナの姿を部屋の窓から見ていた。少しすると、彼の口から「済まない」の言葉が洩れた。

ハナは、露で濡れた赤や紫や黄色の花々を一つの束にしてから、母が眠る墓石前に行き、それを花立てに入れ、昨夜拓郎から聴いた話についての自分の思いを母に語り出した。

ペンションの客たちが起き出す時刻となった。ハナは、アルペンローゼに戻り、調理場にいたステラに、

「朝食とそのあとの片付け、よろしくたのむわ。わたしはこれから、マサがいる山小屋へ行ってくるわ」

と言うと、毎朝焼きたてのパンを持ってくる五十五歳のステラは、きよとんとした顔を浮かべ、

「山小屋へ？」
と、訊いた。

「ええ、昼食前までには戻れないわ。調理のほう、よろしくたのむわね。カオルが手伝いをすると思うわ」

「わかったわ」
「何かあったら、わたしの携帯電話に連絡して。夕食前には帰ってくるわ。カオルが起き出してきたら、山小屋へ行ったと伝えてほしいわ。それと、タカモリさんにも」

ハナはステラにそう言うってから、調理室から出た。

部屋に戻った彼女は、小さなリュックサックにワインドブレーカーとシャツとセーター、それに正樹が被っていた帽子を入れて、アルペンローゼをあとにした。

彼女が歩いて行くにしたがい、今まで薄く漂っていた霧が次第に散っていく、青空が広がりはじめた。と同時に、緑の草原に咲いていた紫色のエンチアンや白色のアネモス、それに黄色のヒポーケリスや時々見られる濃い青色をしたトリカブトなどの花々が、太陽の光に顔を向け出した。

ハナは、緩やかな山道をひたすら登り続けた。マサが最後までカオルの父の話の聴いていたら、こんなことにはならなかっただろうにと思った。でも、彼の気持ちはわかるわ。早く正樹に真相を伝えねば。そう自分に言い聞かせながら、彼女は歩を速めていた。

一時間ほど登ったところで、太陽の光が強くなり出した。それにつれて、彼女の額から汗が滲み出てくるようになった。

しばらくすると、山小屋の屋根の上に赤に白い十字のスイス国旗を目にした彼女は、山靴を蹴るようにしてそこへ向かった。

小屋に近づくにつれて、彼女は何人かの登山者たちとすれ違うようになった。岩壁を背後にして建っている山小屋の前に立ったハナは、厚い木で作られた戸を開けた。と、腹の出た小屋主人が、彼女の目の前に現われた。

「今日の早朝、電話がかかってきて、こちらにすぐ来ると言うではないか。一体、どうしたのだ？」

白い髭をなでながら、小屋主人がハナに訊いた。

「ええ、それが」

ハナはいつもとは違う、はっきりしない声を出してから、周りを見回した。

「マサは、いるのでしょうか？」

「ああ、朝食を摂ってから、部屋に戻ったぞ。マサキは昨日の夕食前に来て、食事もしないで外に出て、戻ってきたのは日が暮れてからだだった。何も語らず、いつもの彼ではなかったぞ。二人に、何かあったのか。喧嘩でもしたか」

「ケンカではないわ」

「そうならいいが」

小屋主人は、心配そうな顔付きでハナを見た。

「彼は、今どの部屋にいるの？」

「ナルシスの室だ」

それを聞いたハナは、小屋主人に何も言わずに、彼のいるところへ向った。

正樹は二段ベッドの上段で両手を頭の下にして、仰向けになっていた。戸の軋る音がしたので、彼はそちらに顔を向けた。薄暗いが、ハナだとわかった。ベッドに寄ってくる彼女の姿を、正樹は半開きの目で虚ろげに見た。

「マサ」

ハナはベッドの前でそう呼びかけてから、彼の頬を撫でた。正樹は目を瞑った。

「わたしも、タカモリさんが語った内容を聞いて驚いたわ。それに、あなたが耳を傾けようとしなかった話を聞いて、さらに驚いたわ」

そう言うてから、彼女は辺りを見回した。

「ここでは、話せないわ。外に出ましょう」

正樹は、なおも目を閉じたまま黙っていた。

しばらくすると、彼はベッドから半身起こし、下に降りた。その彼を、ハナは抱いたが、正樹は両手をだらりと下にして抱き返さないでいた。二人はそのままの姿勢で、一分間ほど何も言わずに立ったままでいた。

小屋から出たあと、ハナが正樹に言った。

「どこで、話をしましょうか」

彼は黙り続けていた。

「そうね。あそこへ行きましょう」

ハナは自分に話しかけるような口調で言い、彼と歩き出した。

正樹は自分の腕に手を絡ませ、体を寄せてくるハナの気持ちが変わらなかった。それも、微笑んでいるような明るい顔をしているハナを理解できないでいた。

二人は草原の平坦な登山道を、何も語らずに歩き続けた。正樹はハナの歩き方がいつもよりも弾んでいるのを肌で感じ、彼女は一体、何を思っているのだとさらに疑心暗鬼に陥っていた。これが血の繋がったきょうだいの姿かと、怒りに似たものを覚え出した。

数分すると、人の足跡のない草地に踏みはじめた。と、小さな湖が前に現われ出た。正樹のお気に入りのところだった。少し盛り上がった草地に、二人は腰かけた。

陽光が湖面を燦々と照らし、それに眩しさを感じたハナは、リュックから正樹の登山帽を取り出して彼に手渡したが、正樹はそれを被ろうとはしなかった。ハナは正樹の生気の

ない横顔を見ながら話し出した。

「昨夜、話を全部聞いたわ」

正樹は、湖を囲うようにして連なっている二千五百メートルの峰々を見るではなしに目をやって黙っていた。

「わたし、あのお金の出どころを知って耳を疑ったわ」

それを聴いた正樹が、初めて口を開いた。

「父さんが出したのだ。それもきみに、娘のきみに！」

強い口調で、ハナの顔を見ずに言った。

「びっくりしたわ。考えてもいなかったことだし、まさかと思って聞いていたわ。でも、すべてが真実だとわかったわ」

彼のやり切れなさそうな横顔を見ながら言った。

「マサ、わたしの顔を見て！ あなたは、最後まで話を聞かなかったそうね」

山の頂に目をやっていた彼の視線が、湖面に移った。

「何の？ 僕ときみはきょうだいなのだぞ。それを知っただけで、僕の心は塞がれたようになった」

「そうではないのよ！」

ハナの声が一オクターブ高くなった。正樹は、その時、初めて彼女のほうに顔を向けた。

「そうではない！」

ハナと同じ高いトーンを上げた。

「ええ、わたしとあなたはきょうだいだけれども、血は繋がっていないのよ」

それを聴いた正樹は、さらに荒々しい声を上げた。

「何を言っているのだ！」

怒りが爆発した顔である。

「これから話すことを、よく聞いて！」

ハナは正樹の目を正視した。

「あなたは、タカモリさんの実の子ではないのよ」

語句を一つひとつ区切って言った。正樹の目が丸くなった。

「僕が父さんの実の子ではない？」

「ええ、そうよ。タカモリさんは、お母さんを含めて高校時代から付き合っていた仲のよい五人がいて、そのなかの一人が、あなたの実の父だったのよ。その仲間たちは高校卒業したあとも、しばしば会っていたそうよ」

ハナはそこまで語って、一息ついた。

風が吹き出し、湖の水辺のところどころに咲いていた黄色い小さな花が揺れ出した。と同時に、灰色の雲が青空に張り出し、遠くに聳え立っていた二八三四メートルのヴィスフルーの頂上が黒い雲で覆われはじめた。

ハナが再び話し出した。

「タカモリさんは、プフォルツハイムでわたしの母と一緒に過ごしていたとき、日本から一通の手紙をもらい、そこには、父が危篤と書かれてあったのね。それと、あなたのお母さんの仲間だった一人が、山で二週間前に遭難死したとも記されていたそうよ。その人が、あなたの実の父だったのよ」

正樹は固唾を飲んで聴いていた。

「タカモリさんは、すぐに日本に戻ったが、彼の父の最期には間に合わなかったのよ。そして、五日後あなたのお母さんのお父さんが亡くなり、タカモリさんは葬式のお母さんとお母さんと会ったのね。そのとき、あなたのお母さんは、山で遭難した人との間に身ごもっていることを、タカモリさんだけに打ち明けたのよ。そして、二人で話し合った末、結婚することにしたのね」

父がそんなことまで語ったとは信じられない目つきで聴いていた。

「タカモリさんが日本に帰ったときは、わたしが母のお腹にいたことを知らなかったよね。そのあとも、彼はずっと知らないでいたらしいわ」

あまりにショッキンな話の内容に、正樹は体を二、三回震わせて息を呑み込んだ。ハナはさらに続けた。

「あなたのお母さんとあなたの実の父は、ヨーロッパアルプスの山旅に出かけ、一緒に過ごしていたのよ。そのとき、タカモリさんはわたしの母と一緒に、黒い森でテントを張って過ごしていたのね」

それを聴いた正樹はいくらか平静心となって、ハナに言った。

「そうか。それで、僕ときみは同じ年月に生まれたのか」

彼はハナの語ることを聴き終え、これは事実だと思った。と同時に、今まで塞がっていた彼の心の中に、光が射し込みはじめてきたのを感じ出した。彼はしばらくの間黙ってから、ハナの目を見つめながら声を上げた。

「それでは、僕はきみと結婚ができるのか」

「もちろんよ」

そう言っ、ハナは隣に座っていた正樹の上半身を抱こうとした。それに応じて、彼は上半身をハナに向けた。二人は強く抱き合った。そして、今度は肩を寄りそって、前に映る湖面を言葉交わさずに見続けていた。

風はさらに強くなり、波が水面に立ち出した。それを見つめながら、ハナが静かな口調で言った。

「マサのお母さんのこと、話してくれる？」

「母のことを？」

「ええ、そうよ」

何でこの時に、母のことをハナは聴きたいのだろうと思った。それを察した彼女が言い出した。

「タカモリさんが話をしてくれたわ。結婚したとき、なぜ、お母さんの姓にしたかを」
彼女は続けた。

「タカモリ時計店は、かなり大きかったのね。あなたのお母さんの父が亡くなったので、タカモリさんはお母さんと結婚すれば、そこを継ぐと思ったのね」

「そんなことまでも、父さんがきみに話したのか」

「ええ、辛そうな顔をして、顔を下に向けながら語ったわ」

「父さんが」

正樹は信じられない気持ちとなった。二人は何も語らず、しばらく湖のほうに視線を向け続けていた。

正樹が話し出した。

「母は、代々受け継がれてきた時計店の一人娘だった。父さんは母と結婚してから、父さんの願いで時計以外にも貴金属を営むことをはじめた。そして、店を拡張していった。母は、仕事を丁寧にしていた。また、子供の教育にも熱心だった。僕と薫は、母に育てられたようなものだった。とくに、母は僕たちが自分の考えをしつかりと持った優しい人になることを望んでいた」

「そうだったの」

そう言うってから、ハナが正樹に訊いた。

「お母さんは、お父さんと仲がよかったのでしょうか？」

「父さんは仕事熱心だった。仕事の面では二人に会話が合ったのかも知れないが、家庭のなかでは、そうではなかった」

「二人で、どこかに行ったりすることはなかったの？」

「そんな時間はなかった。父さんが仕事場から戻ってくるのは、毎晩九時過ぎだったし、日曜日もなかったから」

「そうだったの。だから、タカモリさんが言っていたわ。『妻が二人の子供を育てた』と」

正樹は肯いた。

「こうも話したわ。『妻は、心根の優しい女だった』と」

「父さんが、そう言ったのか」

そう声を出してから、彼はしばらく黙った。

正樹が話し出した。

「僕は、父さんのような生き方はしないと心に誓った。母と父さんの仲は、僕には理解できなかつた。愛とは何かを考えさせられた。僕は、家庭のなかで、責任を持って夫婦の絆を深めていこうとしない父さんが嫌いだった。たしかに父さんは仕事では成功したが、家庭ではそうではなかった」

そう言うてから、正樹は波が立ち出した湖面を見つめ続けた。

少しすると、彼が再び話し出した。

「父さんはお金に価値を見出して、それに自分の生を見出していたかのようにだった。僕は、あのようにはなりたくない」

きっぱりとした口調で、正樹は言い、ハナに顔を向けた。

「君との愛を僕は深めたい」

それに応えて、ハナも声を上げた。

「わたしもよ」

二人はしばらく黙ったままでいた。

少しすると、正樹がハナに言った。

「たしかに、父さんはエゴが強い人だが、僕をここまで育ててくれた親でもあるのだ。それに、今の今、父さんが君に真摯に過去のことを話したことを知り、先ほどまで抱いていた怒りにも似た気持がいくらか和らいだようになったよ」

そこまで言うてから、今度は穏やかな口調となった。

「僕のことよりも、今の君の心境が気になるよ。父さんと君との今後の関係も」

「わたしにはマサがいるし、二人で力を合わせていけば、何とかなるわ。タカモリさんと

の関係は」

ハナはその先に言う言葉を口に出さなかった。彼女の心の内は、母がすっかり生きていくのに責任をもたなかった拓郎を、受け入れてはいなかったからだった。

前の峰々を隠し切っていた雨雲が次第に二人の方に近寄りはじめ、その雲がますます低く垂れ、頭上の青い空が消え、薄暗くなり出した。

ハナが言った。

「タカモリさんが、私たちに真相を明かしてくれたことは、私たちにとっても、彼にとっても、よかったように思うわ」

二人は再び水面に目を落とし続けた。

少しすると、正樹が山の静寂を破るかのように行った。

「大自然はすべてが真実との関係で保たれているが、人間は違う」

「そうね。でも、私たちはこの自然のなかで暮らしていくので、あるがままの姿で、お互いを思いやりながら、それを心がけて共に暮らしていきましょうよ」

ハナはそう声を出し、正樹を見た。彼は背いてハナの肩を抱いた。

しばらくすると、湖面に打つ雨の音が響き出した。と、ハナの携帯電話が鳴り出した。

「えッ、歩けないでいる！ 今、マサと代わるわ」

正樹は携帯電話を耳にしつかりと当て、薫の話すことを聴いてからスイッチを切った。

「今、父さんが動けないでいる。朝食を摂ってから、アルペンローゼの花を採りにひとりで行ったらしい。それも、帽子を被らずにシャツ姿で」

「アルペンローゼが咲いているところへ？」

驚いた顔で、ハナは言った。正樹は肯いた。

「父さんが四週間前にシュトラウスに来たとき、僕と薫とで登ったところだ。あの辺りは、登山者が滅多に足を踏み入れないところだ」

「一人で行くなんて！」

「さいわいなことに、父さんは僕の携帯電話を持って出かけたので、ペンションにいる薫に、連絡することができたけれど」

それを聴いたハナが声を上げた。

「では、タカモリさんに今、電話を入れたら？」

「そうするよ」

ハナの携帯電話から父を呼び出した。

「正樹か、斜面に足を滑らして、立つことができないでいる」

「父さん、今、そちらへハナと一緒にいきます。一時間もかからないでしょう」

二人は立ち上がり、駆け出した。と、雨足が急に強くなりはじめた。

第十二章 背中のお話

拓郎がペンションを出た時は、雲一つない青空だったが、今はドシャ降りの雨の中。山

の天候が急激に変化することを知らなかった彼は、立ち上がることもできずに、濡れた草地に座っているしかなかった。シャツとズボンが早くも濡れとなった。右足首を捻挫でもしたのか、動かすと痛みが走り、立てないでいた。降り注ぐ大粒の雨に打たれながら、正樹とハナが来るのを待ち続けていた。

携帯電話で正樹と話をしてから、四十分が過ぎていた。体の至るところから、雨水が滴り落ち出した。夏とはいえ、標高二千メートルなので、雨に晒されていると、身体が冷える一方だった。体が小刻みに震え出した。

携帯電話が再び鳴った。正樹からだった。アルペンローゼの群生近くに来たが、正確な居場所を知らせてほしいとの連絡だった。

拓郎は自分のいるところの景色を細かに伝えた。と、正樹が声を上げた。

「そこは、一般の山道から外れたところではないですか」

「ペンションへの近道になるだろうと思う、下ったのだが、急な斜面に足を取られてしまったのだ」

父は震える手で携帯電話を持ちながら低い声で言った。

「あと四、五分で、そこに着きますので」

早口でそう声を出してから、正樹はスイッチを切った。

拓郎は数メートル先の霞んだところに目を落としながら思った。昨晚ハナに語ったことは、正樹にすべて伝わっているだろう。彼の反応はどのようなものだっただろう。二人とも、寝耳に水だったに違いない。その二人が、今ここに来るのだ。拓郎は大きな溜め息を洩らした。

しばらくすると、「父さん、父さん」の大きな声が拓郎の耳に入った。彼はさらに体を震わせながら、かけ声のする方に向かって、「ここだ、ここだ」と声を上げた。強い雨音で、その声はかき消されそうになったが、正樹とハナの耳には届いた。

激しく降り注ぐ雨に呼応するかのように、二人は拓郎のところに勢いよく駆け寄った。

その姿を見た拓郎は、体を小刻みに震わせながら声を上げた。

「正樹、ハナ！」

ハナはすぐにリュックから、厚手のシャツとウインドブレーカーを取り出した。

「どうぞ、これを」

「父さん、それを身に着けたほうがいいですよ。さらに雨に打たれて肺炎にでもなったら、大変ですから」

正樹はハナが持ってきた傘を差し、父が服を取り替えるのを手伝いはじめた。ハナはその間、彼の右足首を触っていた。

「骨には、異常はないわ。足首の筋を傷めたので動く痛みなのだわ」

彼女は正樹にそう言って、近くにあった木片を痛みの足首に添えてタオルで縛った。拓郎のウインドブレーカーが早くも濡れ出した。正樹が、父の傍にあった真紅の花を指差した。

「父さん、ここに、アルペンローゼの花がありますが」

「それは、父さんがもぎ取ったものだ」

「この花は、採ってはいけないのに。そのことは、薫とここに来たときに、話したではないですか」

父をいさめるような声で言った。それを聴いたハナが、正樹を見ながら、「マサ」と頭を横に振って、「早くペンションに戻りましょう」と声を出した。

二人は拓郎を交替しながら担いでペンションまで運ぼうとした。まず、正樹が父を背負った。七十キロの体は重たいとは言えなかったが、二人の服が雨でびっしょり濡れているため、ずしんとした重さを感じながら歩き出した。

道のない草地を少し行くと、登山道に出た。と同時に、雲間に青空が見え出した。正樹は何も言わずに、一步一步慎重に下り道を進んだ。父が小声で、「済まない、正樹」と言うのと、彼はそれには応えずに、父を背負ったまま歩を進め続けた。

父が話し出した。

「ハナから、すべてを聞いて驚いたことだろう。母さんと結婚した動機も聞いただろう。大きな時計店のあとを継ぐ母さんと結婚すれば、生活が豊かになって、富が増えていくだろうと思っただけだ」

そこまで言うてから、拓郎は自分に言い聞かきかせるような声で話し出した。

「おまえには、いい父親ではなかった。家族四人で一度も旅行もせずに行ったから。そのような父さんだが、守り続けたことがあった」

正樹は黙って聴いていた。

「母さんと結婚しようと思ったとき、宿っている子の出生の事実を決して言わないと、母さんと固く約束したことだった。母さんと不和になったときも、これは絶対に口に出さなかった。何よりも、おまえを自分の子だと思っていたから。父さんはわがままで勝手な人間だが、おまえのことを誇りにしていた」

さらに続けた。

「芳子は、おまえたち二人をよく育ててくれた。おまえたちがスクスクと成長していったのは、すべて芳子のおかげだ。父さんは仕事だけをしていただけだったから」

正樹は耳元近くで語る父の声に、複雑な思いで耳を傾け続けた。

「父さんがおまえを誇りに思っていることは、芳子を誇りにしていたと同じなのだ」

そう言うてから、拓郎は口を噤んだ。二人の間に、沈黙の時間が流れはじめた。父の体が少しずつ落ちてきたので、正樹は立ち止まって背負い直した。と、陽光が三人を照らしはじめた。二人のうしろで歩いていたハナが、拓郎に声をかけた。

「ウインドブレーカーを脱いだほうがいいですよ」

拓郎は黙ったままだった。

「陽が照ってきたので、父さん、脱いだらどうですか。暑いでしょう」

父は肯いた。それを見たハナが、拓郎の体からウインドブレーカーを取った。と、湯気がパッと発散した。少しすると、父が正樹にまた話し出した。

「お前の出生について、母さんと約束をしたことを破ってしまった。でも、それでよかったと思っている。事実を話すことによって、そこから、まことの関係が生まれてくるのだから」

太陽の光がますます強くなり出した。それにつれて、草地から湯気が昇りはじめた。今度は、正樹が父に言った。

「父さん、ハナからすべてを聞きました。昨日、父さんから話をきいたときは、怒りに似たものを覚えたのですが、山小屋へ行き、じっと考え、ハナから話を聞き、そして、今、

父さんの胸の内を知って、その怒りが薄れていきました」

「ずり落ちてきた父を力強くまた上に押し上げた。拓郎は正樹が背中を抱いてくれたように感じ、胸が熱くなりながら身を委ねていた。ここで、拓郎はあることを言おうかどうか迷ったが、シモーネの「何でも思っていることを話すのがいちばんよ。自分に正直にね」の言葉に助けられて、再び話し出した。

「おまえの父は、父さんの高校時代からの友で、山登りが好きだった。おまえがスイスの山麓で暮らすと知ったとき、父さんは反対だったが、今はそうではない。おまえは彼の分まで、ここでハナと生活を共にしていくのがいい」

正樹は、今まで濡れていた自分の服と父の服がいくらか乾いてきたせいか、父の体重が軽くなったように感じ、耳を澄ましながら聴いていた。

拓郎は続けた。

「父さんは自分で、家族というものを創り出さなかった。しかし、おまえには、そうやってほしくない。自分の存在に意味を見つけるためにも、そうやってほしくない。こんな父だが、そう願う」

そう話をしてから、さらに、

「芳子には、苦勞をかけた」

と、言った。その言葉を耳にした正樹は、父の耳にわずかに届くくらいの声を出した。

「お母さんが生きていたときに、その言葉を言えばよかったのに」

そのあと彼は、先ほどハナが言った「あるがままに生きていきましょよ」の言葉が浮かんだ。お互い支えあいながら暮らしていくことが大切なのだと思った。

正樹は自分に言い聞かせるように言った。

「僕は自分なりに、ここでハナと共に生きていきます」

それを聴いた父は、息子の決意を思い、それに尻込みした時は、ニセの生きかたになるのだと自分を省みながら思った。

三十分ほど背負っていたので、正樹の腕に痺れが出はじめた。そこで、ハナと交替することになった。彼女は今まで右手に持っていたバラの花を正樹に手渡し、拓郎を担いだ。背中にとった拓郎に、ハナが訊いた。

「足首は、痛くありませんか」

「足を動かさないと、まったく痛みを感じない」

「そうですか」

ハナはそう言うてから歩き出した。二人はしばらくの間、黙っていた。正樹と同じぐらいの肩幅の彼女は、拓郎のだらりと下げた両足をしっかりと両手で背に引き寄せていた。そのせいで、拓郎の体は動かさずに安定していた。

ハナが話しかけた。

「アルペンローゼが咲いているところに行つたそうですが、なぜ、行つたのですか」

「シモーネの好きだった花をもう一度見たくなり、それを採って彼女の墓に添えようとしたのだ。快晴だったし、正樹と薫と一度歩いたところだったので、心配はないと思つただが……」

ハナは静かに聴いていた。再び、沈黙が流れた。

少しすると、彼女が再び話しかけた。

「あなたが母にプレゼントとしたペンダントに、エーデルワイスの絵が描かれていますが、あれは誰が作ったのですか」

「シモーネと自分が一緒に描き、貴金属を扱っている知人の工房にそれを持って行き、焼いて作ってもらったのだ。彼女はブルーメン（花）が好きだった」

「そうでしたか。わたしの名前ハナは、旧約聖書に出てくるハンナという人物の名前を短くしたものと祖母から聞きました。それが、なぜンを抜いてハナとなったかは疑問でした。でも、ブルーメンは日本語ではハナと言うのですね。母は、わたしに日本語名を付けたかったのでしょうかね」

それを聞いた拓郎は、当時シモーネにブルーメンのことを日本語で花（ハナ）と言った時、彼女はいい響きだわと言ったのを思い出した。それほどまでに、シモーネはこの自分を…。

拓郎の上半身がずり落ちてきたので、ハナは立ち止まり、彼の体を押し上げた。陽はさらに強くなり、拓郎の濡れていた衣類が次第に乾きはじめた。道端に咲く花は太陽に顔を向け、その上を蝶が舞い踊るようになった。

今までとは違い、打って変わるような澄み切ったようになった青空の下、歩きながらハナが拓郎に話し出した。

「母は、わたしが四歳のときに亡くなってしまったので、母の記憶はわたしにはまったくありません。それ以来、祖母に育てられていました。そのことは、前に話しましたね」

それを聞いた拓郎は、あのペンションで両親がいない中で育てられ、男の仕事もしなければならなかったハナのことを思った。と、彼の胸は塞がっていくようになって、目を閉じ続けていた。少しすると、彼女が静かな声で言った。

「あなたは、母を愛していたのですよね」

予期もしなかったハナの言葉に、拓郎は一瞬、戸惑いを覚え、すぐに返事をする事ができないでいた。一息入れてから答えた。

「当時、彼女といるとたのしかった。毎日が満たされた日々だった」

そう言うってから、黙った。

ハナが、もう一度静かな声で訊いた。

「愛していたのですよね？」

拓郎は黙り続けていた。確かに、シモーネが好きだった。しかし、相手の心を本当に思いやろうとする愛があったかとなると、肯けない自分でもあったからだだった。

ハナは返事をしない拓郎を背負いつつ、立ち止まったまま、しばらくの間、雪がまだ残っている山の頂に、母への切ない思いを浮かべつつ、悲しみに満ちた目を向け続けていた。

彼女は自分が一番知りたかった問いに、拓郎が黙り続けているのを知って、自分の存在が揺らぎそうになった。と同時に、母の愛した人が無言で答えないでいるのを、母が知ったら、さぞ嘆き悲しむことだろうと思った。

彼女は思った。今背負っている人は一人の怪我をした男の人なのだわ。わたしはこの山の麓で暮らす人間として、この人を背負っているだけなのよ。そう自分に言い聞かせた。

拓郎はシモーネと体形が似ているハナの背の上で、シモーネへの愛が欠けていた自分を見つめていた。責任感の欠けた自分を見つめていた。彼女の問いに答えられない自分を見つめていた。

ハナは再び歩き出した。長い沈黙が続いた。二人の斜め横に歩いていた正樹には、二人の会話は耳に入っていた。

しばらくすると、正樹が、

「シュトラウス村が見えてきた。あと、すこしだ」

と声を出してから、ハナに訊いた。

「代わろうか。疲れただろう」

「まだ、平気よ。年に数回は、怪我をした登山者やスキー客を背負っているし」

「でも、バトンタッチだ」

彼はアルペンローゼの花をハナに再び手渡し、父を背負った。彼女は花を見つめながら、
「花びらが雨で濡れて、萎んでしまったわ」

と、呟いた。それを聴いた正樹が、

「乾けば、また鮮やかな赤に輝き出すよ。それをお墓に持って行ったら」

とすすめたが、ハナはそれにはすぐに応えなかった。が、少しすると、「そうね」と小さい声を出した。それを耳にした拓郎は、心の中で「済まない」と呟いた。

村に入ると、三人は羊の群れと出遭った。古い木造の家々の窓辺と庭の花々は、水を十分に吸って光り輝いていた。ハナは一人と別れ、アルペンローゼを持って墓地へ向かった。その足取りは、いつものように弾んではいなかった。

父を背負っていた正樹がペンションの入口前に立つと、レストランの昼食の後片付けを終えた薫が駆け寄ってきた。

「お父さん、無事に帰ってきてよかった」

薫は父の姿を見ながらそう言い、兄に訊いた。

「お兄さん、大変だったでしょう。ずっと、背負ってきたの？」

「いや、ハナと交代で背負ってきた。雨が止んでくれて助かったよ」

「あら、ハナさんは？」

「彼女は、父さんがもぎ採ったアルペンローゼの花を、お母さんが眠っているところに持って行ったよ。すぐに、戻ってくるだろう」

薫は兄の背中についての父に、叱るような声を上げた。

「お父さん！」

それを聴いた兄が、妹に言った。

「とにかく、無事でよかった。骨折でもしていたら、救助隊を呼ばねばならなかったから。さあ、なかに入ろう」

父は何も言わずに、二人の会話を聴いていた。

食堂内に入ると、ステラが調理室から出てきた。

「お医者さんに連絡しておきましたよ。間もなくしたら、来るでしょう」

そう言うことから、彼女は椅子に座って足を伸ばしている拓郎の足に目を落とした。この村で、生まれ育った彼女は、すこし腫れた拓郎の足首に触れた。

「これは、筋を違えただけでしょう。お医者さんをお呼びする必要はなかったかもしれないわ」
そう言って、彼女は調理室に戻った。

薫は、兄を見た。

「お腹が減っているでしょう。何か持ってくるわ」

「そうだな。スープとパンを持ってきてくれるか。ハナの分も」
薫は肯き、そのあと兄に訊いた。

「二人とも、着替えをしなくていいの？」

「この一時間半で、シャツもズボンも乾いたよ」

それを聴いてから、彼女も調理室に戻った。

ハナが食堂に入ってきたと同時に、ステラと薫がスープとパン、それに飲み物をテーブルの上に置いた。三人はステラと薫に、「ありがとう」を言ってから食べはじめた。

無言で顔を見交わすこともなく、三人は食べ続けていた。そこには、昨日と違う空気が流れていた。それを感じ取った薫は、一体、三人に何があったのだろう、どんな会話がなされたのだろうと思った。特に、兄が時々ハナのほうに気遣うような目つきを向けていたのが、不思議でならなかった。

三人が食事を終えた時、医者が食堂に入ってきた。

「ハナ、どうした？ 怪我人をまた背負ってきたとの連絡が入ったが」

「ええ、わたしの恋人の父親が、二千メートルの急斜面で足を滑らして、足首を打ったのです。診てください」

ドクターは、拓郎の足をさまざまな角度で触診した。

「大した怪我ではない。骨に異常はない。今日と明日は痛みがあるが、明後日からは杖なしで歩けるだろう。足につける塗り薬だけでいいだろう」

それを聴いた正樹が、ドクターに訊いた。

「そうですか。父は四日後に日本へ戻ることになっているのです。大丈夫でしょうか」

「問題ない。これくらいの打ち身だけで済んで、幸運だったな。強い雨が降っていたし」

「はい、恵まれました」

ドクターは、ハナが作ったリンゴジュースを美味しそうに飲んでから、彼女に言った。

「明後日は、村祭りだ。このアルペンローゼでは、踊りと音楽が催されることになっていたな」

「ええ、バルコニーですることになっています」

ハナは床に目を向けながら低い声を出した。

「元気がない声だな。いつものハナらしくないな」

彼女はそれには応えずにいた。ドクターは再びハナを見たのち、彼女の隣にいる正樹に目を向けた。彼は痛いほどハナの今の悲しみに塞がれた心境を感じ取っていたので、ハナと同様に黙り続けていた。その二人と握手をしてから、ドクターは食堂から出て行った。正樹は疲れがどっと出てきた父を再び背負い、彼の部屋へ向った。

しばらくすると、正樹が父の室から出たきた。その兄に、妹が、

「お兄さん、どうしたの？」

と訊くと、

「薫には、今晚、今日の出来事をすべて話すよ」

と言ってから、正樹はハナがいる部屋に行った。

第十三章 ハナの沈黙

昨日の強い雨に打たれて、シュトラウス村に咲いていた花々は折れ曲がったようになっていたが、今は身丈を凜と伸ばして太陽に顔を向け、光り輝いていた。花だけではなく、村に住んでいる人たちもそうだった。至るところで、村人たちは明日の祭りの準備をしていて、村全体が活気に満ちていた。

毎年、民族舞踊の舞台となっているアルペンローゼのペンションでは、村の男たちが集まって、バルコニーを広げる作業に取りかかっていた。その中に、正樹の姿もあった。そのバルコニーから五十メートル先では、村の青年たちがスイス式レスリングをするための砂場を作っている最中だった。

その様子を見ていた薫は、明日の村祭りがどのようなものかと興味を抱きはじめていた。が、兄、父、それにハナのこと、彼女が彼女の頭から離れないために、そう弾んだ気持ちではなかった。

拓郎は、医者からもらった塗り薬のおかげで、立っていても痛みを感じなくなっていたが、用心のためにハナの祖母が使っていた杖を持ちながら家の中だけを歩いていた。

また、ハナは祭りにくる見物客の食事の準備のために、村の女たちと一緒に調理室で動き回っていた。その彼女たちの笑い声がペンション内に響き渡っていた。しかし、その笑いの中にハナの声はなかった。

その村祭りが、夜明けとともにじまった。

ニワトリの鳴き声が眠っていた村を起こし、村人たちが通りを行き交い出した。女たちは裾が長い紫色の広いスカートに白いブラウス、それにいろいろな彩りの花の模様が描かれたスカーフを首から垂らし、男たちはエーデルワイスが刺繍された吊りズボンに、明るい色のシャツと縁取りが赤い黒系のチョッキを着て、黒帽子を被っていた。皆この地方の民族衣装に身をまとい、今日は特別な日だぞといった顔で心たのしそうに通りを歩いていた。人ばかりではなく、牛たちもいつもと違う大きなカウベルを首から垂らし、角には花輪が巻かれ、よそ行きの姿だった。

朝食を済ました薫はハナと兄に、村役場前の広場で開かれるイベントを見るようにと勧められ、ひとりペンションを出た。そして、通りに建つ家々のバルコニーに咲いている赤や紫や黄色の花々を見ながら、そこへ向かった。

役場前では、整然と並んだ音楽隊がいろいろな楽器を手にして、もう演奏がはじまっていた。いくつもの旗が風に吹かれてなびき、他の村からも大勢の人たちが訪れ、薫もその中に混じって、この地方独特のリズミカルな山岳メロディーを聞いていた。が、三人のことが気になっていた彼女は、三曲聞いただけでペンションに戻った。

日本に明日戻ることになっていた拓郎は、足首に負担をかけてはいけないと思い、自分の部屋のソファアに座って、この村の祭りに関する本を読んでいた。誰かがドアを叩いた。彼は本から目を逸らさずに、「鍵はかかかっていないぞ」と声を出した。

正樹が戸を開けて入ってきて、父が座っているソファアに腰かけた。

「父さん、明日、日本へ帰りますね」

「ああ、あつという間の滞在だったが、長い日々のもあった」

「父さんが一ヶ月前にここに来て、そして再びここに訪れての間、何が自分に起こったのかをよく整理できなかった日々もありました」

「それは、父さんも同じだ」

拓郎はそう言うてから、今まで読んでいた本を閉じ、それを梨の木で作られたテーブルの上に置いた。通りでは、音楽隊が行進メロディーを奏でていた。

「外は、祭りで賑やかそうだな」

「はい、村の最大の行事なので」

正樹は続けた。

「昨日は祭りの準備に追われ、父さんと話し合う時間がありませんでした」

それを聴いた拓郎は、正樹はあのことを話そうとして、今ここに来たのだろうと思った。

しかし、あのことはもう時に任せてと思っていたので、自分からは敢えて言わないようにしていた。二人の間に沈黙が続いた。

少しすると、正樹が父の横顔を見ながら話し出した。

「父さん、ハナに送ったお金の件ですけれども、彼女はどうしても受け取らないと主張するのです。彼女に理由を訊くと、黙っているだけです」

「そうか。そうだろうな」

「とにかく、ハナはお金を受け取ることを頑なに拒みました」

そこまで言うて、正樹は窓から差し込んでくる光のほうに目を移した。その目を、今度は父のほうに向けた。

「あのお金は父さんだけではなく、お母さんの心情も入っていると思った僕は、考えたのです。ハナの銀行口座の名義に僕の名前も加えようと、そうすれば二人のお金として、僕も引き出せます。ハナは、僕の案を黙って聞いていました」

「そうか」

「だから、そうします」

「おまえたちの金なのだから、二人で自由にしたらいい」

正樹はその言葉を聴いたあと、再び話し出した。

「うれしいことがあったのです。昨日、ハナが祭りの準備で忙しいなかをぬってアロサの銀行に行き、ホテル経営者の案をきっぱりと断り、何とか借金を返済しますと話したそうです。銀行側は、それではしばらく様子をみましようと思ってくれたのです」

拓郎は耳を傾けていた。

「借金は、僕たちの手で必ず返済します。父さんからのお金をどうするかは、今は決めていません。とりあえず、ハナの銀行口座に入れておきます」

「そうか」

「父さんの胸の内、いつかハナに伝わると思うのです。ただ、お金ではなく」

そこまで言うて、正樹は口を噤んだ。今の父は、もうそのことはわかっていると思ったからだ。息子が父を正視した。

「あのお金は銀行に預けておきます。父さん、ありがとう」

「お前は、優しい息子だ」

そう言うてから、拓郎は目を瞑った。

今度は、父が話し出した。

「この一ヶ月間、いろいろなことを考えさせられたからな。大自然はいいな。ここにいると、心が清くなつて、謙虚になつて、人を思う気持ちが湧いてくるな」

息子は肯いた。開け放しの窓からは、小鳥たちの囀りが風にのつて入ってきて、部屋内に響かせていた。正樹が腕時計をのぞいた。昼食前の十一時、レストランに客が押しかけてくる時間だった。彼は、ソファアから腰を浮かせた。

「お母さんの墓に、ドライブフラワーにしたこの花々を持って行ってください。ハナが作ったものを、僕が束にしました」

そう言って、彼はそれを父に手渡した。

「わかった。日本に着いたら、すぐに母さんのところに持って行こう」

ドアのほうへ向かつて歩き出した正樹が、振り返った。

「これから夜中まで忙しくなるので、父さんと話をする時間がもうないと思います。ハナも同じでしょう。明日の朝、ここを発つてクーア駅へ向かうときは、ハナと二人で行ってください。僕も一緒に行くと言ったら、彼女は拒みませんでしたので」

「わかった」

父は静かに応えた。

真夏の太陽が照りつける午後一時になった。村の草原の上では、皮の半ズボンを穿いた男たちが格闘競技を繰り広げはじめた。円くなった砂場の周辺には、百名近くの人たちが歓声を上げていた。相撲に似たこの競技、この地方の名物らしく、見物客が続々と押しかけて来た。拓郎はバルコニーで、その様子を眺め続けていた。

少しすると、ハナが寄ってきて、何も言わずに双眼鏡をテーブルの上に置いていった。三時間続いた格闘競技が終わり、次は民族舞踊の時間となった。舞台は、アルペンローゼのバルコニーだった。民族衣装を身にまとった老若男女の人たちが、集まりはじめた。色鮮やかな服は、祭りの気持ちより高揚させ、着ている人、見ている人、誰もが弾んだ顔をしていた。

ちようど夕方の五時になった。村長がバルコニーの一段高くなったところに立ち、マイクを持つて挨拶をはじめた。横に長い口ひげをはやした顔は、いかにも山の村長といった風貌さがあつた。

長いスピーチの最後に村長が、

「この場を提供してくれた、アルペンローゼのハナに感謝する」

と述べて、マイクをハナに渡した。それを手にしながら、ハナは村民と見物客に向かつて、

「これから夜の十二時まで踊り続けましょう」

と、言った。再び村長がマイクを手に持った時だった。ハナの隣にいた正樹が村長の耳元で、「僕たちは結婚するので、今日の皮切りの踊りは僕たちからしたいのです」と囁いた。それを聴いた村長は、前にいる人たちにマイクで、

「今年の舞踊の幕開けは、ハナと正樹からにしよう」

と、述べた。とその時、ハナの気落ちしていた顔が一気に晴れた顔に変わった。

音楽隊の奏でる曲が流れはじめると、二人が踊り出した。正樹はダンスの経験がなかったので、最初はぎこちない足の運びだったが、ハナが次第にリードして、二人が一体となつての踊りとなった。その姿に、拓郎は、「正樹、ありがとう」と呟いた。また薫は、兄

のハナさんを思う心に打たれ、目頭が熱くなっていた。

二人が踊ったあと、シウトラウスの村人それに他の村からも五、八名のグループが入れ替わり立ち替わり舞台に立ち、それぞれの踊りを披露しはじめた。時々ヨーデルやコーラスのグループも加わり、見物人を飽きさせるものではなかった。太陽が山の端に隠れたあとも、バルコニーには照明が照らされ、大勢の人たちが賑わい続けていた。

明日の朝ここを発つことになってた拓郎は、十時に部屋に戻って、バルコニーから聞こえてくるメロディーを耳にしながらベッドに入った。

翌日、朝食を済ませた拓郎は、ペンション前の駐車所に行った。車のドアを開けて中に入ろうとする父に、正樹が言った。

「父さんを背負いながら会話した内容を、決して忘れません、体に気をつけて過ごしてください」

父は肯いた。隣にいた薫が、両手をV字にして声を出した。

「お父さん、わたしが帰ったら、ここで教わった料理を家で作るわ」

それを耳にしながら、父は助手席に座った。

車が走り出した。ハナと拓郎はお互い言葉を交わさずに黙り続けていた。

少しすると、拓郎が隣で座っているハナに、「昨夜、祭りはいつごろ終わったのだろう？」と話しかけようとしたが、前を向いて口を閉ざしている彼女の姿を見て、彼は声をかけることができないでいた。半開きの窓から入ってくる風の音だけが、拓郎の耳に届いていた。

しばらくすると、シモーネ橋が見え出した。車は停まり、二人は何も語らずに、道路から少し離れたところに立っている十字架へ向かった。

二人が十字架の前に立つと、ハナがペンションの周辺に咲いていた色とりどりの花を花入れに挿した。拓郎も胸のポケットから、シモーネの墓から持ってきたアルペンローゼの花弁を取り出して、それを十字架の下に置き、手を合わせた。ハナはその二つの花弁をじっと見続けていた。

車が再び動き出した。五分ほど走っていると、三頭の馬が朝日を浴びて弾むように走っているのを見た拓郎は、心の中で呟いた。

「あそこにいる馬たちは、三週間前に日本に帰るときに見かけた三頭ではないか。あのときは、三頭とも死んでいた馬の傍で、共に悲しんでいたのに、今はあのように躍動して走り回っている。彼らは、死んだ仲間のことを決して忘れていないのだろう。だから、あんなに生き生きしていられるのだ。彼らの胸のなかに、死んだ馬と一緒に過ごした日々のごとく今も宿っているに違いない」

彼は、それに較べて自分とは思いつつ、馬たちをじっと眺め続けていた。

車内には、モーター音だけが響き渡り続けていた。

終章 『共に』の中で

「これを口に入れると、あの夏の日々のことが浮かんでくるわ」

そう言いながら、薫はキッチン兼ダイニングのテーブル上でグツグツと煮立っているチーズのフォンデュ用なべに、再び千切ったパンを入れた。

「そうだな。あれから、もう四年が過ぎたのか。早いものだ」

父も金ぐしに小さなパンを刺し、蕩けたチーズの中にそれを入れ、丸めるようにして口に運んだ。

「いい味だわ。お父さんがこのような料理を作るなんて、考えもしなかったことだわ。それが、あの夏以来、お父さんは変身していったわ」

拓郎は、それには応えずにいた。が、彼の内心は、自分の過去の苦い経験を、その時で終わらせたとの清算で見えるのではなく、それを将来に生き返すほどに自分を見つめ、反省したからこそ、今の自分がいるのだと思った。今までのお金では得られないものを、自分は体験したのだ。あのアルプスに吹くような薫風を感じ取れるようになったのだ。そう思いながら、拓郎はまたパンの小片を鍋に入れた。

少しすると、父が娘に言った。

「薫も変わったな」

「そうね。わたしの博士論文のテーマだった『記憶が新たな文化を創り出す』ということ、ナチスの戦争犯罪・ホロコーストを引き合いに出して、ドイツ国がいかに過去の歴史を反省し、克服しながら現在の社会を創り出したかを書き、そのあと、日本は慰安婦問題・歴史認識がどうだったのかをドイツと比較して書いたでしょ。さいわい、合格し、博士号を取得できたけれど、評定は低かったわ。社会のなかで共有する記憶が、新たな文化を創り出すことができるというドイツの過去の歴史を提示したのに」

彼女は続けた。

「でも、それをソンヒ伯母さんが完璧に韓国語に訳し、キーンソンおばあちゃんに渡してくれたわよね。そしたら、おばあちゃんは一気に読んでくれたわ。そして、彼女がそれを韓国に住んでいる知人たちに送ったわよね。そしたら、それを読んだ一人の大学学長から、わたしをぜひ講師にしたいとの依頼の手紙が届いたでしょ。ちょうどおばあちゃんが八十六歳で亡くなる二ヶ月前だったわね。わたしは一大決心して、その韓国の大学で働くことになったわよね。たしかに、変化といえは変化ね」

父は娘が話すのを肯きながら聴いたあと、彼女に訊いた。

「あと何日、日本にいる予定なのだ？」

「学生たちの春休みが終わる一日前に韓国へ戻るから、あと五日間はいるわ」

「仕事には、もう慣れたか。大学で教鞭を執るのも大変だろう？」

「そうね、韓国語をまだ流暢に話せないだけにね。わたしの場合、特別に四年間という契約で大学で働くことになったでしょ。その分だけ外国人の講師という立場でいられるから、自分の研究をする時間はあるわ。日本で非常勤または常勤講師をしていたら、事務的なことにも追われ、自分のやりたい時間が十分にとれないと思うので、今の職場はその点ではいいわ。とにかく、わたしは日本と韓国が共に共有した歴史を見つめるようにして、お互いが認め合うようになってほしいの」

彼女はそう言うてから、金ぐしにパンを刺し、煮立っているチーズ鍋に入れ、それをフウフウとふきながら口に入れた。

「あたたかくて美味しいわ」

その彼女が、今度は父のほうに顔を向けた。

「たしかに、ここ二年間、日本に帰っていなかったけれど、休みは列車で一時間ほど行ったところの、キーンソンおばあちゃんのふるさとで過ごしてもいたわ。親戚の人たちがいつも歓迎してくれたわ。それが、とてもうれしかったわ」

「そうか」

「お父さんは一度も訪れたことがないわね」

「ああ、そうだな。そのうち、おまえのところに行った際、そこへ寄ってみようかとも思っている」

「わたしね、思うのよ。キーンソンおばあちゃんはおじいさんに連れられて日本で移民の生活がはじまったでしょ。彼女は二十歳まで韓国の文化と歴史のなかで育ち、とくに戦争中のこともあって、それを背景にしながら日本で暮らすことは、かなり苦しみもあったと思うの。それは、おばあちゃんと話をしているとしばしば感じたわ。博士論文の評価は、日本の大学ではなかったけれど、韓国ではあったわ。その理由は、お父さんにはわかるわよね」

拓郎は、音も立てずにビールを飲んだ。

しばらくすると、父が娘に訊いた。

「薫が住んでいるところは韓国の北部なので、寒いのではないか」

「お兄さんのところよりは寒くないわ。雪もそう積もらないし」

「シュトラウス村は、五月中旬まで雪があると正樹が話していたな」

「そうね。今は数メートルも積もって、多くのスキー客で賑わっていることでしょうね。ハナさんは大した人だわ。三年前に彼女が先頭になって働きかけて、村の近くにリフトが設置したでしょ」

薫は、煮立っている鍋にパンの小片を入れながら続けた。

「今は、アルペンローゼに一年中お客が来るようになって、ペンションはいつも満室ですよ。そのおかげで、借金はすべて返済したと、お兄さんからのメールに書いてあったわ。

それに、この冬が過ぎたら、隣の空き地に母子家族用の休暇用住宅を建てるそうよ。山小屋風の造りで、三家族が休暇を過ごせるようにと計画をしているらしいわ」

「そのことは、ハナからの手紙で知っている」

「ハナさんから、手紙がくるようになったの？」

娘は、父の目を見ながら訊いた。

「ああ、おまえが韓国の大学で働くようになって、しばらくしてからな」

「あのとときの夏以来、お父さんはハナさんに毎月のように手紙を書き送っていたわね。でも、返事がまったくなかったわね」

「ああ、そうだったな。三年間、何の返答がなかったな。当たり前のことだ」

「今まで人に手紙を書いたことのないお父さんが夜中に時々起きて、机に向かっていたわね。あの三年間、何を書いていたの？」

「シモーネとのことや仕事のことを書き綴っていたな。でも、そのうちに父さんの毎日の暮らし、とくに家族のことやまわりの人たちとの触れ合いについて書くようになったのだ。と、ある日、ハナから初めて一通の封書が届いたのだ。それを開けてみると、マーガレットの顔が大きく写った写真が一枚入っていたのだ」

「お兄さんの二番目の子供ね」

「ああ、そうだ」

そう声を出してから、父は続けた。

「その顔写真をよく観ると、ハナの耳たぶと同様なほくろがマーガレットの耳にも、二つあったのに気づいたのだ」

それを聞いた薫は、自分にもあるほくろに手を当て、これから父が何を言うのかに耳を澄ませた。

「写真の裏には、ハナの手書きで『あなたと同様にマーガレットの耳にも大小二つのほくろがあります。彼女は私とマサの子、そしてあなたの孫です』とだけが記してあったのだ」

父は、一息入れてから続けた。

「その写真を再び観てから、すぐにハナに手紙を書き送ったのだ。そしたら、彼女から返事がきたのだ」

薫は父の和らいだ顔を見つめていた。

「そこには、『今まで送られてきた三年間の手紙は、封筒を開けずに机の奥の引き出しに入れていましたが、すべて封を切って読みました』と綴られてあったのだ。それ以来、父さんが手紙を出すと、必ず返事がくるようになった」

拓郎は再びビールを一口飲んだ。

「父さんが手紙を書かなくても、ハナから手紙が届くようになった。そこには、正樹や孫のカイやマーガレットのことがよく記されてあったな」

「そうだったの」

父がよろこびに満ちた顔で孫のカイとマーガレットの名前を言ったのを見て、薫は微笑んだ。彼女は続けた。

「これから建てる家の名前、エーデルワイスと名づけるそうよ。それに要する費用は、お父さんがハナさんに送ったお金をもとにしてするそうよ。兄からのメールのなかで、そう書いてあったわ」

「ああ、いいことではないか。父親のいない家族に、憩いの場を提供するのだから」

拓郎は自分の過去を省みながら、しみじみとした口調で言った。

「わたしも、そう思うわ」

薫も大きく肯いた。

湯気の立っている鍋に、拓郎がパンを入れた。

「二人の孫は、いくつになったかな」

「三歳と一歳よ。お父さんのところにも、カイとマーガレットが一緒になって撮った写真あるのでしょ？」

「ああ、二ヶ月前に受け取ったハナから手紙のなかに、歩き出した彼女の写真が入っていたからな。秋になったら皆で日本に訪れたいとも書いてあったぞ」

「ほんと！ それはいい知らせだわ」

拓郎は蕩けているチーズにパンを巻きつけて、フーフーと息を吹きかけながら口に入れた。薫も同じようにしてパンを口に運んだ。

「彼らが来たら、京都へでも行こうかとも思っている」

「そのときは休みを取って、わたしも一緒に行くわ」

娘と父との会話が、このように弾んでいくとは以前にはなかったことだった。

「お兄さんがここに来たら、驚くと思うわ。一年前にお父さんからもらった手紙のなかで、お父さんの店が三つから一つになったと書いてあったわね。なぜ、五反田店と品川店を閉じたの？」

「五反田店は、まわりの人たちのことも考えずに、父さんが強引に店を開いたので周辺の人たちと摩擦が多かった。これではいけないと思い、手を引いたのだ」

「品川店は？」

「あれは目黒店の改築費用をつくり出さねばならなかったので、店を売ったのだ」

「そうだったの。目黒店は時計・貴金属店から、時計・メガネ店になったわね」

「ああ、宝石業をやめてメガネを扱うようになったのは、ソンヒが以前働いていた千葉のメガネ専門店を辞めたこともあってな。彼女と娘の由里子に目黒店で働くように持ちかけて、それが実現したからだ。二人とも、よくやっているぞ。最近は、視力に問題を抱えた子供たちや高齢者たちがよく来るようになった」

「地域の人たちに、よろこんでもらっているのではないの？」

父は肯いた。

しばらくすると、娘が父に訊いた。

「由里ちゃん、もう何歳になったのかしら？」

「おまえよりも三歳年下だから、二十八歳か」

そう応えた父の顔を見ながら、娘が言った。

「今のお父さんの顔、生き生きしているわ」

「そうか。今は車で店へ行くのを止めて、三十分ほどかけて目黒の店まで歩いて通っているぞ」

「健康のために、それはいいわね」

「通りを歩いていると、毎日何か新しいものを発見するのだ。これがたのしい。そうすると、今住んでいる地域を大切にする気持ちが生じてくるのだ。と同時に、自分はこのようにななかで、生かされているのを知って感謝する心が生じてくるのだ。以前にはなかったことだ」

「そうなの」

薫は空になった父のコップに再びビールを注ぎながら、父が今のように前向きに生きているのは、あの夏の日々があったからこそだわと思った。

父は、こぼれそうになったビールを見ながら、

「次に来るときは、おまえが作ったキムチを持ってきてくれないか」

と言うと、薫はニコリして、

「わかったわ。韓国に戻ったら、すぐに送るわ」

と、応えた。

拓郎は、旨そうにビールを飲んだ。